

ふるさと

# 海東

第二十二輯



潮来市郷土史研究会



大生殿神社 御祭神大生彈正定守公石表文



大生彈正平定守世領常州大生邑自祖先專  
武名至定守父五代敢死於戰場其後定守仕  
土井大炊頭利勝慶長十九年赴大阪之役十  
二月十四日病死於駿州藤枝嫡子仁兵衛定  
仍仕利勝別賜祿故某嗣家督利勝掌天下權  
之時列國諸侯太夫有來欲告利勝者必令定  
仍達之某亦預利勝恩顧利勝卒時別有命令  
鞠育數誨幼子能登守利房矣定仍慶安三年  
病死其令六旬有四年不幾雖不能立身行道  
欲揚名於後世以顯父母故表石

明曆二年丙申七月

大生市左衛門定年 敬書焉

この石碑は、ご祭神彈正定守公の次男定年の  
建立になるもので、本殿裏に建物に密着するよ  
うに建てられていた。

平成一七年三月二一日午後〇時四〇分頃、不  
審火により大生殿神社は本殿・拝殿共全焼して  
しまった。

本来なら、直接目にすることも出来なかつた  
明曆二年の碑文も白日の下に晒されることにな  
ってしまった。

唯、本殿内に安置してあつた祠と納めてあつ  
た御神像が、何ら損傷もせず残つていたこと  
は、御神徳と云うか、地元民の信仰心の力か、  
奇跡に近いことであつた。〔津賀 信記〕

潮来市郷土史研究会

平成18年度  
会員視察研修記念



平成17年 5月17日  
於、栃木県黒羽町 雲巖寺

## 目次

地方自治に生きた	
「治水の父」須田誠太郎	1
潮来の稲荷神社の創建の時を問う	9
月讀神社社歴について	13
切手になった潮来と周辺	15
歴史と小学唱歌	18
私はタンゲンであった	
— 海軍新兵から復員まで	21
戦いに明け暮れて	26
第二次世界大戦中の暮らし	28
藤原 鏝四郎	1
今泉 元成	9
秋 永 守	13
小沼 正司	15
相田 春江	18
小沼 善治	21
窪谷 益雄	26
山澤 幸次	28

学童疎開のこと	谷 玄明	37
潮来の想いで	横浜市 土屋百合子	
引揚船の「葬送の汽笛」	坂本照子	41
ゆとり教育とエデュケーション	土子幸三	43
さらば八町庚申講	尾崎 廣	45
あるひの史跡散歩	窪谷 悌二郎	63

**参考資料**

昭和一二年度・潮来町町勢要覧	山澤 幸次	100
----------------	-------	-----

会 員 名 簿

編 集 後 記

表紙 写真提供 山澤 幸次

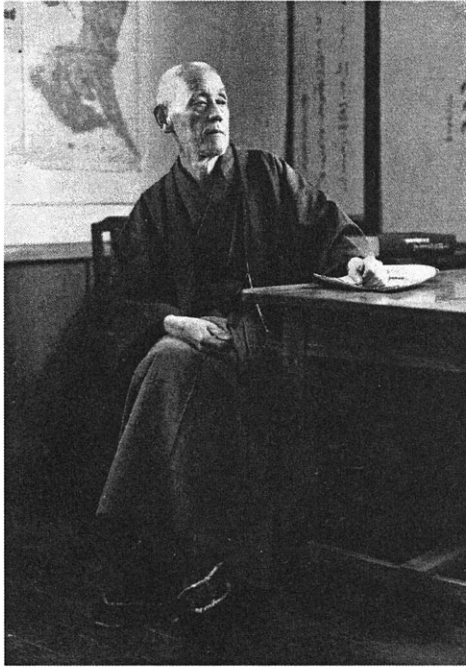
# 地方自治に生きた「治水の父」

須田誠太郎

藤原 鏡 司 郎

一、功績をたたえて

— 明治・大正・昭和を生きる



晩年の須田誠太郎翁

明治百年を契機に制定した昭和四十二年十一月十三日の「県民の日」の佳日、県民文化センターの大ホールを県花「ばら」で飾り、千余人に及ぶ各層、各界の人々が集い、県民の

日大会を開催。この記念事業の一環として茨城県編集『特別功績者小傳』（内田信也・須田誠太郎・辻永・久原房之介・小平波平・飛田忠順）を刊行する。

その序文に県知事岩上二郎氏は「受賞者代表として壇上に立たれた須田氏の白髪瘦軀、和服着袴のご容姿は、明治・大正・昭和の三代にわたってその生涯をかけられた六人の方々のそれを象徴するかのように清れつな厳しさがあふれ、私ども深い感銘を覚えたところでございます」と述べている。

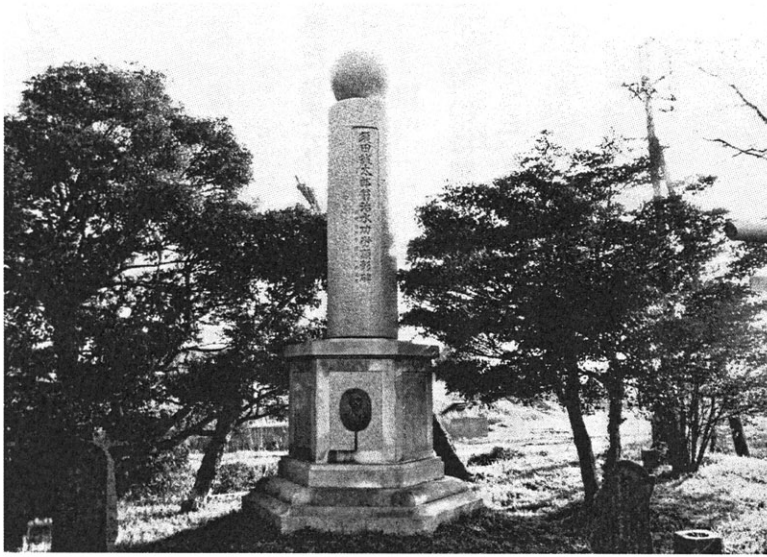
なお、功績を録した顕彰碑が、水郷の景、明媚な北利根川のほとり、潮来市永山地先に建てられ、偉業を後世に伝えている。『須田誠太郎翁治水功労顕彰碑文』によれば、—

須田誠太郎翁はその生涯を通じて、地方自治の確立、教育の振興、産業交通の開発、土木事業の整備等に尽力され、地方住民の福祉向上のため偉大な貢献をされた。なかでも利根川下流霞ヶ浦、北浦沿岸等の脅威である水害に対しては、父祖以来の宿願を承継いで、妄執とさえ思われる不撓の熱意をもち、官に説き、民に勧めて多年にわたり挺身して、対策の樹立と、その実現に当られた。

これらの地域の頻繁な水害は、広域に及んで市街部落を浸し、田畑を冠したため住民は生業に安堵する暇となく、その惨害は筆舌に尽くし難いものがあつたが、大

正時代に入るや、翁の献身的努力は漸く実を結び遂年治水事業の劃期的施策の実現をみるにおよび、住民の生業も漸次安定をみるに至った。

これ即ち翁の功績に負うところ多大にして、地方住民から「治水の父」として、敬慕されているもまことにむべなるかなであり衆人周知の藍綬褒章、さらに叙勲の栄



治水功勞顯彰碑

に浴された事もまたけだし当然と謂うべきであろう。  
翁も今や齡八十四白顔瘦軀、独居して静かに老を養う、  
今茲にその大功を碑に刻し後世に伝えて偉徳を顕彰する。

昭和四十年豊秋十月

茨城県知事 岩 上 二 郎 撰

梅 碩・石 橋 博 書

## 二、生い立ち

### 一 地方人としての生活に入る

明治一四年（〇歳）

八月二十六日 行方郡香澄村大字牛堀に須田家の長男として出生

父 幹 三、 母 千代子

明治二一年（七歳）

牛堀尋常小学校に入学

明治二五年（一一歳）

牛堀尋常小学校を卒業

行方郡麻生高等小学校に入学（百瀬年亘校長）

父から四書の素読を学ぶ。

明治二九年（一五歳）

麻生高等小学校を卒業

鹿島郡鹿島町 吉川松浦の家塾に入舎、日本外史その他を学ぶ。

明治三二年（一八歳）

九月、東京遊学を志すが許されず、夜間吉川塾を脱走、徒歩で上京する。

明治三二年（一九歳）

大成中学校二年に編入学

明治三五年（二二歳）

足尾鉍毒事件に田中正造の傘下で運動、利根川の上流野州地内を見学する。

明治三六年（二二歳）

大成中学校を卒業、明治大学予科に入学

明治三七年（二三歳）

明治大学本科（商科）に入学

明治四〇年（二六歳）

明治大学を卒業

千葉縣香取郡吉田村 林伝兵衛の妹、節子と結婚

明治四十三年、大洪水があり、その春に親愛深い祖母に逝かれ、冬には慈母が洪水のため心臓を痛め亡くなる。父の孤独を見るに忍びず、遂に地方人としての生活に入るの止むな

き状態となった。

後年、次のように語っている。「誠に無念といおうか、残念といおうか。これも一向に洪水のためなり。洪水はわが仇なり。これと戦い、撃滅しようと思つた次第です。それが生涯の仕事であり、母の仇討ちであると思つたのでした。私の治水七十年の歩みは、この執念にあるのです」と。

なお、治水に身を入れた動機というか、その素地については、自著『夢の八拾八年』に、「私が中学四年の頃、足尾鉍毒事件が重大問題となり、一般の注意を引いた時なので、私も同志と実地に視察し、その悲惨なる状況を見て黙し難く、当時鉍毒事件の首脳者たる田中正造先生の傘下に参加し、運動をおこし、渡良瀬川、足尾地方に奔走したが、先生の直訴事件で止みました。

父の同期県議の小久保喜七代議士は利根川治水ではその人ありと言う程の人物で、父の親友でしたので、使いに度々先生を訪問したので、利根川研究を指導され、お供して利根川の水源を視察しました。今の水上温泉には家は一戸もなく、煙が立ち水が流れておる位でした。先日竣工した（やさきダム）の場所は渡良瀬川に沈んだ民家も見えてきました。徳川幕府が利根川の東京湾流入を江戸に食糧運搬その他の関係で変更させた権現堂の開門横堀川等を視察し、利根川に対する知識を得ました。其の後私は東京遊学中、『利根川図誌』を持つ

て沿岸を徒歩で往復したことも数回あります」と。

### 三、治水に生涯をかける

災害の不幸は、またしても訪れた。昭和十年、真壁、筑波地方を襲った集中豪雨は、霞ヶ浦、北浦、利根川に明治四十三年に次ぐ大洪水をもたらし、さらに続いて昭和十三年、十六年と相次ぎ、地元を惨たんたる苦しみにおとし入れた。

この日のことを回想して、「昭和十年、十三年、十六年と相次ぐ三回の大洪水による被害は、誠に大きいものがありました。私はこの十三年の洪水は先に母の仇討ちとして、数々の施策を試み、ようやく治水に成功したかに見た私への水の復仇ではないかとさえ思われ、感慨無量なものでありました」と述べている。

ここに須田翁が推進した二つの大きな治水事業をたどってみる。まず、利根川の水を東京湾に注ぐ計画を立て、その実現を図る。昭和十一年十月、東京・埼玉・千葉・栃木・群馬・茨城の一府五県の治水関係有志による「利根川治水協会」を結成する。また、昭和十三年十月には沿岸六十余ヶ村による「霞ヶ浦・北浦治水協会」を発足させ、その会長として運動を主導する。

各県の代表者が、それぞれの県の利害を超え、小異を捨て

大同につく熱意が実を結び、一部予算化も認められその工事の具体化が見通されるに至った。しかし、この工事が非常な難工事であること、加えて太平洋戦争の勃発という異常事態に直面することになり、遂に、この工事は中止のやむなきに至った。

次の計画は、幕末から明治にかけて進められた霞ヶ浦、北浦の水を鹿島灘に放流する目的の居切掘割の工事を完成させ、その目的達成を図ることだった。

昭和十八年十一月の通常県会には、霞ヶ浦、北浦治水問題に関する意見書を提出、また同県会第三部委員会（土木）でも、霞ヶ浦および北浦の洪水水位低下に関する施設の着工促進が要望事項として決議された。しかし、この計画も不幸敗戦という事態の前で挫折のやむなきに至った。

敗戦後の混乱のなかで、治水対策がようやくその緒についたのは、昭和二十五年のことである。それは、利根川水系の完全治水をめざした「利根川改修増補改訂計画」が策定され、霞ヶ浦治水事業が独立の取扱いとなったからである。かくて、翁のめざした治水の事業は一步近づいたといえる。

さて、翁の治水観を示すものに、昭和二十八年二月十日付けの「旧霞ヶ浦北浦治水協会長・須田誠太郎」として同志有志に配布した檄文がある。

——久しく御無沙汰致して申しわけありません。

回顧すれば昭和十三年の霞ヶ浦、北浦の大洪水を機として治水協会を同志の皆様と組織し、多年にわたり難局時代に此が完遂を奔走したるも時利あらず、十数年を経過し今日に至り、私共の主張来たりし霞ヶ浦北浦水系と利根川水系を遮断する閘門も常陸利根川末端付近に計画せられ、従つて居切掘割川の開さくも必要性を生ずる。遠からず北利根川浚渫工事は着手せられつつあり、霞ヶ浦北浦治水問題も真面目に研究実施の運びとなりました事は御同慶に堪えません。

然るに最近の状勢誠に遺憾の点二、三あります。根本を研究せず、付焼刃的の治水論者の多く政治運動に利用せられたり、単に堤防強化にのみ主眼としたり、干拓のみを云々する食糧増産の美名による農林行政に土木行政が圧迫せられ、治水の根本策をあやまれんとする傾向です。此際私共は真面目の治水研究者を為政者に要求するのです。依て其の進出も望みます。同志各位十数年前に若返り、従前の勢いを以て霞ヶ浦北浦治水問題邁進目的完徹に努力あらん事を御願し貴意を得ます。――

#### 四、地方自治に生きる

大正七年（二七歳）

九月 香澄村村長に就任

以後、昭和八年十月まで十五年間引き続き村長を勤める。  
大正一一年（四一歳）

鹿島農学校の誘致に努力する。

昭和二年（四六歳）

九月 県議會議員に当選

麻生中学校の建設に努力、これを実現させる。

昭和四年（四八歳）

鹿島神宮橋架橋を実現させる。

県薫工品改良協会を組織し、その副会長となる。

昭和五年（四九歳）

茨城県農工銀行監査役に就任

昭和六年（五〇歳）

北利根川の架橋を実現させる。

行方郡水産農会長となる。

牛堀に公魚・白魚の販売所を置き、その主任となって活躍。

三月 県農会長より表彰

九月 県議會議員を退く。

昭和八年（五二歳）

十月 香澄村村長を辞任

昭和十年（五四歳）

二月 香澄村村長に再び就任

昭和十一年（五五歳）

水郷大橋架橋を完成させる。

昭和十三年（五七歳）

二月 知事から農業改良功労者として表彰

四月 県町村会長から自治功労者として表彰

四月 全国河川協会会長から治水功労者として表彰

昭和十四年（五八歳）

九月 県議会議員に当選、以後、昭和二十二年まで在職

九月 香澄村村長を辞任

昭和十八年（六二歳）

潮来町立技芸学校の県立移管を実現させる。

昭和二十一年（六五歳）

十二月 知事から県政功労者として表彰

昭和二十二年（六六歳）

四月 県議会議員を辞職し、香澄村村長に就任

昭和二十三年（六七歳）

七月 香澄村村長を辞職

昭和二十四年（六八歳）

四月 県水産会長から水産功労者として表彰

七月 建設大臣から河川事業功労者として表彰

昭和二十五年（六九歳）

二月 五たび香澄村村長となる。

昭和二十八年（七二歳）

一月 全国町村会長から自治功労者として表彰

五月 知事から農業特産振興功労者として表彰

昭和三十一年（七四歳）

四月 香澄・八代両村合併して牛堀村を成立させ、その初

代村長となる。

十一月 町制施行、初代町長となる。

昭和三十一年（七五歳）

七月 牛堀町町長を辞職

牛堀町名誉町民にあげられる。

「町長退職に際し 須田誠太郎」

——回顧すれば……

私は此の長い地方自治生活にも拘はらず何等政治上の汚名も受けることなく過ごしてきましたが、これは私個人として又御後援下さった町民の皆様に対しても申し訳出来得る事と思へます。……

終りに私は町民各位に御別れの言葉として申し上げたいのは牛堀町の将来です。交通の焦点たる此の地です。本町中心にあらざるとするも、水郷市建設の大理想にあらざれば従に麻生、潮来何れかに併合合併は極力避けて独立の立場にある事です。——

五、終焉しゅうえん

― 鹿島開港を迎えて

昭和四一年（八五歳）

五月一日 頭彰除幕式出席



須田家の門

（天保年間建立・町指定文化財）

昭和四三年（八七歳）

十一月十三日 明治百年記念特別功績者代表として式典に

出席

昭和四四年（八八歳）

八月二十六日 米寿の内祝

十月十五日 鹿島港開港式

十月十七日 自宅にて永眠

十月二十一日 自宅葬

十月二十六日 町葬

祖父須田重作が慶応年間、水戸藩の命により、居切掘割の工事に関係して以来、翁自身も霞ヶ浦北浦の洪位低下のため、治水協会を設置し、再開運動を展開した。

岩上知事がこうした経緯から、ここにヒントを得て、居切掘割を中心として近代土木事業の最新鋭技術を導入して、遂に鹿島港開港の偉業を成し遂げた功績を高く評価していた。まさに居切掘割に寄せた執念が鹿島開港で実ったと解したけである。

この一連で治水と利水の今昔を箕輪徳二郎氏は『須田誠太郎翁夜話』の中で、順序をたてて整理し、その終りに

― 待望の十月十五日、自宅に紅白の幕を張り、家の内外を清め、自らも顔や口、手を拭き、枕元に紋付羽織袴を揃え、

日頃懇意な人々數十人を招き、紅白の餅とすし折りを出して饗応し、テレビの実況中継によって写し出される開港式の情景を喰い入るようにつめ、晴れの開港式に張りつめていた気力がゆるんだのか、急に弱まっていった。治水に生き抜いた翁の執念、大往生というべきか。——と、結んでいる。

(付記)

(1) 義父の須田奨朔の手元にあった、

明治百年記念『特別功績者小傳』（茨城県）

須田誠太郎著『夢の八拾八年』

箕輪徳二郎著『須田誠太郎翁夜話』

を参照した。

また、長男禎一氏の夫人、ひさ姉からの貴重な資料の提供を感謝する。

(2) 須田家に伝わる古文書については、昭和二十七年須田誠太郎から、国文学研究資料館内の国立史料館に譲渡。昭和四十六年、その他の資料については、長男禎一から茨城県立歴史館に寄贈、「須田家文書」として保存されている。

なお、須田禎一の旧蔵書・二千五百十二冊は遺族から茨城県歴史館に寄贈、「須田家文庫」として別置、蔵書目録も刊行されていることを付け加えておく。



明治19年当時の潮来・牛堀地方の地形図

## 潮来の稲荷神社の

### 創建の時を問う

今泉元成

稲荷神は全国津々浦々至る所に祀られ、四万とも三万とも数えられるという。それこそ神社や寺院の境内に、都会ではビルの屋上に、それぞれの屋敷に祠が建っている。そこまでは乱立するに至ったのは何故か、宗教辞典等からなぞってみると、概ね以下のようなのである。

平安時代に入って、先ず真言宗と結びついて広がり始めた。それは稲荷神を、茶枳尼天だきにてんと同一としたからである。

茶枳尼天は夜叉やしや・羅刹らせつの一種で、神通自在の力を持ち、半年前から人の死を知り、心臓を取って食らうという。また本体は靈狐とされ、これに福德を求めた。キツネは稲荷神の使いとされ、さらにはキツネ自身が稲荷神でもあると考えるようになった。

平清盛は、キツネを弁財天の化身として尊重し、世上ではそのご利益で榮進をとげたと「源平盛衰記」に書かれている。

この本は、「平家物語」が語るものに対して、「源平盛衰記」は読みものとされ、記事の精密なことで知られている。

天慶五年(九四三)には正一位稲荷大明神の神階を受けたが、これは祭神の尊卑とは関係なく、祀る神社によって区々なのが本来である。

室町期になって商工業が発達してくると、福德をもたらす現世利益の神として信仰されるようになった。それにキツネの尾の形が「如意宝珠」に似ているところから、思いがかなったりして縁起がよいとされた。



稲荷山に鎮座する稲荷神社

江戸中期にはますます人気が高まり、赤い鳥居に神殿には石のキツネを配し幟を立てた稲荷社が、続出しもてはやされるようになった。

特に江戸中期の田沼時代、父意行は紀伊徳川家の足輕から六百石の旗本になったが、意次は九代將軍家重、一〇代將軍家治に仕えて累進、遂には大名にとりたてられ、側用人からとうとう老中となり、最高権力者の地位についた。領地も増加回数一〇回を越し、城持大名に遠州相良城主五万七千石を領した。五代將軍綱吉の時の柳沢吉保と並ぶ、出世頭の双壁と言える。幕政の中樞に在っては、これまでの政策の逆を行く、重商主義政策をとり、株仲間を許し、運上金や冥加金をとってこれを保護した。そのため、

役人の 子にはにぎにぎを よく覚え

という川柳がつくられたように贈与が横行したことを風刺したものである。因みに彼の栄進ぶりを年表にすると、次のようになる。

宝暦八年(一七五八) 三十九歳の時大名、幕政の最高

司法機関評定所

明和四年(一七六七) 側用人、二万石に加増

明和六年(一七六九) 老中格

明和九年(一七七二) 老中、五十四歳

ではいっただい、このような異例の出世をとげることができたのはなぜか。本人の政治的才能、將軍の重用等があったこととはうなずけるが、周囲のスズメたちからは、居宅にイナリを祀っていたのでその靈験によるものとの評判が専らであった。そうなるに先ず武士の間で稲荷を屋敷神として祀ることが流行し、やがて町家に次には農村にと、噂が噂を呼び、地域一円はおろか、末広がりに僻遠の地まで及んでいったという。

潮来の稲荷山と言っても、不案内の方もおられると思われるので、この地が曾って何らかの形で、歴史上の舞台に登場したことがあるかどうかを拾ってみると、先ず第一は、このような狭隘の土地に古墳群があるということである。

前方後円墳が三基と円墳が五基もよりそって密集している。六世紀末から七世紀の初頭の古墳時代の終末期のものという。このころになると、中央からの規制が関東一円に及び、三〇〇年余続いてきた前方後円墳は造営停止となるので、この古墳は造営禁止のギリギリのものと考えられる。すぐ隣り合わせて五世紀初めの浅間塚古墳があるが、霞ヶ浦沿岸の古墳五世紀初めで、全長八メートルに対し、こちらは二二メートルと規模も時代も好対照となっている。周辺は古墳の宝庫で目白押しにある。

第二は『常陸風土記』に、古代の交通制度「駅伝」の記述が出てくる。畿内・東海・東山・山陽・山陰といった幹道の外に支道もあった。香島道もその一つで、お役人たちは常陸国府（石岡市）を出て、玉里村、小川町を経て、玉造町泉に想定される「曾尼駅」を通り、行方台地を東に進み、潮来の稲荷山とその下の長勝寺域に想定される「板久駅」に着き、これより先は「流海」を渡って鹿島神宮に至ったものである。曾尼駅の条に記述されている「香島に向ふ陸の駅道」の終点とも中継地点とも言えるのが、ここ稲荷山なのである。北利根川を眼下に、水郷の田園風景が広がる眺望絶景の地でもある。

当時の「駅制」がどのようなものだったか概観してみると、大安以下のようなのである。

まず誰の為のものかという点、官吏だけが利用するもので、一般の者は利用できなかった。人馬をリレーし官人に宿や食を供する所が駅家であった。大化二年（六四六）に設置され、ほゞ四里ごとに国府を起点に置かれた。馬の数も規定され大路なら二〇匹、中路は一〇匹、小路は五匹を常備した。また施設としては厩舎、宿舎、倉庫等があり、労務に服する者は一二〇人位がいて、馬の飼育等に当たっていたという。駅使は

官より「駅鈴」を受け、これをふり鳴らしながら通行した。



長勝寺仏殿脇に建つ駅家跡の碑

第三には、野口雨情が作詞した「船頭小唄」の詩碑が、昭和四〇年に時雨音羽の手になる、それこそ独特の筆致で書かれ建てられている。原題は「枯れすすき」だったが、作曲家の中山晋平が「船頭小唄」と変えて発表した。この詩を、初めは演歌師がはやらせ、つづいて松竹が映画化し主題歌となるや、地方色いっぱい哀愁を帯びたこの歌は、またたくまに普及し、一世を風靡する大ヒットとなった。そして雨情は、「七つの子」「十五夜お月さん」「赤い靴」「青い目の人形」「あの町この町」「雨降りお月さん」等並べたらキリがない程の童謡と共に、創作民謡詩人としても確固たる地位を占めた。「こ

の世では「花が咲かない」と絶唱しつつも、人々の共感と魂のゆさぶりがあらかくぎり、今後も歌いつがれていくに違いない。

以上、潮来の稲荷山について歴史的視点から点描した。命題からいささか遠回りの感も否めない。それでは、この地に稲荷神を誰が、何時、勧請したかを追ってみよう。

この件に関しては、関口秀夫氏（江戸期潮来村郷土）の書かれたレポートがある。それによると、宝暦十三年（一七六三）前述した田沼時代の黄金期、伏見稲荷のご分霊を勧請したが、他ならぬ関口家の当時のご当主であった。初めは屋敷内に祀ったが、屋敷内には既に三峰様が祀られていた。ご両神のお使いが「狐」と「狼」で、かちあうということになり菩提寺の長勝寺に、お稲荷様を引き取ってもらったという。そして安永四年（一七七五）には社堂修復のための資金を、寄進したのである。関口家には長勝寺宝州祖幸禪師が、当家宛に書かれた文書が残っており証拠づけている。

#### 「相渡申一札之事」

一金二十四両也

右者当寺鎮守正一位稲荷大明神社堂為修復料金之

貴殿御事数年被成丹誠出来被下候処於拙僧千万忝

仕合御座候永久社堂金候得者随分致大切以利息金

向後修復相懸可申候……

長勝寺宝州祖幸

安永四年未九月

幕末となり水戸藩主に徳川斉昭が登場、もろもろの改革が行われた。その一つに神道振興、仏教排滅があり、民間信仰まで肅清された。天保十五年（一八四四）（十二月に「弘化」と改元）一月、二十三夜塔・庚申塔まで禁止となった。廃仏毀釈と神仏分離も併行して実施され、寺地に社殿は禁止された。天保十四年十二月から始めるのに八月には社寺明細書を提出させ、僧侶による神社奉仕を禁止、十一月には郡方役人が巡回し検分し嚴重に取締まった。一方、神社は一村一社鎮守制とし、氏子制度が整えられた。

こうして稲荷神社は、長勝寺の管理からはずされたのである。しかし氏子制は弘化元年（一八四四）三月「氏子帖」の作成で始められたが、斉昭の失脚で一部だけの実施に終わった。

潮来の稲荷神社が何時、誰が創建したか流説がいくつかあるので、問題を提起してみた。

地元の方や、関心のある方のご批正を頂ければ幸いである。

# 月讀神社社歴について

秋永 守

未だ嘗て「ふるさと潮来」に、辻に鎮座する月讀神社の社歴などが紹介されたことがなかったので、今回、原文のまま紹介する。

## 月讀神社社歴

抑々往古佛法大いに我邦に隆興せし時に当り、菩薩夜々  
恭々たる靈光を放しければ、人々大いに驚怖奇意（異）の思  
を起し、因て本圀山妙光寺の日具上人を聘し、菩薩を当所に  
勸請して徳大勢至菩薩と尊号を奉れり。時に靈元天皇貞享二  
年卯（乙丑）徳川五代將軍綱吉公の時に当れり。

爾来遠陬、近郷老若、參詣日夜絶えず、利徳毎に新たなり。  
下つて王政維新に至り、社号を奉り月讀神社と尊称す。御社  
殿宇頗る破損せしを以て、村内有志者相謀り、明治十一年今  
の社に改築せり。その造営中の如き靈顯（驗）不思議の事多  
かりき。同十六年甲（癸未）陰曆四月有志者又謀りて新たに  
宮中の正殿を営み恭しく此に遷宮し奉りぬ。爾来神徳日に月  
に新しく洪大無辺測るべからず。

縁日參詣人山をなし社の内外立錫の余隙なきに至る。其の  
功德により子無き者子を得、貧者富を得、病者も癒し、懦者  
も絶えるに至る、其の神徳の大なる窺い測るべからず。故に  
世話人等又相謀りて同二十二年己丑陰曆九月村中老若男女於  
林の地より、赤土を運搬して壱尺高に地形をかため、奥へ五  
間ひき銅の木羽にて屋根替し恭しく今の地へ遷宮奉りぬ、  
尊敬の余り本社來歴の一斑を記し正殿に納むと爾云う。

明治二十二年陰曆九月

茨城県指定有形文化財

昭和四十九年三月三十一日指定

## 当社創立由来（経過一覽）

抑々本社狭矮に付、明治十一年寅八月、延方村大聖殿、或  
る筋より御払下げに相成る処、兼平友七・土子源十郎、両氏  
疾く聞き及び、村内有志と相謀り、金二十八円を以て直に買  
受け、両氏發起者に相立て、普請世話人、

土子惣兵衛 大川喜右衛門 土子源治郎・

秋永半藏 方波見長兵衛 高橋忠吉・

土子庄右衛門 大川五右衛門 内山金四郎・

志村栄七 窪谷忠次郎 木内卯兵衛・

根本八郎兵衛

發起世話人尽力を以つて同年十二月廿三日落成す。

寄付金三百五十円にて普請落成す。

同日遷官式を執行す。撒餅は十五俵余、盛大なる古今の棟上式を遂ぐ。

同十三年二月、妙見尊清正殿、富田村一乗寺住職、加藤日英尊師より、当社奉納に相成り即日安置す。

同十六年四月、村内寄付金百円を以てり寄付を募り、御戸帳奉納す。

同二十一年、御屋根破壊に付、老百円を以て、木羽赤味を以て惣葺す。之は当社の金を以て落成す。撒餅十俵。

同二十三年、石垣金六十円にて落成す。

同二十四年、当社を奥へ五間余金十五円にて曳く。

同三十四年、天水釜老対二十円を以て買受け備え置く。

同三十七年一月、石鳥居一基百二十五円を以て建立す。村内若者老人若者金九円、老人金三円補助す。華表（鳥居のこ）棟上式を執行す。撒餅十五俵、之れは当社金にて有金を以て建る。

同四十一年八月二十三日、絵馬堂前に仮屋根修繕に取掛り、同年十二月廿三日落成す。屋根修繕費六十円絵馬堂百三十五円を以て棟上式を挙げる。

同年四月、本村学校増築に付、本村学校へ金五十円補助す。維時明治四十三年十二月廿三日

四十三年十月廿三日、日時計老個当村窪谷忠次郎より寄付に相成る。

世話人、岡部清六 方波見長兵衛 秋永半蔵  
土子平次右衛門 木内卯兵衛 堀越興五郎

大元帥陛下行幸  
明治四十年十一月十四日、御還行記念碑立つ。

明治四十三年十月廿三日、上等花瓶老対併せて真鍮燭台老対秋永正七より奉納す。

廁場大正二年十二月落成五十二円。  
飽御題目明治二十三年六月廿三日奉納、土子孫三郎。

明治四十四年旧五月廿三日、行方郡長加藤、同年八月十三日文学博士峰田信士殿来参。

月読神社  
(二十三夜尊堂由来の栞より)

# 切手になった潮来と周辺

小沼正司

切手は「趣味の王者」と云われている。世界共通であり、世界では一枚の小紙片に1億をこす評価のものもある。

その国の文化、歴史、風物、習慣、自然が高度な印刷技術で描かれている。世界的に著名な収集家としては、アメリカ第32代大統領ルーズベルトとイギリスのエリザベス女王がよく知られている。

世界最初の切手は1840年5月にイギリスで発行された「ブラックペニー」と云われる切手である。日本では1871年(明治4年)に発行された手彫りの竜切手と云われている「銭四十八文」など4種類の普通切手である。

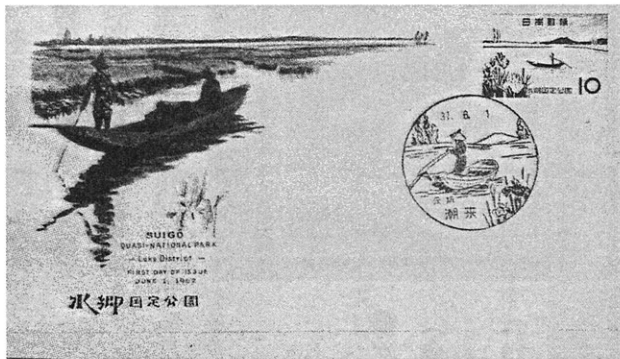
切手の種類は「記念・特殊切手」「普通切手」「公園切手」「年賀切手」「ふるさと切手」「その他の切手」と分類されている。

潮来を題材にした切手としては

## 全国版

国定公園切手(国定公園を題材にして発行された一連のシリーズ)

## 初日カバー



「初日カバー」とは、封筒に切手を貼り発行日に消印されたもの



水郷  
1962 (昭和37年) 6・1 発行

北利根川から筑波山を遠望

地方版

ふるさと切手（ふるさと振興の意図で、地域の風物や行事をテーマにして発行される地域限定のもの）

2003（平成15年）5・20 発行



筑波山と水郷潮来のアヤマメ

2005（平成17年）5・27 発行



国土緑化  
潮来のアヤマメと  
霞ヶ浦・筑波山

周辺切手

不発行切手

皇太子（昭和天皇）結婚式記念  
1923（大正12年）11 発行予定



霞ヶ浦からの筑波山  
（金額と色ちがい2種）

関東大震災で焼失し発行不能となり、一部南洋方面局へ送ったものもどされ関係方面へ贈呈したもので、現在では各18万以上の高値となっている

全国版

第29回国体記念

1974 (昭和49年) 10・20 発行



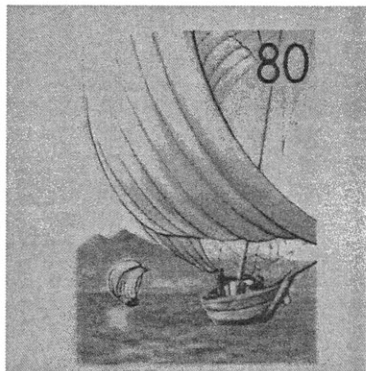
サッカーと

霞ヶ浦の帆曳船

地方版





ふるさと切手

1997 (平成9年) 9・1 発行



霞ヶ浦の帆曳船

切手の消印として風景スタンプがある

	○潮来(イコ) 茨城0120 212101 (2203) 311-2499潮来市潮来103-3 景名削除(1975)50. 8. 4~ 水郷風景、アヤメ、筑波山
	●牛堀(ウシウリ) 茨城084A 212102 (5225) 311-2436潮来市牛堀124 新規使用(1986)61. 1. 20~ 県無形文化財・上戸の獅子舞、霞ヶ浦の帆引き網船
	●延方(ノブカタ) 茨城110A 212103 (6660) 311-2412行方郡潮来町 宮前1丁目20-6 新規使用(1988)63. 12. 25~13. 8. 31 延方相撲、アヤメ、筑波山
	●大生原(オウハラ) 茨城108A 212104 (6630) 311-2403潮来市釜谷250-2 新規使用(1988)63. 11. 15~ 北浦の白鳥、大生神社、ワカサギ捕りの帆船、筑波山

各局に備え付けてあり、希望すれば消印してくれるはずである。

潮来の切手3種は一地区としては、国家的行事があったとしても多いほうである。

ほかにエコーはがき(広告つきはがきで45円と安く、差額5円はスポンサーが負担)に「市の発足」「道の駅」「小堀進記念展」などが発行されている。

また官製絵入りはがきなどでも「北斎常州牛堀」なども発行されている。

# 歴史と小学唱歌

相田春江

唄、

日本の歴史と昔から唄われて来た小学唱歌とは、密接な関係が受けつがれている様です。そうすると私は昔習った唱歌がすぐに頭に浮かんできました。今、NHKで源義経が取り上げられています。

一、馬も四つ足 鹿も四つ足

鹿の越え行く この坂道

馬の越えざる 道理はなしと

大将義経 真先に

二、続く勇士も 一騎当千

ひよどり越えに さしかかれば

平家の陣は 真下に見えて

戦い今や 真つ最中 (鴨越)

三年生か四年生の頃習った唄がすぐに思い出されました。昔の武将と云えば楠正成・正行親子です。その親子の別れの

一、青葉しげれる桜井の

里のわたりの夕まぐれ

木の下かげに駒とめて

世の行く末をつくづくと

しのぶ鎧の袖の上に

散るは涙かはた露か

二、正成涙をうち払い

わが子正行よび寄せて

父は兵庫におもむかん

かなたの浦にて討死せん

汝はここまで来つれども

とくとく帰れふるさとへ

(大楠公)

五年生の頃は、広瀬中佐の唄、

一、とどろく砲音 とびくる弾丸

荒波あろう デッキの上に

闇をつらぬく 中佐の叫び

「杉野はいずこ、杉野はいずや」

三、今はとボートに うつれる中佐

とび来る弾丸に たちまち失せて

旅順港外 うらみぞふかき

軍神広瀬と その名のこれど (広瀬中佐)

六年生の時は、加藤隼戦闘隊

一、エンジンの音 ごうごうと

隼はゆく 雲のはて

翼にかがやく 日の丸と

胸にえがきし 荒わしの

しるしはわれらが 戦闘隊

二、寒風酷暑 ものかわと

艱難辛苦 うちたえて

整機にあたる つわものが

しっかりやって 来てくれと

愛機に祈る 親ごころ (加藤隼戦闘隊)

又、六年生の時は、お国の為に戦って下さった沢山の遺骨が帰って来て、小学校の校庭で村葬と言う葬式がよく行われました。その時は必ず、

海行かば

水漬くかばね

山行かば

草むすかばね

大君の

辺にこそ死なめ

かえりみはせじ

(海行かば)

と、全員で合唱して英霊に捧げたものでした。

戦時中の唄等と悪く云う人もあるかも知れませんが、私は昔の生活を知る上でも捨て難い唄の数々であると思います。

昔の子供達の唄、「牛若丸」、鬼退治をした源頼光の唄、坂田金時など色々な唄が沢山あります。又、私達同年代の四組のグループで「隠岐の島」へ旅行に行った時のことでした。ガイドさんが「後醍醐天皇が隠岐の島へ流されるときに通った山道です」と説明してくれました。私ともう一人の友達と

一、船坂山や杉坂と

御あと慕いて院の庄、

微衷をいかで聞えんと、

桜の幹に十字の詩。

「天勾踐を空しゆうする莫れ  
時范蠡無きにしも非ず」

(児島高德)

とすぐ唄い出しました。

唄を習った時は、意味が分りませんでした。中国の歴史を少し学んで、范蠡と云う忠義な武将がいた事が分りました。そして、児島高德が「今に范蠡のような武将が陛下をお助け下さるでしょう。」と云う意味で桜の幹に書いたのだと分りました。

遠くは日露戦争の時の唄、

一、旅順開城 約成りて、

敵の將軍 ステッセル

乃木大将と会見の

所はいずこ 水師營

二、庭に一本 棗の木

弾丸あともいちじくるく

くずれ残れる民屋に

今ぞ相見る 二將軍

(水師營の会見)

まだまだ沢山ありますが思いついたまま書いてみました。

子供の頃の記憶のままですの間違っているかも知れません。  
そして、最後は『蛍の光』

一、ほたるのひかり、まどのゆき。

書よむつき日、かさねつつ。

いつしか年も、すぎのとを、

明けてぞ けさは、わかれゆく。

二、とまるもゆくも、かぎりとて、

かたみにおもう、ちよろずの、

こころのはしを、ひとことに、

さきくどばかり、うたうなり。

三、つくしのきわみ、みちのおく、

うみやま とおく、へだつとも、

そのまごころは、へだてなく、

ひとつにつくせ、くにのため。

四、千島のおくも、おきなわも、

やしまのうちの、まもりなり。

いたらんくにに、いさお しく。

つとめよ わがせ、つつがなく。

この小学唱歌も、時代と共に歩んだ歌でした。1番から3番はよく歌われご存知の方は多いと思いますが、4番の「千島のおくも、おきなわも、」が時代とともに「台湾のはても、樺太も、」に変わったときもあったのです。

## 私はタンゲンであった

### ― 海軍新兵から復員まで ―

昭和18・19・20年代のこと（抄）

小沼善治

#### ○タンゲンで入団

妙なタイトルであるが、タンゲンとは短期現役兵《短現》の略で、師範学校を卒業して兵役に服した者が、普通の人が兵役に服した場合より短い服役で除隊してこられたのを称してタンゲンと言ったものである。

兵隊は通常三年の勤務が原則であったが、タンゲンは一年で伍長（私の場合は、海軍であったので二等兵曹）で終わって娑婆・海軍用語・即ち社会へ復帰したのである。

私の徴兵検査は元の麻生小学校で行われ、行方郡いっぴいから集まった適齢期の者達と一緒に検査を受けたのである。前夜、湖月旅館へ泊って、必ず甲種合格になるぞと決意も堅く臨んだので、検査官から「甲種合格、二十番水兵」と言われたときは、ホッとした反面ガツカリしてしまった。甲種合

格は嬉しいが、正直のところ私は陸軍のほか全く考えていなかったもので、途方にくれてしまった。

中学、師範と甲種幹部候補生適任証を受けていたのが役に立たなくなったので。

師範の卒業生は必ず水兵となった。難しい技術の習得を必要とした他の兵科（機関科・運用科・航空科・水雷科等々）には採用されなかった。つまりは主砲・副砲・高角砲や見張り等の水兵の仕事をやらねばならなかった。

私は旧制麻生中学校から、東京府青山師範学校第二部を卒業した。一部は中等学校を卒業して、修業年限二年の課程で、他方、高等小学校を卒業して五年修業年限の者を第一部と称していた。

そして私たち昭和十七年卒業生が旧制師範学校の最後の生徒となった。昭和十八年卒業生から専門学校と学制がかわった。

つまりは私達十七年卒業生が、最後のタンゲンとなったのである。私達海軍タンゲンの任務は海兵団で三ヶ月の新兵教育を済ませたら、実施部隊に配置され、艦船勤務の場合、戦艦・駆逐艦・航空母艦（或いは、この逆コースもある）を経て陸上の航空隊勤務で任期満了して除隊する。学校現場に復帰したら子供達に海軍の大切さ・良さ・重要さ等々を周知する任務があった。この期間が昔の方式なら一年であった。（こ

れは平時のきまりであった)

大東亜戦争の拡大と苛烈さはタンゲンの服役年数の短縮は特に告知されることもなく、いつの間にか廃止され一般の兵隊と服役年数は全くかわらなくなってしまった。私の場合も終戦まで除隊はなかった。

### ○師範現役兵とは

私どもは師範現役兵という名称で特別の扱いであった。新兵教育も横須賀第二海兵团(武山海兵团と言われていた)で、三個分隊編成(陸軍なら小隊と同称)で、普通の兵隊が其の年の一月入隊であるのに、私ども師範卒生は四月の入隊であった。

私たちは昭和十七年に学校を卒業して、一年間訓導として赴任先の小学校で勤務して昭和十八年の徴兵として軍役に服した。

私ども徴兵に対して、志願兵と、私達と同年に徴兵検査を受けて一月に入隊した人達がいる。入隊時期が三ヶ月違った同年兵がいたわけである。

私達師範現役兵の海兵团における新兵教育は三個分隊編成で、すべて師範学校卒業生のみで成り立っていたのである。

私達は横須賀鎮守府(通称、横鎮)所属の第四十三・四十四・四十五分隊の三個分隊の編成で、全く特別の海兵团教育

を施された。

私の兵籍(軍人の身分のことで軍籍とも云う)は横徴師四八四号であった。横徴師とは、即ち(横須賀・徴兵・師範)の略称である。

私どもの出身地は、西は静岡県から北は樺太までの師範を卒業して一年経過した者たちであった。静岡より以西は呉鎮守府所属で同様の教育を受けていた。

私ども師範現役兵の他の兵隊と異なっていたのは、帝国海軍で最も進級が早かったことであった。当時、甲種予科練習生が早いと云われたが、この人達より早く進級していた。普通の兵隊より一乃至二年早かったようだ。

私の場合、

- ・ 昭和一八年 四月 一日 入団
- ・ 同日付 二等水兵
- ・ 昭和一八年 五月一六日 一等水兵 (新兵教育期間)
- ・ 〃 〃 七月一六日 上等水兵
- ・ 〃 〃 一月一日 水兵長
- ・ 昭和一九年 七月 一日 二等兵曹 (任官)
- ・ 昭和二十年 五月二五日 一等兵曹
- ・ 〃 〃 九月 一日 上等兵曹
- ・ 〃 〃 九月一八日 復員

以上が私の軍歴の大略であって、「長門」に配乗してすぐ上等

兵になったのであるから、現場にいた先任兵達からの処遇は当然ながら、きびしいものであったのである。

### ○ポタモチであった

妙なことをいうのであるが、海軍にはポタモチという階級の通称があった。海軍の階級は、二等兵・一等兵・上等兵・兵長と進級し、二等兵曹(任官)・一等兵曹・上等兵曹となった。(士官は略する)

真面目に勤務したものは、精勤賞・へ型のマーク・が許されて三年に一本つけた。兵でへがつくと貫禄もあったが、進級が遅れてくると多少意地の悪い者もあった。

師範現役兵は、一年三ヶ月で任官し、二年半にして上等兵曹になった。即ち、階級章のみでその上に当然ついているであろうへが一本もなかったのである。通常、上等兵曹になるには二本のへはついていたものである。

私の場合は、へなしの階級章であったので、通称ポタモチといわれた。短い期間であったが、貫禄はないし恥ずかしい限りであった。兵達とすれ違ふと敬礼は受けたが、腹の中では、あれはタンゲンだなと揶揄の眼で見られていたようだ。

私どもタンゲンは所定の年数を勤めたら、兵曹長(准士官)になって短剣を釣って除隊できるといふ話もあって、辛い勤務も果していたものである。

### ○戦艦長門のこと

私は海兵団を終るころ実施部隊の希望をとられたとき、戦艦・武蔵とした。当時(現在でもそうであるが)「武蔵」は世界最大の超弩級の戦艦で、沖縄特攻作戦で悲劇の最後を遂げた「大和」と同型艦であった。

私の配属は希望と違って戦艦長門であった。当時世間に公表されていた日本最大の戦艦(同型艦に「陸奥」があった)であった。

大和・武蔵は秘密艦で世間には公式には知らされていなかった。従って長門と陸奥が日本海軍では最大の艦であった。

南洋群島の連合艦隊のトラック島泊地でも、私の長門は大和(一番艦で司令官座乗)、武蔵(二番艦)、そして長門(三番艦)で一戦隊というのを編制して常に日本の連合艦隊の中心として戦ってきたものである。

そして、私が乗りたいと思っていた武蔵は比島沖海戦で私の眼前で米軍の雷撃・爆撃で沈没してしまった。時に昭和十八年十月二十二日のことであった。日本としても大きな、大きな損失であった。私達の同期のタンゲン兵も艦と共に沈んだのである。

かくして大和・武蔵・長門の戦隊はなくなった。往時を想起するに艦隊勤務は厳しかった。私共は進級が早すぎたので、勤務で体得する内容についていけないことが度々あった。兵

器の扱い方等は何かやっていたが、食卓番、先任兵に対する態度、その他の日常の行動に対しては、箸の上げ下ろしにも目が光っていて誰かが失敗すると連帯責任をとらされて罰直を喰ったものである。

長門に配乗して先任の者が言われた言葉で「鬼の金剛、蛇の長門、極楽扶桑」と。何れも戦艦の勤務の厳しさを端的に表わしている。

ともあれ私の長門は、比島沖海戦でうけた艦の修理をする為にブルネイ（ボルネオ北部の港）を昭和十九年十一月十八日出港、台湾海峡を通過して日本に向かった。

この時、二十日夜半基隆沖で共に戦ってきた戦艦・金剛と駆逐艦・浦風が、待ちかまえていた米軍の潜水艦の雷撃を受けて沈没した。

私共の長門は艦長兄部勇次少将の「長門は日本の象徴的存在で、このふねだけは絶対に沈めるな、総員見張り員となれ」の命で必死に潜水艦の攻撃を避けて、無事に十一月二十五日横須賀軍港に帰投した。

この日、私共の入港と入れ違いに出撃した世界最大級の正規空母信濃はつけられていた米潜水艦の雷撃を受け一戦も交えることなく沈没した。誠に残念であった。

長門は岸壁繫留となり主砲は撃てなくなってしまうので、主砲射撃要員（測的員）であった私は退艦させられた。その

為、二十年七月十八日の空襲で艦長・副長始め多数の戦死者を出した。私は戦闘配置が艦橋であったので、乗艦していたら戦死していたかも知れない。この時、三十五名が戦死した。（中略）

私は海軍を復員した。昭和二十年九月十八日であった。このときの辞令は「予備役編入を命ず」であった。海軍は崩壊して存在しないというのに何で予備役か。再現役は全くないというのである。

### ○タンゲン兵生活は終わった

私のタンゲン兵生活はこうして終わった。この間、八月十五日に天皇陛下の玉音を隊の前庭で聴いた。始めて聞くお声で、ラジオの感度も余り上等でなかったので容易に聞きとれなかったが、日本が負けたということは分った。無念であったが致し方なかった。

そして、私のタンゲン生活は二年五ヶ月で終わった。現実短現ではなかったが。こうして私の軍人生活は終わった。

虚脱感と平和に対する期待感と、又、職場に帰れるなどという入り交じった感じが胸の中を駆け巡った。このことは六十年前のことではあるが、今でも鮮明に記憶の底にある。

○あとがき

今回投稿の文は何分にも六十二年も前のことを記憶を辿りながら書いたもので、若干事実と齟齬する個所があるかも知れない。ご容赦願いたい。

尚、第十二輯に発表した『戦艦長門配乗記』と、阿川弘之著『軍艦長門の生涯』を参照した。

戦艦「長門」の履歴

大正 六年 八月二十八日 呉海軍工廠にて起工

九年 二月二十五日 竣工、横須賀鎮守府籍

一二月 一日 連合艦隊第一艦隊第一戦隊編

昭和 一一年 一月三十一日 大改装工事終了

一三年 二月二十五日 連合艦隊旗艦

一四年 九月 一日 山本連合艦隊司令長官着任

一六年 二月 八日 旗艦として柱島出撃

一七年 二月 二日 連合艦隊旗艦を「大和」に変更

一九年 一〇月 二四日 シブヤン海で被弾、二五名戦死

二五日 レイテ沖海戦、敵駆逐艦を大破

一二月 二五日 横須賀帰投

二〇年 七月 二八日 横須賀で空襲、被弾三発。

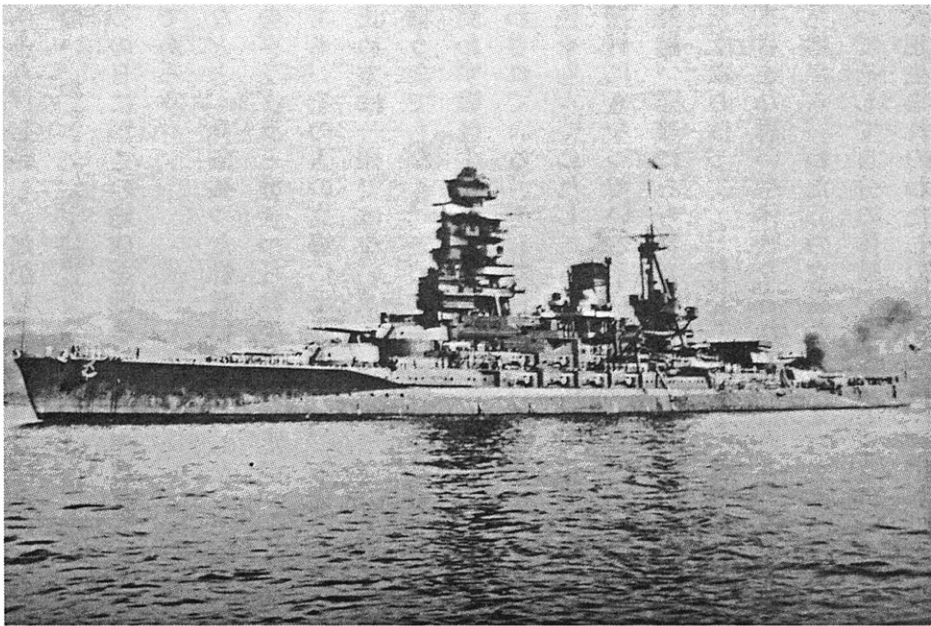
艦長・副長・砲術長戦死

八月 二五日 終戦

昭和 二二年 七月 一日 ビキニ環礁へ回航、のち二回原爆

実験にさらされる

二九日 沈没



在りし日の戦艦「長門」

# 戦いに明け暮れて

## — 人生の軌跡 —

窪谷益雄

戦争はかけがえない人間の生命を犠牲にし積年の人類の文明と文化を破壊し地球上のあらゆる資源を無駄に消耗する。その意味で第二次世界大戦は人類最大の暴挙であったと断ぜざるを得ない。

だが、それを知りながら、一度としてこの地球上から戦火の絶えたことがないのは何故だろう。それを考えると人間なんて一見利口そうに見えるが実はとんでもなくバカな動物なのだと思えてしかたがない。

また、戦争の終結は一方が勝者となつて敗者を裁き、もう一方は断罪されなければならないという結果を生む。

しかし、それがたとえ不合理だとしても戦争というものは喧嘩両成敗というように簡単に解決できるものでもない。

ともあれ、人類共通の理想は、過去を知り現実をみつめ、そして将来を模索するなかで人々が豊で恒久平和の社会を創造することではないだろうか。このことは口に出して言うのは易しいが、これを実現するのは非常に困難をとまなうこと

であろう。しかし、だからそれが絶対になわぬ夢だとも思えない。わたしたち人類が希望と努力を捨てさえしなければ、いつの日にかこの地球を戦争のない理想郷とすることができらるであろう。

などと、見識張った物言いであつたしなりの戦争に対する考えをダラダラと書きつらねてしまつたが、「戦争」と一口に言つても、その人の立場により、また、年代によつてもその受け止め方は一様ではない。

言うまでもなく、先の太平洋戦争に関する図書は有名無名を問わず戦後すでに六十有余年、多くの人たちによつて書き表わされている。そして、これらの書物は各人各様の内容と特色をもつてわたしたちに感銘を与え時代を担う若者たちへの指針にもなつている。

無論、図書にあらわさないまでも、あの時代を生きぬいてきた人ならば、こうも言おう……ああも述べよう……という、さまざまに思いや体験をされてきたことであろう。このような見地から、わたしの立場からあえてあの時代のことを振り返つてそして自分の体験を語ろうと思う。

大正生まれのわたしの体験とは、まず、少年時代から逆のぼる。やがて軍人、そして満州で終戦を迎え、シベリヤに強制抑留生活を余儀なくされ、九死に一生を得て復員することができた。

いわば、ゼロの時代から現在の平和で豊かなこの日本に今日まで生きられたところまでを綴ってみた。

古今未曾有の災いをもたらした太平洋戦争が終結して、はや、半世紀がたとうとしている。

「忘却とは忘れることなり、忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ……」菊田一夫の「君の名は」の中に出てくる名台詞である。わたしの好きな言葉の一つでもある。だが人間の歴史には忘れ去れることと、忘れ去ることのできないことがある。

「昭和の戦国時代」に生まれ合わせ、生き地獄の中で得た体験が、時により折に触れて、話題になることがある。だが、それも時代の変遷と年齢を重ねることによって記憶の中から風化していこうとしている。戦争体験などというものは、時には忘れ去ってしまったほうが賢明なのかもしれない。

だが、わたしが今時の忌わしい体験をわざわざ語ろうとするのは、あの時あの状況の中で、わたしの出合った人々とその情景がどのようなであったかを、この平和な時代にもう一度確かめておきたかったからでもあります。

## 第二次世界大戦中の暮らし

山澤 幸次

### ○配給と闇の暮らし

昭和十二年の日中戦争の全面化以降、徐々に生活必需品が不足になり、国民の生活は、太平洋戦争の開戦により、さらに深刻さを増してきた。

国民の多くは、生活のあらゆる場面で戦争への協力を強いられたが、他方では自分達の生活を維持し、守るためにも大きな努力とエネルギーを要した。戦時下における我々の生活についてまとめてみたい。

### ○モノ不足の日常化

戦争のための軍需生産拡大と民間生産の抑制は、生活物資の減少と、物価高を招き、国民我々の生活を圧迫、政府は日中戦争下の一九三九年にあらゆる物価の価格や賃金、地代、家賃などを同年九月十八日の価格にストップする勅令を出した〔九・一八ストップ令〕。しかし、民需生産の減少が続いていたうえ、一律に物価の価格をストップしたため、モノの出し回りがかえって悪くなり、闇価格による取引が広がる事になった。

こうした物不足、とくに国民の日常的な衣食に関わる消費物資の不足は、衣の面では早くも三八年から、食の面でも三九年から四〇年にかけて本格化した。又三九年の朝鮮、西日本における干害の影響で都市を中心に米不足が深刻化したのははじめ、四〇年には物価統制の失敗から、副食物の野菜や魚類、肉類などが食卓から姿を消した。物不足の時代の到来であった。

### ○配給の時代

これらの物不足への対抗策として登場したのが配給制度であったと思います。日常生活必需品の配給制は、一九四〇年六月に六大都市で実施された砂糖・マッチが皮切でした。四年四月には米穀の通帳制配給が、これも六大都市を中心に実施され、年内にはほぼ全国に広がりました。さらに同年五月には木炭と酒、翌四二年一月には塩、二月からは味噌・醤油も配給となった。

米穀の場合の配給の量は、十一才から六十才までの男女に一人一日、三百三十グラム、二合三勺ときめられ（年令別の差があったほか、労働の強度による男女別の加給もつたと）、米穀通帳には家族全員の名前、性別、年令、配給量などを記入して配給所となる米屋を決め、そこから米穀を購入した。しかし、一日・二合三勺という基準量は、当時の消費実績を二割以上も下まわり、都市の労働者をはじめとして、主食配

## 消費財間物価表（1943～45年）

単位は円、日本銀行調べ

種 別	単 位	公定価格	43年10月	44年11月	45年7月
米	1升	0.5	3.0	22.0	35.0
小麦粉	1貫(3.75Kg)	1.5	8.0	30.0	40.0
大豆	1升	0.4	3.0	7.0	12.0
馬鈴薯	1貫	0.5	2.5	8.0	13.0
甘 藷	〃	0.4	4.0	8.0	9.0
味 噌	〃	1.3	3.5	3.5	40.0
醬 油	1升	0.8	3.0	13.0	38.0
食用油	〃	2.9	15.0	120.0	220.0
清 酒	〃	3.5	15.0	120.0	200.0
ビール	1本	0.9	2.0	9.5	15.0
鯉 節	1貫	14.6	70.0	220.0	520.0
牛 肉	100匁(375g)	1.0	3.0	17.0	27.0
卵	1個	0.1	0.3	1.6	3.5
砂 糖	1貫	2.2	50.0	300.0	530.0
塩	〃	5.6	30.0	40.0	40.0
塩 鮭	〃	4.4	15.0	35.0	25.0
キャベツ	〃	0.5	0.6	3.0	
綿タオル	1本	0.3	1.0	8.0	15.0
洋 傘	〃	15.0	40.0	170.0	200.0
靴 下	1足	0.5	2.5	10.0	18.0
石けん	1個	0.1	2.0	6.0	20.0
マッチ	大型1箱	0.4	1.0	30.0	80.0
木 炭	1俵(15Kg)	2.2	10.0	80.0	85.0
鍋	1個	9.1	15.0	60.0	120.0
自転車	1台	76.8	225.0	1000.0	2000.0

給の実施が国民に与えた心理的動揺は大きく、治安当局が米騒動の状況を想定し、心配した。

また、この制度で最も困難と混乱を極めたものは、生鮮食料品であり、野菜や魚類、肉類などは、品質や価格の変動から、もともと配給制にはなじまないものであったので、政府がその公定価格を設定するのが誤ったため市場にモノが集まらない状態がおこり、その上混乱への対応が不完全なための対応処置として、四一年十一月から魚、四二年十一月から野菜の登録制配給が、大阪や東京で実施された。

この配給制度によって「待つていれば多少とも購入できる」「或る程度公平になった」と歓迎された反面、量が不足したり、不公平な事が行われたり、配給所職員の「情実売り」「抱合せ販売」も問題となった。こうしてあらゆる物資に配給制度が実施されたが、依然、モノの回りは改善せず、消費者は配給以外の方法で食糧を手に入れなければならなかった。

なお、衣料については四二年二月から、点数切符による制度が実施されたが、品不足のため購入できないのが現状でした。

そして、行列・買い出しが日常風景となりました。

一方、農村では働き盛りの男達が戦場に送り出され、農村では残された家族がそれを補わなければならず、農家の女性

たちの負担は、大変なものでした。

延方では、季節託児所「農繁期」を開いて銃後を守る農家の労働力を補う事をはじめました。又、我々学徒も農繁期にはきゅうかがあり、学校でも援農作業を出征農家を中心に手伝いに行つたものでした。

#### ○従来の日本の農業経営について

日本の農業は小規模経営で、家族単位の経営がなされてきた。作物の生育を助ける農業で得た収入で家族の生活費を得て生活して行く。

このためには、諸作物を作るための段取り、施肥、土地の耕作、取り入れ、調整までの複雑な力のいる、そして細心の注意を要する仕事をこなさなければならぬ。その上に労働力の調達、生産物の販売、小作米の納入、農機具の整備、又、近所つきあいなど農村での農業を経営するための仕事は多い。家族による経営は、戸主、経営主とした男性の仕事が重要な比重を占めている。

この経営主としての男性が、兵隊に行くと云う事は、農家にどんな影響を与えたか。戦時下の農業は、女たちのよりいっそうの労働で支えられたのです。

農家の主婦達は、夫と同じ農業生産にたずさわりながら、他に育児、家事の仕事が待つていてそれをこなさなければなりません。

家事は、現在の様な間取りの中でしたら何とかやって行けたと思いますが、当時の農家の間取りは、今考えると、非合理、非能率的な間取りの住宅で、女性達は大変苦労した。その上、舅・姑との関係、同居生活をしていたので大変だったと思います。又村では生活運動も試みられた所も有りますが戦時下なので、それどころではなかった。

この労働力不足に対して、村では、勤労奉仕・共同作業・共同炊事・共同保育などの対策を立てたが、男手の無い農家では、生活を維持するために、女達が無理をして長時間労働という形でカバーしていたと思います。

何としても生きて行かなければならない、又、子供達を育てなければという頑張りの力で生活したと思います。

当時は「産めよ、増やせよ」をスローガンに、食糧増産と並んで至上命令でした。多くの妊婦は、胎児の発育を無視して働かなければならなかった。

その結果、やがて母体の疲労と、生れてくる子どもの発育不良という結果として表われて来ていました。

しかし、その事はおくびにも出せず苦しんだ。怒り悲しみは戦後民主主義の世になってようやく語られるようになった。

### ○ある女性の話

牛馬なら作業が終れば、いっぱい餌を与えられ、後はゆっくり休む事が出来るが、我々人間、とくに女性にはそんなヒ

マはない。食事の仕度は姑がやっても、後片付け洗濯は女仕事、子供が生まれその世話もしなければならぬ。夕食しているうちに眠気がさす、田植えが終わると、養蚕の仕事や畑の仕事が待っている、腰も痛くなる、畑仕事が終わって帰る時には、牛馬へやる青草を刈って帰る、その仕事が終わる頃には、除草機がけが待っている。一日中田ん甫の中を歩き通し、一日に何里も歩く、唯歩くだけなら良いが機械を押しながら歩く大変な作業です。それが一段落する頃には田の草取りが待っている、休むひまがない、盆正月位か。小さい子供がいる時には姑が田畑までおぶって来て乳を飲ませて、稲刈時期になると、また大変、手刈りで、おだかけの重労働が待っている。稲を干し、稲を入れて、稲扱きをする、夜の十一時頃までやった事もあります。

田んぼの仕事が終わると、副業は蒔おりの仕事、一年中休むひまがない。こんな事で腰の曲がった人が多かったのではないのでしょうか。

戦争が激しくなると、兵力の動員と共に、戦時工場に動員されるようになり農村では更に人手不足となって一層大変でした。

戦争が激しくなると、兵力の増大と共に、軍需生産の増産などに多くの労働力が必要になり、いろいろな制度が導入されて「国家総動員法」が昭和一三年に制定され、昭和

一八年からは一層強化されて根こそぎ動員される様になった。徴用は最も重い地位におかれ、早い時期から実施された。「国民徴用令」が施行されたのは一九三九年七月からでありました。

さいしよは、熟練工や技術者に重点をおいて、技術の登録、移動防止、雇用制限を行い、強制的な徴用は制限されましたが、一九四一年十二月以降は範囲が拡大されて、ほとんど総ての労働力を網羅することになった。

徴用には、働いている職場ぐるみ徴用される「現員徴用」と、新しく徴用される「新規徴用」がありました。学校を卒業すると、国の配置規制を受け、就職しました。軍需優先で、中小商工業の経営者は転廃業を強いられました。

軍隊の召集は「赤紙」で、それに対して徴用令状は「白紙」でした。白紙召集と呼ばれていました。白紙召集を拒否すると「一年以下の懲役、または、一〇〇〇円以下の罰金」に処せられました。

勤労働員、学校や職場・団体単位で、農作業や臨時的な仕事をする勤労奉仕などは日中戦争直後から盛んに行われていました。

最初は期間も短かったが、一九四一年十二月に施行された「国民勤労報国協力令」によって、これまで各地の各種団体などが個別に実施していた勤労奉仕は、全国的に統合強化さ

れ「勤労報国隊」として組織されることとなり、さらに一年後には、年令の範囲が広がり、動員の期間も、年間三〇日以内から六〇日以内に広げられました。徴用令に対してこの制度は、強制的動員に対し、短期・半強制的動員と位置づけられていました。勤労に対しての報酬はありませんでした。

#### ○女子挺身隊について

国民徴用令では、はじめは、女医・看護婦以外の女性は徴用の対象とされていなかったが、一九四一年十二月の改正で、十四才以上二十五才未満の未婚の女性も可能となった。

しかし、家族制度より見た日本の女性の位置特質を考慮して徴用を実施する時期ではないという政府の方針で実施されなかった。

一九四四年八月「女子挺身勤労令」が、また「学徒勤労令」が公布施行され、就業命令に従わない者には「徴用令」と同様、罰則が課せられたという強制力を持つものであった。十才以上四十才未満の女性と範囲も広まり、但し家庭の主軸となる者については除かれることになった。期間は一年間、そして二年に延長される事になった。

徴用は行わないで女子挺身隊の形という方針でした。学校別同窓会、各種学校、地域別、職域別に編制され動員された。当時、日本の植民地となっていた朝鮮にも適用された。そんな中で、多くの女性が「従軍慰安婦」にさせられた。

この事は後で真相究明と補償が大きな問題となっている。

学徒動員については、日中戦争後から始まった。「国民動員計画」のなかに位置付けられたのは、一九四三年六月に出された「学徒戦時動員体制確立要綱」によってであります。航空機の緊急増産が至上命令になると、学徒動員はいっそう強化され、一九四四年八月「学徒勤労令」が出された。

ここでは勤労即教育という指導計画がうちだされ、国民学校初等科以外の生徒・教職員が勤労動員にかり出される事になった。

私達も牛久の軍需工場に学校の教室を変えて二〇ミリの機関砲の弾丸造りに汗を流しました。この事は「ふるさと潮来」十二輯に記載してありますので省きます。

動員先は航空機工場をはじめとする軍需工場、食糧増産のための開墾、農作業、飛行場の造成、家屋疎開作業などでありました。

そんな中で、余暇や少ない登校日などで、又工場の宿舍などで、本来の学生にもどって勉強もしましたが、学力不足は、誰の目にも明らかでした。

終戦時の学徒動員数は約二百万人で、空襲による死傷者もかなり有ったようです。

当時の労働の実態は、かなり前、日中戦争以前より軍需工業優先によって重化学工業の比重を高め、多くの工場では長

時間労働が実施されていた。三十六時間「一日半」ぶっ通しの勤務を月に五、六回実施する工場も有り「その結果、倒れる者も出る有様でした」と云う当時の労働者の声でした。

当時、女性・年少者の深夜業が廃止された一九二九年、紡績工場の女性労働者の体重の減少がなくなり、笑顔がもどり、日常生活が変わったといわれたが、一九四三年六月には戦争のため増産が叫ばれ、深夜業がまた復活し長時間労働が増え

てきた。若い女性は動員されてから、身体的な変調が見られるようになった者が多くなった。

少年や女性を大量に動員した航空機工場では身体に見合った作業台もなく、冬は冷えきった工場で作業をした。残業続きで、病気や事故による怪我をする人も多かった。

また強制連行されてきた朝鮮人・中国人は、大手の鉾山・炭鉱に、中小鉾山では既婚女性の働く姿が目についた。

そんな中、農村では、女性と老人により農作業が支えられていたが、収穫の減少はさげられなかった様でした。

戦時下の女性たちは、子作りに、貯蓄に、労働に動員された。

女性は満二十一才、男性は満二十五才までに結婚して、五人以上の子供を持つこと「産めよ殖やせよ」がスローガンになった。一〇人以上の家庭は表彰もされた。

又、第二次大戦開戦前後の時期には物価が高騰し、特に食料品の値上がりがはげしくなり、生活物資は目に見えて乏しくなっていた。

戦費をまかなうために「国債消化運動」「貯蓄奨励」がすすめられた。「豆債券」「弾丸切手」など零細な資金を集める工夫もされた。貯蓄は戦争を遂行するため、お国のための「貯蓄報国」なのだと位置づけられ、隣組・婦人会などを通して割当てが行われた。これ等のことは義務的、天引的な支出となった。その上、貯金の引き出しは制限された。

日常生活に必要な物資を作る民需生産が、軍需生産に圧迫され、生活水準は最低の状態であった。

戦争開始以来軍需優先が強まるなかで、今まで女性の採用が無かった機械工に、女性の進出が多くなった。色々な職場で働く女性が増加した。銀行・保険・郵便局など。

一九四三年、男子の禁止職種が決められると事務部門の女性採用が増え、国鉄の出改札、踏み切り職員など一〇万人以上の女性国鉄従業員が働き、全体の三割以上を占めた。

また学校の先生も女性の先生が増え男性を上回った。

特に航空機工場に動員されたのは、その大部分が女性と学徒であった。

終戦時には、農業に七八〇万人、鉱工業に三〇〇万人の女性が働いていた。

そんな中で、戦時中の公定賃金は同一年令、同一経験年数でも男女間の格差が有り、女性の賃金は、男性のほぼ二分の一位でありました。

一方、女性団体の活動もめざましかった。

一九四〇年九月には、十六年間にわたって活動してきた「婦選獲得同盟」は解散、「婦人時局研究会」と一緒になり、同年十月「大政翼賛会」が発足、教育・生活関連の各省委員会に参加していくことにした。

軍事目的につくられた婦人団体は、一九三二年以降「愛国婦人会」「日本連合婦人会」「国防婦人会」の三つの団体となっていたが、「大日本婦人会」が結成され、部落会・町内会と一体となって活動した。

女性団体の活動は、「貯蓄運動」「勤労報国隊の組織」「軍事援護活動」とともに、「航空兵・海軍志願兵の促進」に果たした役割は、志願兵が特攻隊員として戦死したと重ね合わせてみると、重く大きいものであった。

二〇〇〇万人の女性が組織したといわれる「大日本婦人会」は、一九四五年六月十三日、幕を閉じる事になる。

一方、学校生活では、明治以来国民に親しまれてきた「尋常小学校」は「国民学校初等科」に変わった。戦時体制が確立するにつれて、学校行事などでも、子ども達に戦争への協力を求めたり、将来は兵隊さんになる事を進めたりするよう

な内容の行事が多くなった。学芸会や運動会の競技でも、爆弾三勇士など戦争色の強いものがありました。歌なども軍歌をはじめとして軍国主義的なものになって来た。戦勝をお祈りしたり、戦場へ行く人達を送ったり、戦勝を祝って行進したり、戦争で傷ついた軍人を見舞ったり、戦死した人のお葬式に参列したりしました。

また空襲に備えて、バケツリレーや、救助・避難の訓練も学校で実施いたしました。また

戦地の兵隊さんへ手紙を書いて送ることなどありました。また三〇年代には、「御真影」と呼ばれた天皇・皇后の写真や、「教育勅語」を入れておく小さな神社のような「奉安殿」が学校に建てられ、生徒達は登下校には奉安殿に最敬礼をしたものでした。また朝礼では「宮城遥拝」と云って皇居の方角を向いて最敬礼をしたものでした。

また祝祭日には、学校で式が行われました。二月十一日は「紀元節」、四月二十九日は「天長節」、十一月三日は「明治節」と祝日で、学校ではお式が行われ、「君が代」を歌い、天皇・皇后の写真に最敬礼をし、学校長の読む「教育勅語」を聞かされました。

国民学校になって教科書は変わり、神話により天皇の支配と、対外侵略を正当化し、天皇に尽くす義務が有る事が強調された。この戦いをやり遂げるために国民全体で努力する事

を求められた内容が多くなった。

理科教育をさかんにすることが重要視されたが、理科の教科書も航空機の必要性を強調するなど、軍事的な要求に答えるものであった。

考える事よりも、暗記・暗唱が重んじられた。子供に理解させるより、繰り返すことで知識や躰を身体で覚えさせる教育方法が取られた。身体を強くする事とともに、精神を鍛えることも要求された。単に丈夫な身体をつくり、運動能力を高めるだけでなく、将来兵士として、天皇や国家のための戦争に、健康な身体で活躍を出来る事をめざしての教育、剣道や柔道、さらに女子には長刀などの日本古来の武道が特に重視された。

小学校では「少年団」が組織され、三年生以上の全児童が組織の対象であった。学校長が団長となり、教師が指導者となって、学校外のすべての生活にかかわっていくものとなっていった。

教科外の行事、訓練や競技大会など、少年団として実施する場合が多くなった。少年団の訓練により、子ども達に戦争に勝ち抜くための心や、団体行動を身につけさせるのがねらいでありました。

また子ども達の遊びでも、戦争ごっこなど戦争に関する遊びが中心でした。

戦局が不利になり、日本、本土空襲されるおそれが迫ってくる、日本でも疎開政策を取り入れるようになった。

学童疎開は、将来の戦力となる子供達を、空襲から守るために行われた政策でした。

一九四四年七月「学童疎開促進要項」が発表され、学童疎開が本格化した。

はじめは、地方の親類などに子どもをあづける縁故疎開を原則とし、縁故の無い子供達のために、一九四四年八月から集団疎開が東京都などの大都市で実施された。

しかし、費用（児童一人当り一〇円で保護者負担）が出せないと云う理由や、病気や体が弱いなどの理由で、集団疎開に行けない子どももいました。

集団疎開での授業は、宿舎は、お寺の本堂や旅館の大広間で実施する事が多かったようです。二十四時間、教師と子供が一緒に暮らす「師弟同行」「心行一体」の新教育をめざすものだといわれました。

戦争のために、子どもなりに努力をし、食糧や燃料など自分で集めたり、つくったりする「勤労奉仕」なども思っています。そのため授業時間も確保する事が出来なくなっていたようです。

集団疎開は、準備不足のまま、あわただしく実施されたため、学校や受け入れ側の条件で違いはあったが、概して生活

状態は悪く、子ども達は苦しかったようでした。中でも食べ物不足が一番大変だったようでした。

特に四五年に入ると配給量も少なくなり、食糧事情は一段と悪くなって来て、栄養失調になったり、伸びざかりなのに体重が減るだけでなく、身長まで低くなる子どもが多かったようです。

衛生状態も悪く、頭にシラミがわいて悩まされた。病気にかかっても手当てがゆきとどかず手遅れになることもあったようです。

病気や空襲、宿舎の火事、水の事故などによって多くの子ども達が亡くなっている。

学童疎開は戦争による家庭破壊であったと思います。家族の面会は制限されたり、手紙も先生がチェックするので、思った事など書けなかった。そんな中で、淋しさのため家に逃げ帰った子供達もいたようです。いろいろなイジメをすると大変だったようです。

## 学童疎開のこと

長勝寺住職 谷 玄 明

戦後まもない昭和二〇年一月付、東京都長官（廣瀬久忠）から谷諦州（先住職）あての感謝状が見つかった。

貴下本都学童集団疎開事業実施ニ方リ幾多ノ困難ヲ  
克服シ進ンデ学寮ノ開設竝ニ熱心ナル協力ヲ致シ  
学童ノ教育及保護ニ寄與セラレタル功績洵ニ大ナリ  
仍而茲ニ深甚ナル感謝ノ意ヲ表ス

とある。

学童疎開は、太平洋戦争（大東亜戦争）末期にかかり南方玉砕の報道を憂うる状態の中、本土空襲に具えて都下の学校ではクラス毎に児童は親元を離れて地方に分散、疎開させて寺などにしばらく寄宿させたのであった。

長勝寺では、昭和一九年八月から翌二〇年三月まで七ヶ月間向島（墨田区）第三寺島小学校六年三組四十名を受入れ、客殿・庫裏の殆んどを開放した。住職である父が四十七歳母は三十台の頃、私は四年生であったと思う。

今日戦後六十年を経て疎開児童の一人だった土屋百合子さ

んからはからずも思い出を綴った一文をお寄せいただいたので、ここに貴重な記録として大切に掲載することにします。

お互いが窮乏の戦時下にあつて、この寺が些なりとも児童達のふところになり得たものかという思いを深くしながら。

（以下原文のまま）

### 潮来の想いで

横浜市 土屋百合子

「元氣デェー」「お母ーチャン」都電向島終点は見送る親達でござった返していました。昭和一九年八月の暑い日でした。

私の母は、混雑する人ごみの中で顔だけを出して必死の目で私を見つめていました。

電車は泣き出す児童を乗せ、ひたすら茨城県潮来へと向かいました。

私たち四十名は、臨済宗長勝寺と言うお寺にお世話になることになりました。学童疎開です。

長勝寺の谷御住職は、面長で風格があるかたでした。奥様はすうりとした長身の方でした。お二人が私たちを迎えて下さいました。

私たちの親代わりは、ノッポで秀才型の沢田先生と笑うと

目が糸のように細くなる可愛い金田先生の二人でした。

十九歳の金田先生は食事の席に二人並ぶのを恥ずかしがり、沢田先生より長い距離を置いて座っていました。

食事係は元料亭の料理人だったと言う五十代の方で、坊主頭のオジサンでした。そして、お手伝いのおばさんがいました。

料理人のオジサンの手際よさは、子供ながらに関心しました。その姿は寡黙でしたが、職人氣質のある方でした。

食糧難の時代、彼は児童の為大変だったと思います。

食事の量は、育ち盛りの時代でしたのもっとほしかったです。

食事の内容は井に軽く一杯の麦、又は、サツマイモご飯、野菜の煮付けと、味噌汁だけでした。

良く噛むと満腹感があると言われ、皆黙々と何度も噛んで食べました。

秋になると裏山で「どんぐり」「椎の実」を拾いに行きました。

お腹が空いていたのでそれらの皮を剥き、生のまま食べました。少しでもお腹に入れたかったです。

空襲の無い処でしたので、昼間は殆ど自習をしていました。

金田先生は、長谷川一夫の女形役者絵を描くのが得意でした。私もそれを真似ているうちに好きになり、高校の頃は

「鏑木清方」に傾倒し将来は美人画家になりたいと真剣に考えた事もありました。

又ある時、地元の児童と交流し、イナゴ取りをすることになりました。私は大の虫嫌いです。牛乳瓶を渡され、それにイナゴを入れるのですが、さわることもできず友達に分けてもらい如何にか提出したのでした。

夜、縁側に出て煌々と光る十五夜を見ては、今東京で母もこの月をみているかな…と、思い急に悲しくなった事もありました。

嬉しかったのは親の面会日でした。

何処で工面して手に入れたのか甘い餡蜜を母は持って来てくれて、裏山で食べさせてくれました。

四十名の皆に分けてあげられなかった母は、とても辛かっただろうと思います。

悪戯っ子の松屋さんは夜、トイレの途中先生の部屋をそつと覗き「今、先生が柿を剥いていた！」と皆に報告し、一人ハシャイデいた。

知らぬはお二人の先生ばかりなりけりでした。

秋も深まって寒くなると裏の便所の脇に、大きな柚子の木がたわなに実を付けていました。

男子が先頭に登り、柚子の実をとり、わたしたちが受けて取って忽ち木から黄色の実が消えてなくなりました。

柚子の実の酸っぱさも何のその、皆夢中で食べました。あの美味しかった事、良い思い出です。

翌朝、井戸端にお寺の祖母様が立っていました。皆ちじこまりました。

しかし、祖母様は柚子の実の事には触れず、皆の洗面の後始末が悪いとさんざん叱られました。

又、嬉しかったこともありました。

先生が、おやつにと配給の大きなバターを持ってきてくれました。私たちは、マッチ箱位のバターを大事に大事に嘗めました。

お正月になつて鹿島神宮に行くことになりました。武運長久祈願です。

寒い日でした。手袋もせず、長い神宮橋を下駄履きで渡り切った時私は、生まれて初めて手が霜焼になり、赤くブツクリふくらんでしまいました。

それから、ある朝の事でした。

金田先生から「今履いているパンツを持ってきなさい」と云われ、順番に先生の前でそれを見せることになりました。

その理由は、その朝便所に真っ赤な血があつたと騒ぎになったからです。

実は体が大きく、乳房の発達した渡辺のり子さんの初潮

が始まったのでした。

当時、性教育はありませんでした。

翌日、沢田先生に連れられて船で佐原に渡辺さんはいきました。

若い先生は、町の産婦人科に連れて行き事を託したのだと大人になつて理解できましたがその時は、渡辺さんが、先生と二人で船に乗って外出出来た事が羨ましく思つたものでした。

又、こんな事もありました。

ある日、食事係りのオバさんが六年生の私たちに「今夜、家にいらつしやい」と招いてくれました。

お伺いすると、ご馳走はふかし芋でした。

皆、コチコチに固く成りながらも大皿のお芋は残らずたいらげました。あのお芋の美味しかった事は忘れられません。

オバさんの暖かい心は終生忘れません。

愈々お別れが近くなり、谷御住職が竹を削つて菓子箸を贈つて下さいました。

達筆な字で和歌が彫られていました。

嬉しくて後々まで大事に大切に持っていました。六十年たった今転居、引越しの中で、いつの間にか消えていきました。

昭和二〇年、その年は二月になって大雪が降りました。

その為帰京が少し遅れ二月二十八日に帰りました。

そして卒業式が行われ、蛍の光を涙で歌った後、国防服を着て長靴を履いた教頭先生や、モンペ姿の女の先生方と記念撮影を致しました。

三月一〇日未明東京大空襲がありました。下町の向島は、火の海となり、人々は泣き叫び、逃げ惑いました。

子供を背負った母親がワアワア泣きながら火から逃げ回っていました。

沢山の焼夷弾で周りは昼の様な明るさ、空は真っ赤でした。

潮来から数日前に帰ったばかりの鶴巻さんは焼死しました。卒業写真に笑顔を残したまま永遠に還らぬ人となりました。

長勝寺の同期だった松屋葉子さん、辻村久子さん、渡辺のり子さん等が焼け出されたと聞きましたが、その後どうなされたものか只々彼女達の幸せを心から祈るばかりです。

こうして私たちは長勝寺に学童疎開し、いろいろな体験をさせていただきました。

谷御住職の講話、夕方静かな境内に響く鐘の音や、潮来の水の流れ、金波銀波の稲のさざ波、セピア色の走馬灯の

様に浮かんでまいります。

二年生の染谷さん始め四十名と過ごした七ヶ月間は、お寺の静かな環境に守られていたせいも皆喧嘩もせずにごすことができました。

大勢の学童を引き受けて頂いたお寺の皆様、若い二人の先生方、当時は子供でわからなかったのですが、大変な事だっただろうと今痛感しております。

戦時下でありながら、平和に過ごした静かな潮来の想い出は、今でも私達の貴重な財産となっております。

皆様、本当に有難うございました。

遠き日の 潮来の月は冴え渡り

ひたすら親を しのび眺めぬ

空襲は はるけき彼方ここ潮来

川のせせらぎ あやめ群れいて

十五夜に 託す想いや 長勝寺

## 引揚船の「葬送の汽笛」

「もう一度音に会いたい」を聞いて

坂本照子

日曜日の朝、NHKラジオ第一で、「音」にまつわる思い出のリクエスト番組で、「もう一度音に会いたい」と云う放送がある。人生の歩みの中で出会った忘れられない音である。

この番組に依頼する音は、おもに戦前・戦後の懐かしい風景を思い出す音や、東京下町の工場の機械の音、早朝の納豆売りの呼び声、どこか家庭も朝食は御飯の時代なので母親が仕度する味噌汁に入れる大根の千六本を刻むリズムにのった軽快な俎の音や、澄み渡る青空の中を白い煙をなびかせて田園地帯の中を走る蒸気機関車の汽笛、どれを聞いても懐かしい思い出のある音ばかりで、戦后六十年になりますが、その時代の風景と、香りまでもが甦って来てその音は優しさと、懐かしさに現代の慌しい世界とはかけはなれた瞬間でもあります。

そんな中のある朝、とても悲しい辛い音が流れました。八十才を過ぎた老男のリクエストによる「葬送の汽笛」である。

アナウンサーがその音にまつわる手紙の内容を話した。

敗戦后、外地からの引揚船に乗って、日本をめざして帰国の途中、夢にまで見たであろう祖国の島を目前にして、一人の元兵隊が海中に自ら身を投じたのだそうです。

引揚船はそこにとどまって数時間あたりを探したが見つかる事が出来ず「葬送の汽笛」を鳴らしてその場を離れ、他の多くの引揚者に乗せて日本の国にむかったそうです。その同じ船に乗っていた老男（元兵隊）は、未だにその時の事を思い出し、自分も老い先短いこの世の聞き納めに、もう一度その音を聞いておきたいとリクエストしたそうです。

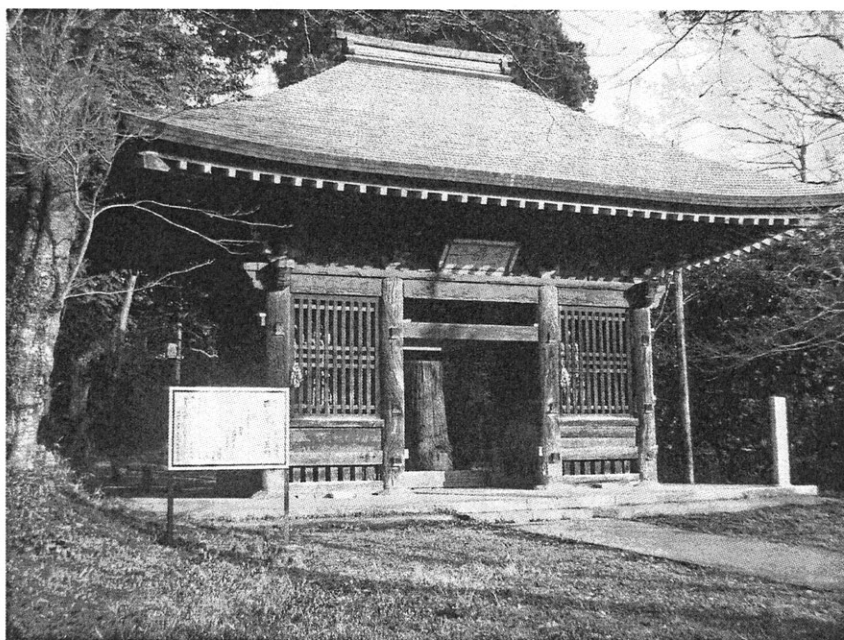
身を投じた元兵隊は衛生兵として戦地にて従軍し、敗戦濃い外地で傷ついた多数の兵隊に、手当をしたくても薬や物資も無く、みすみす命を落として夢にまで見たであろう家族の待つ祖国に帰ることもなく死んで行き、外国の凍土にその亡骸を無数に葬った思いを、舟に乗る前に元衛生兵は一緒になつた老男（元兵隊）に話し、自分が日本に帰れる苦しみ、自分もこの地で死にたいと話したそうです。その同胞の兵隊の無念の思いに、今自分が祖国の島を目前にして申し訳ないと海中に身を投じたであろう元衛生兵の深い思いに、同じく引揚船に乗り合わせた老男（元兵隊）は、自分が天国に旅立つ前に、もう一度その時の「葬送の汽笛」の音を聞いてみたいと投書をしたそうです。アナウンサーのナレーションに私の

胸もしめつけられる悲しい音でした。

今年で、戦后六十年が過ぎててもいまだ戦争の傷跡は癒されることなく、自分が命あるかぎり深い悲しみを背負って天国に旅立つまで消え去る事はないのでしょうか。

此の音にまつわる話を聞き、私も兄達の事を思わずにはいられませんでした。一人は、ペリリュー島にて玉砕し、もう一人の兄（中尉）は敗戦時、満州の牡丹江にいて、一緒にいた家族（娘八ヶ月）に行き先も告げられず別れぎわに一言、子供を頼むと行ってソ連兵によりシベリアの極寒の地につれて行かれたそうです。家族は翌年に無事引揚できました。兄は三年後に無事妻子の待つ祖国に帰ってきましたが、シベリアでの様子はたとえ妻子や、親・兄弟にも話しませんでした。義姉が聞くと血圧があがるからといって終生語る事は無かったです。それでも毎年行われていた戦友会には夫婦でどこまでも出席していました。生死を共にした戦友は、兄弟よりもよかったです。残された遺品の中に、シベリアでの事は一切書かず、唯一引揚船の中での心情と、舞鶴に上陸した時の出来事（第十九輯に掲載）が残されていました。生きてくても生きて帰れなかった、外地にいた多くの兵隊や民間人の人達の悔しさを、「昭和の歴史」として、戦争がいかに愚かなものかを後世に伝えて行くべきではないでしょうか。

私達の住んでいる大地が、スペースシャトルから見た宇宙飛行士達が感動した青く美しい地球が最限りなく続く事を願わずにはいられません。



生故郷の「西蓮寺」仁王門

## ゆとり教育とエデュケーション

土子 幸三

ゆとり教育とは、総合学習で生きる力をつけるねらい。

エデュケーションとは、日本語訳で教育だが個性を引出す意味を持つ。

グローバルの時代、彼我すり寄ってきたがこれまでと対比しながら、これからの展望を探ってみたい。

時代の移り変わりに改革はつきものである。近代では明治と戦後と平成の今である。明治と戦後はエネルギー革命で教育によって乗り越えて来たが、今度は「IT革命」と云われ各分野の急速な変化がガリ勉では通用しなくなり、総合学習で生きる力を養い将来に役立てようと云うものである。推薦入学を取入れたのも入試のガリ勉をなくしたいことから「ゆとり」が教育改革の頭文字になった。ゆとりとは余裕やくつろぎと解するので、この表現で教育を進めることは努力によつて覚えて行くこと、逆なので混乱するのではないかと危惧したものである。テレビも自動車も何でもスイッチ一つで動くので何ごとも早くなくては気がすまない世相で知識の吸収の如く何度もじっくり繰り返すことは肌に合わないから

尚更困るのである。

先般行われた日中韓の学力検査の結果によると日本は三番目であった。家庭での勉強も殆んどないに等しいことがわかった。土曜日が休みの上、総合学習に時間をとられ、主要科目の授業が減ったと云う。それでは学校でも家庭でももっと時間を増やして努力すれば点数の底上げは可能であろう。が、然し、過去を見ながら改革の必要を考えて見たい。

東洋史を学ぶと官吏登用試験「科挙の制度」が目を引く。当時中国四億の人口から公平に選抜するにはこの方法が最適に違いなかったが、唐から清の時代まで千年も続いたこの制度は狭き門で唐の詩人張継は寒山寺周辺で「楓橋夜泊」と題して有名な詩を残した。不合格の悲哀を表現し、失望の深さを偲ぶことが出来、いつまでも忘れさせないこの詩を思うにつけ過酷な試験が逆に創造を失い、長期停滞の時代が続き、力もあるのに惜しいことをしたと思うのである。

日本では漢文にかえり点を打ったり、平仮名や片仮名を編み出し理解しやすくして、中国の進んだ文物の吸収を急いだのである。論語など孔孟の教えを普及させるため、教育（教え育む）や勉強（強く勉める）によつて進めたのである。大日本史編さん事業を通じて藤田東湖らによつて水戸学が形成された。吾が国体の尊厳、国家護持の愛国心、皇室の尊崇、忠孝一致、文武不岐、大義名分などで修身に重く、科学に軽

い教育を敗戦の反省にたつて改革が行われた。制度や教育方針を見直し、記述方式から正誤を○×方式にテストのやり方が変わったのである。ガリ勉では通用しなくなつたのである。基礎・基本をたゝき込んで身につけ応用に備えないと、首尾よく解答は出来なかつたのである。土曜日が休みでクラブ活動の充実が課題でもあつた。

所謂、体験型教育への転換で、体罰主義から自由主義への移行で手ぬるくなつたのでイギリス型の厳しい教育をすべきと当時の校長は生徒への訓示で強調したものである。

欧米では教育をエデュケーションと呼ぶ。個性を引出すと解する。個性を引出し伸ばして行くことが定着し伝統である。ガリ勉型が自己中心で排他的に対し、個性派は開発や創造をチームで進めて行く、当然力の差が出てくる分けである。

戦前も戦後も学校教育だけでは社会の変化や文化の進展について行けないため社会教育や公民館活動が開発されてきた。が、競争になると点数評価がやり易いので、どうしても詰め込み、ガリ勉が復活することになってしまうのである。

世はグローバルの時代に入った。産業・経済・国防などすべてに及んでいる。知的分野では体験型を多に取入れ、身体につけ、応用がきいて役立つ人づくりを定着させ発展させる「ゆとり教育」で総合学習のねらいと意味をかみしめたいものである。折角、改革して総合学習を取入れ体験型で歩み

はじめたのに成果が表われないため批判されているが後退しないように基礎学力は時間をかけてしっかりと身につけてもらいたいものである。

改革を乗り越えるには汗を流すことは今も昔も変わりがないのである。基礎・基本をガツチリと身につけ、総合学習と取組む二正面作戦で頑張ってもらつて成果をあげて頂き、文化の創造に貢献願いたいのである。

私の姉の頃、女学校での教育費は田を四反歩買うだけがかつて誰もはやれなかつたと聞かされたが、つれて大学や師範学校は田も一町歩となり庶民には高嶺の花であつたのである。日本のエリート教育制度は過去金持ちの若者がエリート大学に進学したが、今日も続く格差社会をなくし、人の資源を有効活用できる道が拓けてくることを「ゆとり教育」の成果を前提に大きな目標にすえたいものである。

それこそ国家国民のためにつながる道である。

## さらば八町庚申講

尾崎 廣

我が家の属していた庚申講は「八町庚申講」と称していた。残念ながら過去形で表わすことになったのは、昨年（平成十六年）十二月に庚申講の解散を決議したからである。この機会に私達の八町庚申講を中心に庚申講について回顧し考察してみる。

まず八町庚申講という名称の根拠はどこから来たのか。距離の単位でいうと一町は六十間で一〇九・一米であり、八町は八七二・八米になる勘定である。講中を一巡りすると八町になるからと考えたが九〇〇米弱では不可能である。したがって八町講の由来は講中のメンバーが八町内（五軒町・上宿町・堺川町・海道地町・前下田・中町・押立・並木）に互っていることから呼ばれるようになったと推察する。当たらずとも遠からずであろう。

八町講は他の庚申講と同様に一家の当主である男子が中心に講を行っていた。父が四十代で倒れたのを機に私が庚申講に仲間入りしたのは昭和三十年代であったと記憶している。あれから四十年を経過し、その間に見たり、聞いたり、体験したことなどを思い出すまま書き綴ってみた。

庚申の日は年六回あり二ヶ月に一度廻ってくる。庚申講は各家持ち廻りで行っていた。当番にあたりると日取りを講中に連絡することになる。最近あたり日（庚申の日）に拘わらず、土・日曜日を利用し講を催すようになっていったのは時代の流れの中で当然の成り行きである。以前は講中を廻って「米そろい」をしながら出欠を確めて一戸あたり白米5合宛を集めて当家の経費に充てたのである。庚申様の前日には籠を背負って「米そろい」に歩いた祖母や母の姿があった。電話が普及すると「米そろい」は取り止め、連絡は電話で授り会費制に変わっていった。欠席の場合でも貯金（近年は二千円）だけは同一に基金として積立てていた。備品の購入をはじめ運営資金に充て、旅行資金にも消費したのである。

又、私達の八町講では講中に不幸があった時には一同で見舞い上がり会葬するなど他の講中にはない習わしが続いていた事は講中の堅い結びつきがあったことを裏付けられる。当家にあたりと庚申様と膳椀など諸道具は上番の家から受け取って来る。以前は長持風の什物箱に一式が収められていたが傷みが進んだのを契機に運搬し易いに二個にしたのが昭和四九年一〇月である。以後、昭和五三年初庚申から膳椀使用を取り止めテーブルを用い、料理もバック詰めに変更したので、庚申様の掛軸と供え膳ほか一式と文書を入れた文箱などをプラスチックケース一個に収納した。

庚申講の当日は本尊の猿田彦大神の掛軸を掛け、料理を盛り付けた膳を供え花瓶には何故かバラを生け、菓子器にお菓子を、そして御神酒一升を捧げ燭台にローソクを灯して準備が整う。初庚申に当たった家では餅一重ねを供え、宴のあとに下げ、切り分けて出席した講員に配ったものであるが、最近の餅の代用に紅白饅頭が用いられるようになってゆく。膳部の料理は精進料理である。平（椎茸、雁もどき、乾蒟、蓮根、里芋、牛蒡、人参等）、壺（白菜豆の餡かむけ）、皿（胡瓜とわかめ、焼麩、大根等の酢の物）、猪口（蒟蒻と人参の白和え）、壺蓋し（きんぴら牛蒡）、汁椀蓋し（里芋、蓮根、人参の煮ころがし餡かけ）等である。加えて漬物、ホウレン草等のお浸し、野菜の天ぷら、最近ではサラダも出された。宴の半ばに吸い物（椎茸、ナルト、三ツ葉等の澄まし）、最後に味噌汁（豆腐、油揚げ、大根等）と御飯である。このような料理もパック詰めになってから仕出し料理となり内容も様変わりしていったのは当然のことである。飲み物はと云えば以前は酒一升がお決まりで時には追加もあったが、最近では酒のほかビールや焼酎、ジュースやウーロン茶と種類も豊富になったのも時代の背景に当然のことであろう。八町講は洲崎、下田、新宮に及ぶ講中であつたので話題は豊富で米づくりから始まり政治・経済の話まで発展することもあつて賑やかに楽しい一刻を過ごしたことも懐かしい思い出となつてしまつたので

ある。

ところで庚申様にまつわる幾つかの云い伝えや風習がある。庚申講の最中、または庚申様の掛軸が掛けられている内に地震があると再度、講をやり直さなければならぬという風習がある。講がお開きになり来客が帰ると、間を置かずに庚申様を降ろすように祖父から注意されたことを覚えていて、それが何を意味するものかは不明である。私が庚申講に仲間入りしてから四十年を経過したが、その間に庚申講の席上で地震に遭遇したのは二回だけ有つた記憶がある。『荒原善兵衛宅に於いて宴開き中地震有り 午後九時十五分頃 震度四程度と有り記録す いい伝えに依り ここに宴席をやり直しとし新たに宴を始めました 一端一同客間にひき上げ茶の接待を受け当家は新たに神酒一升を奉納し 全員一同宴席に着き冷酒にて乾杯する 余震を考え庚申様を降納する 昭和58年2月27日（日曜日）晴 荒原善兵衛宅にて』これは記録されている文面である。二度目は開宴中に地震を感じ一同は例のことを囁きあつたが当家からは特に発言はなかつたので誰も口を開く人はなく再度の宴は開かずじまいとなつた。残念ながら、この家では後継者がなく講中を離脱する結果になつてしまつた。あの時に昔から伝えられたことを踏襲していればという思いがしてならない。

庚申様は神聖なものときれ妊婦があると産屋が明けるま

で当家は庚申講を日延べし、講員も家族にお産があつた場合も同様に出席を遠慮した。出産が忌わしい穢れたものとされていたからであろう。

また祖父から聞かされたことがある。庚申講を開く当家は上番の家に預かつていた膳碗等の諸道具の入つた什物箱を担ぎ棒を持参し受取りに行き二人で担いで運んでくる。その途中、什物箱を地面に降ろすことなく当家まで運ぶことが習わしであるというのである。什物箱の運搬も時代の変化と同様に荷車、リヤカー、軽トラックへと変わっていったのは当然のことである。また運搬に都合がよいように二つの箱に分けられ、膳碗を使用されなくなつてからは庚申様一式を文書入れなどを収納したプラスチック容器に改められている。更に『庚申様は七里戻つてもよばれろ』ということを知ることができたが事由は判然としていない。根拠はどこから出ていたのか知りたものである。子供の頃に近所に庚申講があると必ずよばれた（招待された）ものである。このしきたりもこのことに関連があるのではないかと想像を巡らすばかりである。当時は子供達にとつて最大の楽しみであつたように覚えてゐる。当家では講中の来客が集まる前に講中であるなしに拘わらず近所の子供たちに振る舞う習わしがあつたが、いずれの講も昭和30年代を最後に取り止めてしまったようである。子供らは御豆腐代と称して少々の金額を熨斗袋に入れて貰い庚

申様に奉納し、お膳で御馳走になる。料理は来客の料理とは違い簡略化され、平は椎茸はなく油揚・こんにやく・人参・牛蒡など、皿は酢ノ物、壺は菜豆の葛かけ等で御飯と味噌汁である。食べ終ると残つた料理はお膳のまま家に持ち帰る。そして器に移し替え、お膳を返しに行く。お膳には必ず付け木やマツチ数本を添えていつたものである。懐かしい思い出である。

さて、庚申信仰はいつ頃から起こり、いつの時代に庚申講が始まつたのであろうか？

潮来町史に庚申講について掲載されているので改めて庚申様について考えて見たい。

『「講と信仰と行事」(庚申講)』庚申信仰とは干支の庚申の日に行われる行事で、日待ちである。中国の道教によれば、人間の体内にいる三戸さんし(三戸虫ともいう)が、人の早死にを望んで庚申の夜に就寝中に抜け出して天帝に罪過を告げ、そのため人を早死にさせる。だから長生きをするには、庚申の夜に身を慎んで徹夜をする。日本では奈良時代頃からこの信仰があつた。庚申塔や庚申講行事の掛軸に三猿があるのは、天帝の神使としてさるが位置づけられ、天帝に悪事を「見ざる、聞かざる、言わざる」ことを意味するという。庚申の本尊は青面金剛、また神道と結びついて猿田彦大神とされてい

る。庚申の日のほか庚申の年には庚申塚を築いたり庚申塔を建立することがあり、潮来地方の庚申塔（「庚申塔」「猿田彦大神」の文字塔、青面金剛像塔）も庚申の年に建立されたものが多い。潮来地方で現在行われている庚申講は、当番（持ち廻り）のいえに、集合して、庚申様の掛軸を掲げ飲食をし、十二時過ぎに解散するなどの点で共通している。ただし、それぞれの講中では少しずつ異なっており、全体として簡素化、省略化の方向にある。：（中略）：一家の当主である男性を中心とするのが一般的、したがって年齢は約三十〜八十歳位で高齢化している。：（中略）：庚申の行事中に地震があった場合は、もう一度やり直すという伝承がある。：（以下略）

人間の長生願望はいつの時代でも変わりなく、年六回の庚申日には徹夜として三尸虫が体内から出て行き天帝に注進される事を嫌い、一家の当主たちが講を結成して天帝の使い猿田彦大神を祀り、皆で集まって飲食をし早死にしないようお願いの明けるまで起きて祈願したことが庚申講の始まりであろうと推察する次第である。町史によれば庚申信仰が奈良時代の末期から始まったとされるが肝腎な潮来地方の庚申講がいつ頃、いつの時代に行われるようになったかは、明らかにされていないのは残念である。各地区のそれぞれの講中の起源を知りたいものである。

当洲崎地区内には私の知る限り私たちの八町講のほかに少なくとも四つの講中が存在する。しかし継続している講中は少なく大方が休眠中と聞く。下田地区も入っているのは二つ程あり、私達の八町講は新宮も入り三区に及んでいる。もともと旧洲崎村の一円であり交流が蜜であったことが証明されることになる。

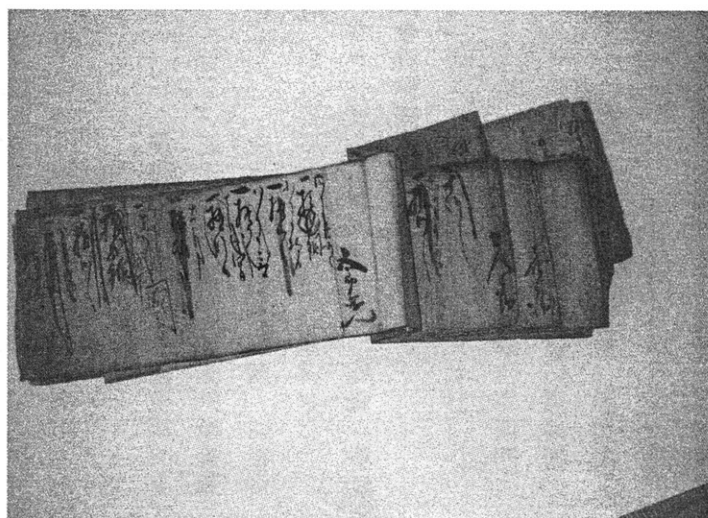
電話もなく自動車など更にはない時代にどのような手段で連絡を取り合ったのであろうか？ 電気のないローンクや行灯・ランプが頼りの庚申待ちは果たしてどのように行われていたものか興味津々である。洲崎・下田・新宮地区の縁続きの気の合った有志を中心に合い集い庚申講を結成したものと推察するだけである。



庚申待銭掛帳  
（明和六年丑八月）

ところで私達の八町庚申講は、いつ頃、いつの時代に発足したのか代々継承されてきた文書等から考察してみたい。

まず特筆すべき書類は明和六年と明記されている「庚申待掛銭帳」が保存されていることである。したがって明和六年前後の江戸時代半ばに結成されたものと思われる。煤けた和紙の大福帳形式に綴じられており、内容には屋号と思える名前が頁毎に記帳されている。



### 庚申待掛銭帳

彦兵衛、喜衛門、市衛門、善兵衛、五郎右衛門、伊左衛門、嘉兵衛、喜兵衛、傳兵衛、清三、与兵衛、清兵衛、傳左衛門、五衛門、弥助などの名前がある。これらの家が八町庚申講の初代の庚申仲間であることは確かである。核家族化が進み個人の意思が尊重されている現今とは違い、当時は家長制度が形成され家中心の時代である。この間、庚申仲間は家の事情で一定期間を休んだり引越しなどで脱退したり、分家などで新しく加入したり出入りはあったものの現在まで八町庚申講の伝統を守り続けてきたのである。発足当時の十五戸から二百数十年を経過し庚申仲間は十一戸となつてしまひ、因みに当時から続いている講員は十戸が残っているだけである。

次に本尊である猿田彦大神の掛軸入れ（木箱）の内底には「明和戊歳三年八月大吉、寄進、諸星彦兵衛」とある。この項に苗字（姓）が使われていたとは予想外のこと驚きの事実である。これらのことから八町講は明和年代に始まったことが裏付けられる筈である。

明和三年は西暦一七六六年である。平成十七年は二〇〇五年であるから単純に計算すると、その間、二二九年になる勘定である。約二四〇年の長きに亘つて庚申講を伝承し守り続けてきたのである。代々の先人達の偉大さに改めて敬意を表わす次第である。

次に八町庚申講中で保存されてきた文書類及び備品から

判読できるものの一部を紹介し講中の歴史の一端を明らかにしたい。また、庚申塔についても刻名者等を記して置きたい。

スサキ 方波見 正雄  
五軒町 尾崎 嘉兵衛

明治廿四年霜月改メ

①、覚

※古物売拂 記

- 一、黒椀二十人前 代金壹両××
- 二、二ノ膳廿人前 代金貳拾五匁

- 庚申講中 膳、皿、飯ツキ、猪口、

〆金壹両貳分五匁

二ノ膳、長持壹ツ

右を佐原川島屋××

膳、十老膳 但八寸

文化二年八月十日 宿元 弥助

代金廿七錢五厘 松川伊左衛門へ売渡ス

②、庚申講中諸道具控

二ノ膳、十膳 但四寸

明治廿四年十月十七日

代金廿錢 尾崎喜衛門老母へ売渡ス

五軒町 尾崎 喜衛門

飯ツキ、四ツ 但大小

諸星 傳兵衛

代金五錢 尾崎喜衛門老母へ売渡ス

下田 諸星 彦兵衛

皿、拾七枚 但不揃

松川 伊左衛門

代金廿二錢 尾崎喜衛門老母へ売渡ス

諸星 五右衛門

猪口、拾四ツ 但不揃

荒原 弥助

代金八錢 尾崎喜衛門老母へ売渡ス

並木 黒須 與兵衛

長持、壹ツ 洲崎上宿町へ売渡ス

荒原 仁助

總売上代金 壹円拾五錢也

北海道地 小松崎 桂蔵

明治廿四年十二月六日

窪庭 喜兵衛

諸星彦兵衛当番ニテ

荒原 善兵衛

有金五錢五厘

境川 黒須 清太郎

松川伊左衛門殿へ売渡ス之殘金也

新規買入

記

一、本膳 拾五揃

一、二ノ膳 拾五揃

一、皿 拾五人揃

一、猪口 拾五人揃

一、飯ツキ 四ツ

一、杓子 四本 但塗物

一、切溜 七ツ組 但蓋附

一、ボン 式ツ

一、長持 壹ツ 但右品入物

右買入二付 老人米七升ツツ積合

此計 九斗八升ナリ

此代金 壹拾五円八拾錢ナリ

右九斗八升 代金七円廿五錢ニナル

③、覺 年月日不祥

記 式十錢 尾崎 四方吉

五十五錢×× 諸星 傳兵衛

○ 〃 賢三

二十五錢 松川 伊三郎

十五錢 諸星 重藏

十七錢 荒原 常七

④、八町庚申講貯金名簿

大正參年式月七日貯金名簿ヲ記ス

○ 〃 清一郎

四十八錢 〃 仁助

五十五錢 小松崎 桂藏

十五錢 荒原 善兵衛

荒原 熊五郎

尾崎 嘉兵衛

諸星 傳兵衛

諸星 彦兵衛

松川 伊左衛門

諸星 五右衛門

荒原 弥助

黒須 與兵衛

荒原 仁助

小松崎 桂藏

久保庭 喜兵衛

荒原 清三

荒原 善兵衛

荒原 熊五郎

(以上拾參名ナリ)



庚 申 塔

⑤、庚申塔 二基建立している

大正九年(一九二〇)に建立されたものはもともと旧大六天様の広い敷地の一角にあったが国鉄鹿島線の開通に伴い延方駅周辺の都市計画事業により現在地(下田集落センター南側の大六天社裏)に移設されている。昭和五十五年(一九八〇)建立の庚申塔も同所にある。刻印された氏名を紹介する。

1. 大正九年一月十三日建立

講中氏名

尾崎 嘉兵衛  
 諸星 傳兵衛  
 諸星 彦兵衛

2. 昭和五十五年十二月十三日建立

松川 伊左衛門  
 諸星 五右衛門  
 荒原 詐介  
 黒須 与兵衛  
 荒原 傳左衛門  
 荒原 清三  
 小松崎 慶介  
 小松崎 桂蔵  
 久保庭 喜兵衛  
 荒原 善兵衛  
 荒原 熊五郎  
 方波見 五良右エ門  
 尾崎 喜エ門  
 諸星 喜七  
 草野 運造  
 久保庭 彦惣  
 荒原 善衛  
 諸星 直美  
 荒原 善一  
 荒原 清衛  
 諸星 敏男

尾崎 廣

小松崎 恵藏

荒原 利男

黒須 功

松川 俊男

諸星 彦衛

荒原 務

(八町庚申塔工事一式代金八万円也)

施工 大谷石材店

⑥、庚申山登山の記録(戦後二回実施)

(その一) 昭和廿五年十月十日〜十二日

(1) 同行者 諸星傳平、荒原善寿、黒須丑松、荒原清太郎、

諸星幸、荒原善衛、荒原巳之介、小松崎吉次、

諸星直美、尾崎廣、荒原利男

以上十一名

(2) 行程

(第一日) 十月十日

延方発5時30分(藤枝商店オート三輪)〜佐原、

佐原発6時8分(汽車)〜千葉(国電)〜亀戸(東

武曳舟線經由)〜東武浅草

東武浅草発9時45分(東武伊勢崎線)太田經由(相

老着12時25分

相老発13時47分(国鉄足尾線)〜通洞着15時

通洞発16時20分(徒歩)約90分〜銀山平到着17時

45分

町営「銀山平バンガロー」泊り

(第二日) 十月十一日

銀山平発5時30分(徒歩)約150分〜庚申山荘

着8時(休憩)〜山荘発9時〜下山(徒歩)約120

分)〜銀山平着11時

銀山平発12時(東武バス)〜足尾着13時(バス)細

尾經由(日光細尾入口)着16時40分

日光細尾入口発16時45分(バス)〜日光湯元温泉

着18時5分

旅館「吉原」泊り

(第三日)

日光湯元発7時30分(バス)〜中禅寺(華嚴滝見

学・記念写真)〜(バス)〜明智平(ケーブルルカ

1)〜馬返し(電車)〜西参道着9時30分(東照

宮参拝)〜(バス)〜東武日光

東武日光発12時45分(東武日光線)〜東武浅草着

15時45分(休憩)

東武浅草発17時30分(曳舟線經由)〜亀戸(国電)

〜千葉

千葉発 19時3分(汽車)佐原着 20時25分

佐原発(バス)延方帰着 21時15分

(3) 経費

② 交通費 (一人当り)

佐原(国鉄)	二二〇円
亀戸(東武)	二八〇円
相老(国鉄)	九〇円
银山平(バス)	三五円
足尾(日光細尾入口(バス))	一〇五円
細尾入口(バス)	一五〇円
湯元(バス)	八〇円
中禅寺(電車)	九〇円
西参道(バス)	二〇円
東武日光(東武電車)	三三〇円
東武浅草(東武・国鉄)	二三〇円
佐原(参宮バス)	六〇円
○一人当り交通費 合計	金 一、六八〇円

③ 諸経費

神札代(猿田彦神社)	十五体	四五〇円
宿泊料(银山平)	一、〇七五円	
布団十四枚		四二〇円
椀 十一ヶ		五五円

素泊料 六〇〇円

謝礼(バンガロー) 五五〇円

休憩料(庚申山荘) 三三〇円

宿泊料(湯元) 一三、四三〇円

エレベーター(華厳滝) 五五〇円

記念写真(華厳滝) 一、一〇〇円

拝観料(東照宮) 一、一〇〇円

電話代(足尾・湯元) 八〇円

土産代(不参加者分) 四八〇円

謝礼(藤枝商店) 八八〇円

○諸経費 合計 金 一八、八九五円

◎ 雑費

清酒一升 四〇〇円

缶詰 七四〇円

佃煮ほか 一四四円

大根二本 二〇円

サイダー三本 七五円

ローソク二本 四〇円

つまみ 一一〇円

キャラメル 五〇円

塩豆 六五円

ナイフ 一〇円

外、白米持参する

○雑費 合計 金 一、七三九円

(4) 決算

※収入 合計 金三九、一一六円也

①会費 二六、一一六円

(一人当り 三、五五六円)

②貯金より 一三、〇〇〇円

※費用 合計 金三九、一一四円也

①交通費 一八、四八〇円

②諸経費 一八、八九五円

③雑費 一、七三九円

(5) 決算宿元 新宮 荒原 利 男宅

(昭和三十五年十月十四日)

(6) 旅行幹事 尾崎 廣、荒原 善衛

(回想)

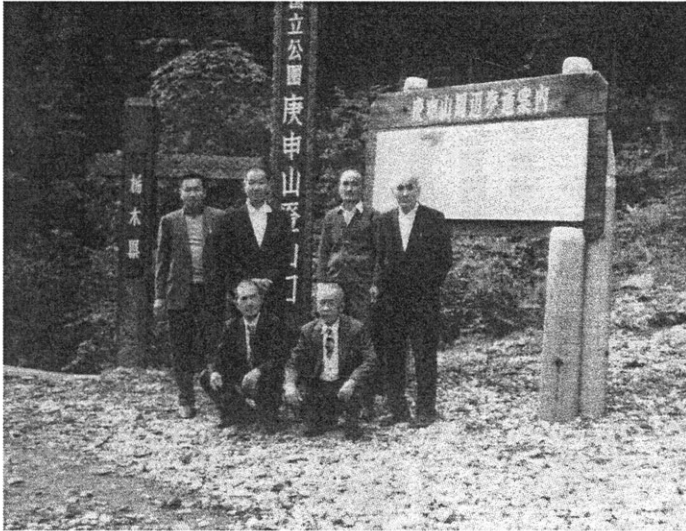
一行は通洞駅に下車するが銀山平行きバスの発車時刻が判らず途惑っていた。そのうちバスが出ると教えて呉れた人があったが、上の空で聞き流したことが運のつきで、最終バスが発車してしまったのである。くわしく聞いていればと後悔することになる。兎に角歩いて行く方法しかなかった。歩くこと一時間余りで銀山平に辿りつくことが

出来た。夕暮れの迫る頃に宿に着く。管理人は先程、通洞駅で声を掛けてくれた人だったのである。薄暗いローソクの灯で夕食を摂る。翌日は早起きしての登山行である。五時半に出発し庚申川の溪流沿いに登り、一ノ鳥居あたりで川と別れて本格的な登山となり二時間半あまり登る。八時ごろには庚申山荘に一行全員が到着し、一時間程休憩して下山する。そして銀山平発十二時のバスで足尾まで戻る。



庚申山登山記念写真  
(日光・華嚴の滝)

足尾からは細尾峠を越えて日光湯元の温泉宿に泊った。三日目は華嚴滝を見物し記念写真を撮る。それから日光東照宮に参拝し東武電車で浅草に到着する。その日は歴史に残る大きな事件が発生したのである。当時の日本社会党委員長・浅沼稻次郎氏が演説中の壇上で、右翼の青年・山口某



庚申山登山記念  
(庚申山登山口)

に刺殺されたことを報じる号外が街頭に配られていたの  
である。この度の庚申山登山の帰り東京では大きな出来事  
が起こり生涯忘れることのできない一ページである。

(その二) 昭和四九年十月十四日〜十五日

(1) 同行者 小松崎吉次、久保庭彦惣、荒原善衛、荒原善一、

荒原清衛、諸星直美、諸星敏男、尾崎 廣、

黒須 功、荒原利男、松川俊男、諸星彦衛、

以上十二名

(2) 行程 常南ドライブレンタカー利用

(第一日) 十月十四日

延方発 6時〜土浦〜下館〜真岡〜宇都宮着 11時〜

庚申山 13時〜14時

(ホテル鬼怒川御苑泊)

(第二日) 十月十一日

鬼怒川御苑発 9時〜日塩もみじライン〜塩原見学

11時〜13時 西那須野〜宇都宮〜下館〜土浦〜

延方帰着 20時



鬼怒川御苑前での記念写真

(3) 決算

※収入 合計

金 二〇〇、〇〇〇円也

①会費

一〇〇、〇〇〇円

(一人 一万円×十二人分)

②貯金より充当

八〇、〇〇〇円

※費用 合計

金 二〇五、七三〇円也

①宿泊料等

一一四、九〇〇円

宿泊料

七八、〇〇〇円

花代

一三、〇〇〇円

飲物代

二二、三〇〇円

その他

一、四〇〇円

②自動車借上料

二八、七七〇円

③運転手報酬

一三、〇〇〇円

④運転手チップ

五、〇〇〇円

⑤女中チップ

四、〇〇〇円

⑥神札代

五、六〇〇円

⑦茶菓代

六、九五〇円

⑧ガソリン代

七、五六〇円

(配達料含)

二、八〇〇円

三、〇四〇円

一、七二〇円

⑨昼食代

六、〇〇〇円

⑩有料道路通行料

一、四五〇円

那須高原

二五〇円

日塩道路

一、二〇〇円

⑪決算費(下田食堂)

一二、五〇〇円

▲差引不足

金 五、七三〇円也

(幹事) 荒原清衛

(会計) 諸星彦衛

(回想)

二回目の登山行では予想できない出来事に遭遇したのである。前回にはなかった銀山平から一ノ鳥居まで林道が造成されていたので一行はレンタカーで林道を進み一ノ鳥居下で車を降り登山にかかった。前回より大分楽をしたようであったが、このことが思いもよらぬアクシデントに見舞われることになるのである。運転手を除いて全員無事庚申山荘まで登り休憩して下山する。登山道も整備され案内標識も数多くあつて十数年前とは違い環境整備がかなり進んでいたことを実感した次第である。さて、一行のうち若手の五名は別行動で山頂を目指し奥地へ向かう。主流の一行が車に戻ると運転手さんが困った様子で我々を迎えたのである。事情を尋ねると一ノ鳥居近くで車がバウンドした時に岩石がガソリンタンクに当たり傷ができ、ガソリ

ンが洩れてしまったとのことである。木枝を削って傷口に詰め込んだりしていたが、どうしようもなくタンクは空っぽである。車を降りた時点では判らずに下山して始めて知る事になる。この事を知らずに頂上に向かった五名（諸星直美、荒原利男、黒須 功、松川俊男、諸星彦衛ら各氏）の下山を待たずに林道を下ることに決めたのである。下りの道は全員が乗車し、わずかの上りや平坦な所は下車し全員で押して走らせながらようやく銀山平に到着することができたのである。そんなトラブルを知らない別行動グループが歩いて下山してきたのはそれから少し遅れた頃である。頼みの国民宿舎も休みで人気は見えない。ようやく管理人に逢うことができ赤電話を借りる。麓の通洞にあるガソリンスタンドに注文し配達を依頼する。待つこと三十分余りである。その間にタンクの傷口を塞ぐ工夫をあれこれ思案した揚句に私が持参した貼り薬と絆創膏を貼り付けて応急処置をしたものである。果たして鬼怒川まで保つか不安であった。足尾から日光へは細尾峠という上り下り七八曲りのカーブが続く難所がある。峠を登る時には車中がガソリン臭が鼻をついて不安な峠越えであった。現在ではトンネルが開通し日光足尾間は便利になっているようである。兎に角、鬼怒川の温泉宿に辿りつくことができた。翌日、帰途につく前にガソリンスタンドでタンクの傷口に

固形石けんを塗り付けて貰って、何事もなく帰着することができた。貴重な体験の一つであり三十年前のことを今でも覚えている。

⑦、親睦旅行（二回実施している）

(一)、柴又帝釈天と鬼怒川温泉

(昭和五十二年十月二十七〜二十八日)

a、交通機関	はなわレンタカー利用
b、宿泊地	鬼怒川温泉・あさや支店
c、行程	東京柴又帝釈天参拝く鬼怒川
d、参加者	十一名
e、決算報告	
(収入)	合計 金 二四五、〇〇〇円也
①会費	一六五、〇〇〇円
(一人当り)	一五、〇〇〇円
②貯金より	八〇、〇〇〇円
(支出)	合計 金 二三三、四六六円也
①宿泊代	一二五、三三六円
②自動車代	七〇、〇〇〇円
③中食代	一一、五〇〇円
④車中飲食代	七、九三〇円
⑤神札・土産代	二、六〇〇円
⑥ガソリン代	四、〇〇〇円

⑦有料道路代

三、〇七〇円

(差引残金)

金 一一、五三四円也

(二)、土湯温泉の旅

(昭和五十六年十月八〜九日)

a、交通機関

関鉄ツアー利用

b、宿泊地

土湯温泉(山根屋)

c、参加者

十一名

d、決算報告

(収入) 合計

金 二二九、六〇〇円也

①会費

二二一、二〇〇円

(一人当り 一九、二〇〇円)

②雑収

八、四〇〇円

(支出) 合計

金 二二三、六一七円也

①バス代

一五六、二〇〇円

②宴会費

三六、六五七円

③女中チップ

二、〇〇〇円

④土産代

四、〇〇〇円

⑤謝礼

三、〇〇〇円

(差引残金)

金 五、九八三円也

二百四十年の間、歴史を刻んできた八町庚申講も平成十六年を最後に終止符を打った。僅かな資料をコピーしファイル

に収め講中全員に配布した。この記録を後世に残し、語り継ぎ、八町庚申講の庚申仲間であったことを誇りに思い、在りし日の様子など窺い知る術の一端となる筈である。

次にファイルの冒頭に収められた決議文を紹介したい。

○八町庚申講解散の事

「わが八町庚申講は延方地区の数々ある庚申講の中で最古の歴史を誇る講中である」と祖先から聞かされ、私達もそれを信じ自負するものである。何故かと言えば受け継いできた文書や備品がそれを裏付け、証明してくれるからである。

煤けた冊子「庚申待掛銭帳」の表紙には「明和六年」とはつきり明記されている。表紙をめくると頁毎に名前が屋号で記されている。それぞれの内容には多少の差があるが、残念ながら読み取ることが不可能である。又、庚申様の掛軸を収める木箱の内底には「明和戊戌三年八月大吉・寄進・諸星彦兵衛」の文字がある。これらの物証から八町講は少なくとも「明和三年」前後の江戸時代に発足したものと推察できる。西暦に換算すると明和三年は一七六六年である。したがって今年は一七六六年であるから年齢二二二八年を数える筈である。十八世紀後半から二十一世紀へと踏み入れたことになる。この八町講が気の遠くなるほどの長い歴史に感動を覚えるものである。講中全員がこの偉業を改めて振り返る時、この事実

に驚嘆し、ただ深い感慨に浸るばかりである。

電話もなく自動車など更にならない時代に、どのような方法で連絡を取り合ったのであろう。電気のないローソクや行灯やランプが頼りの庚申待ちは果して、どのように行われていたか知りたいものである。

この間、私達の祖先たちは家督を引継ぎ、それぞれ栄枯盛衰はあったものの、庚申仲間の絆を確め合い、助け合い切磋琢磨し講を繋いできたのである。

天明の大飢饉、明治四十三年の大洪水をはじめ度重なる大水、昭和初期の大不況、原爆に象徴される昭和の大戦、そして敗戦と幾多の苦難にも怯まず、言い伝え語り継がれ営々と危機を乗り越え伝統を守り続けてきた八町庚申講である。今、この平成の時代に至って社会情勢の著しい変化に伴い、庚申講の維持に苦慮する事態に陥ってしまったのは誠に残念なことである。

戦後の民主憲法のもと半世紀を経過する中で家族制度が崩壊し核家族化が定着してきている。又、生活の糧とした米作農業を取り巻く環境も大きく変わってしまったのである。戦後の農地解放をはじめ農業技術の向上と営農方式の変革はもとより、前川干拓の造成や土地改良事業など自然環境も著しく変わってしまったのである。農舟が姿を消し自動車へと変わり、用水も「水ぐるま」からパイプライン、牛耕からトラ

クターへ、水苗代から育苗箱へ、田植も人力から田植機へ、稲刈も手刈りからコンバインへ、籾干しも莖を抜げての天日干しから乾燥機へとそれぞれ機械化され、稲作農業の形態は近代的なものに大きな変貌をみたのである。農業政策も転換期を迎え食生活の多様化と相俟って米の消費量が減少し、需給がくずれることになる。その上、食糧制度の廃止とともに国際間の貿易自由化という外圧もあり米作りは増産から一転し昭和四十六年に生産調整が始まり、五十四年からは各農家に減反面積が割当てられることになった。

一方、社会環境の変化も大きく鹿島臨海工業地帯の進展に伴い、都市化がすすみ専業農家は数少なくなり大半が兼業で農業を支えているのが現状である。また核家族が当然の風潮であり少子高齢化が一段と目立つ昨今でもある。

このような時代にあつて伝統を誇り歴史ある八町講の将来を展望する時に、果して、これまでと同様に維持運営が継続できるかどうか、甚だ疑問である。先が思いやられる不安な状況に追い込まれているのが現状である。

今、平成の年代に入り、いかに時代の流れとは云え、八町庚申講を解散するという話題が出ようとは、夢想だにしないことで将に青天霹靂である。しかし現実には厳しく時世時節は浮世の流れという如く、流れには逆らえず講中では慎重に協議した結果、出席者全会一致今日を最後に八町庚申講の幕を

閉じ、解散する事に決定をみたのである。

二四〇年間に亘って庚申講を守り続けてきた代々の祖先たちの偉大さを改めて認識すると同時に感嘆し敬意を表する次第である。この時代に生きるものの宿命とは云え八町庚申講の灯を消す結果になってしまったことは誠に申訳無い限りであり断腸の思い一入である。

いつの日にか新たな「かたち」で復活することを心から願うものである。強い絆で結ばれた庚申仲間が別れるのは一抹の寂しさが残るが、それぞれ地区内の住人であることに変わりなくお互い今迄と同様にお付き合いをお願いする次第である。

いつまでも庚申仲間であったことを誇りに、子々、孫々までも語り継ぎ記憶の片隅に止めて頂ければ幸甚である。終りに講中一同の御多幸と益々の御繁栄を祈念するものである。

平成十六年十二月七日

宿元 宮前 荒原 清 衛宅

(八町庚申講員氏名)

宮前 ○荒原 清 衛 (清 三)

洲崎 ○尾崎 廣 (嘉兵衛)

新宮 ○荒原 利 男 (傳左衛門)

下田 ○松川 俊 男 (伊佐衛門)

〃 ○諸星 彦 衛 (彦兵衛)

洲崎 ○久保庭 武 彦 (喜兵衛)

〃 ○諸星 博文 (傳兵衛)

下田 ○諸星 勝 美 (五右衛門)

洲崎 荒原 善 男 (善兵衛隠居)

〃 ○荒原 正 典 (善兵衛) 欠

新宮 ○黒須 アイ子 (与兵衛) 欠

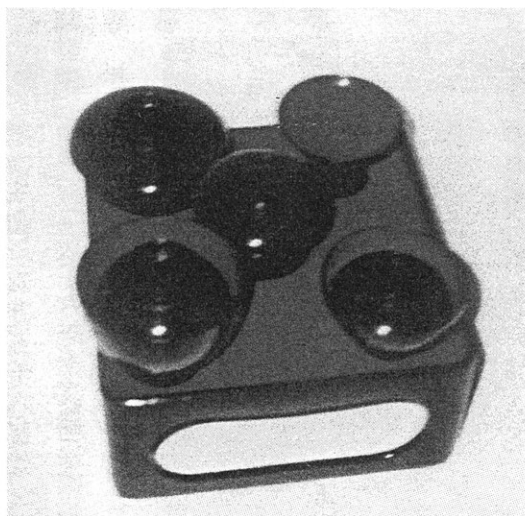
注 ○印は、明和年代発足時から続いている講員を示す。

(結成時は、十五戸)

※八町庚申講備品目録(平成十六年十二月)

一、掛軸(猿田彦大神) 木箱入 老幅

一、供膳一式 老個



八町庚申講備品  
(供膳一式)



八町庚申講備品  
(真鑄製花瓶と燭台)

- 一、花瓶(真鑄)
- 一、燭台(小、真鑄)
- 一、燭台(大、木製)
- 一、供菓子器(受台無)
- 一、文箱(プラ製)

[文書類、通帖在中]

- 一、備品入プラケース

老個 老個 老個 老個 老個 老個

※八町庚申講預金通帳(代表・尾崎 廣 名義)

- 一、額面 金、五九万五千六百五十一円也
- 一、全額解約払戻し 一人 五万円宛配分、



八町庚申講解散お別れ会記念写真

残金 四万五千六百五十一円はお別れの会  
(平成十六年十二月二十二日) 食事代に充当  
する。於、しもとり

## ある日の史跡散歩

―湯島・本郷・駒込・白山・小石川界隈―

窪谷 梯二郎

十月の下旬から十二月の下旬にかけて、何回上京したことやら。しかも行き先は東京大学附属病院。時間の都合上、遅くなくても良いように、車で成田か柏に出て、電車を使い京成上野か、東京メトロ千代田線の千駄木、根津、湯島、または、新御茶の水に行くことにしている。

病気見舞いは元氣な顔を見れば早々に切り上げ、折角の機会だから、久し振りにこの界限でも少しは歩いてみるか、景観は変わったとしても、道筋は変わらないだろうと。

まずは「湯島駅」から。春日通りに出て西に切通坂を上り五〇〇mも歩けば東大の竜岡門入口に着いてしまう。ただ歩けばそれだけの事である。たまには回り路でもしななければ。

湯島、湯島と云えば「湯島天神」、改札口を替えることにより天神石坂より参詣をすることができ。通勤途上に参拝する人も多くみられる。神社の記録に由れば、とおく雄略天皇の御世、勅命により「天之手力雄命」を祀ったのははじめ

であり、のち郷民が「菅原道真」の威徳を慕い勸請し湯島天満宮（湯島三・三〇・一）と称するようになったとか。その後、太田道灌、徳川家康は城の鬼門除けとして篤く崇敬したとのこと。女坂の方から春日通りの切通坂に出る。

切通坂：湯島の台地を切り開いてできた坂なのでこの名がある。

天正十八年（一五九〇）徳川家康の江戸入りの時、旗本の知行地割、武家屋敷配置役であった家康の四天王の一人榊原康政が、奥州街道の備えとしてこの地に屋敷を構えた。

明治維新に入り、桐野利秋の所有となり、岩崎弥太郎の所有となった。戦後物納されて、国の施設が多くある。一部は、都立庭園として「旧岩崎家住宅（国指定重要文化財）・庭園」として一般公開されている。

春日通りの信号を横断して、後楽園方向に二〇〇mたらずで麟祥院の門前へ。此処は、道路が春日通りと名付けられ、また、近くに町名が春日と云うのがあるように、徳川家光の乳母として有名な春日局が、この地に土地と御殿を拝領し、死後、菩提寺とした処である。

麟祥院（湯島四・一・八）：天澤山麟祥院と号し、臨濟宗妙心寺派。

春日局の法名は、麟祥院殿仁淵了義尼大師。  
明正天皇より従二位に叙せられた。

西隣に、夫であった稲葉正成の墓もある。  
此処は、東洋大学の前身である「哲学館」が創立された場所でもある。



春日局の墓  
(区指定史跡)

一〇〇メートルも行くと、東京大学の竜岡門入口となる。

竜岡門の方に曲がって門の手前、信号を右手に曲がり、東大の塀に沿って幾度か道はクラクする。不忍池方向に戻って行くとそこは無縁坂。旧岩崎家住宅・庭園の後に出る。

無縁坂の途中に、土蔵造りの講安寺(湯島四・一一・一三)がある。この寺の本堂と庫裏は文京区の指定有形文化財になっている。

本堂は、社寺建築でありながら土蔵建築である。寺伝にい

う宝永五年(一七〇八)から、かりに寛政元年(一七八九)頃にさがったの建立であったとしても、江戸の町で普及した土蔵造りという防火建築が、多くの災害にあい、また、建て替えられるという歴史的推移のなかで、残ることができたことは、貴重である。

特に、寺院の住宅部分は、改築や新築が頻繁で、昔の姿で残るのは極めて珍しい。ここは幕末(寄進札に文久元年(一八六一)のものとはいえ、客殿・庫裏が残り、江戸期の形式をよく保存している。さらに、寺門は戦後再建されたものであるが、旧形式が保たれている。

寺門、本堂、客殿や庫裏に至るすべてが旧規をよく保存し、まれにみる第一級の文化財といえよう。

と、解説されている。この寺には、第四代住職顕誉が残した類火は格別、寺内門前共に自火用心専一に致す可き事と書かれた、防火の戒めを遺言した古文書が残されている。

記録によれば、元禄十六年から27年間に18回も寺境まで火がきたという。

そしてこの寺には、隣の現東京大学の中心地域の敷地に上

屋敷があつた加賀藩前田家十三代斉泰に輿入れした徳川十一代將軍家斉の息女溶姫の実母、家斉の側室お美代の方が明治五年七七歳までの45年間隠棲していたところでもある。

講安寺より脇道に入り、三菱経済研究所（三菱史料館）の前を通つて、再び竜岡門へ。竜岡門から附属病院病棟へ。病氣見舞いを済ませ、病棟最上15階の展望レストランで周囲の景色を眺めながら暫時休憩。天候さえ良ければ、遠く筑波山、東京湾アクアラインまで眺望できる。東大構内横断し、三四郎池へ、此処は加賀藩前田家上屋敷の庭園育徳園の心字池のこと。夏目漱石原作の『三四郎』により三四郎池の愛称がついた。戻るようにして、国指定重要文化財建造物の旧加賀屋敷御守殿門（赤門）へ。

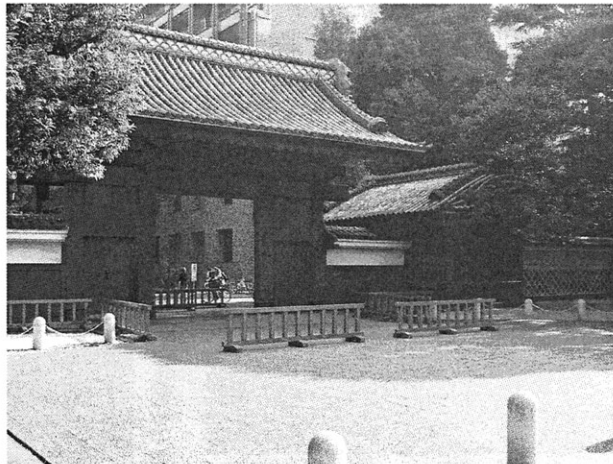
旧加賀屋敷御守殿門：徳川十一代將軍家斉の34番目の子  
溶姫が前田家十三代斉泰に輿入れした文政十年  
（一八二七）に建造された。

將軍家の娘が三位以上の大名に嫁した時、大名家では屋敷の正門（黒門）とは別に嫁を迎え入れるための特別な御門、所謂「御守殿門」の造営が許可された。この門は女性にふさわしく朱塗りであることから「赤門」と呼ばれた。

門の型式は薬医門系統、両脇に番所を独立して置いてある。屋根の鬼瓦には葵の紋、軒の丸瓦に

は前田家の梅鉢の家紋が付けてある。

赤門は焼けたら再建を許されなかつたので、前田家の火消人足として有名な「加賀鳶」が防火に当つた。



旧加賀屋敷御守殿門（赤門）

国指定重要文化財・建造物

赤門の前の通りは本郷通り、旧中山道である。赤門の前を横断すると法真寺の入口。この寺の東隣に、樋口一葉は四歳から九歳まで住み「桜木の宿」と呼びなつかしんでいた処だ。境内には「一葉記念館」があり、毎年「一葉忌」が十一月二十三日に行われている。

法真寺の裏手あたり、当時の本郷丸山町一帯が、明治四十三年巢鴨五丁目に移転した日蓮宗・本妙寺の跡地だ。明暦三年（一六五七）一月十八日、この寺から出火した火災は、翌十九日伝通院前から出火した火災と相俟って、所謂「明暦の大火」となり、江戸城の天守閣も焼き、江戸の街の三分の二を焼き尽くしてしまった。出火の原因は諸説があるが、振袖にまつわる因縁から「振袖火事」とも呼ばれる、江戸時代最大の火事の出火元だ。

本妙寺（豊島区巢鴨五・三五・六）：本堂脇には明暦の大火の犠牲者の供養塔がある。

墓地には、「遠山の金さん」として知られている北町奉行・遠山左衛門尉景元、北辰一刀流開祖の千葉周作成政、囲碁の本因坊代々、そして下総関宿藩主久世家歴代の墓などがある。

その他、この現本郷四・五・六丁目から西片一丁目にかけての一角は、わが国の近代文学の数多くの文人が一時期生活し、作品を生み出した街として知られ、多くの文学ファンが訪れ文学散歩を楽しんでいる。また、旧来の造りの家も残されており、坂道を喘ぎながら散策するに適している。

再び本郷通りに出て、駒込方向へ。言問通りを横断して東大農学部前へ。此处は、旧水戸藩中屋敷の跡だ。この農学部構内に都指定旧跡・朱舜水記念碑がある。

朱舜水（一六〇〇〜八二）：明の儒者。諱は之瑜、字は魯

興、明朝には仕官しなかったが、その再興に尽力。

明の末期、援助を求めて七度渡来、清の世になつた万治二年（一六五九）長崎に亡命、帰化。

寛文五年（一六六五）徳川光圀に招かれて独自の古学による正式の礼儀を伝え、実学を重んじて、農業・造園・学制を指導し、水戸藩の学者をはじめ、林信篤・木下順庵・山鹿素行らに大きな影響を与えた。著書に「朱舜水先生文集」「朱徴君集」など。



朱舜水先生終焉の地記念碑

（都指定旧跡）

朱舜水は、光圀に十八年間師事され、この中屋敷で天和二年（一六八二）八十三歳で逝去、水戸徳川家歴代の墓地である常陸太田市の瑞龍山に葬られた。



朱舜水像

(立原杏所筆)

農学部前の処で、旧中山道（国道17号線）は左折し巢鴨方向に、駒込方向に直進する道は旧日光御成道、道が左右に分れるので本郷の追分と云われた。

農学部の前に沿って脇道に入ると西教寺（向丘二・一・一〇）がある。この寺の表門は丹塗りの朱殿門で区の有形文化財建造物に指定され、大老職を務めた旧酒井雅樂頭の下屋敷から移築したものと云う。

本郷通りを横断して、文京学院大学を過ぎ、浄土真宗・西善寺（向丘一・一三・八）に着く。此処には北方探検家近藤重蔵の墓があり、都指定旧跡になっている。

近藤重蔵（明和八（二七七二）〜文政二二（一八二九））：江戸時代後期の北方探検家、幕臣。諱は守重、正齋と号し、通称重蔵。御先手組与力右膳守知（知新庵）の三男として、駒込鶏声ヶ窪（現本駒込）に生まれた。寛政六年（一七九四）湯島聖堂の学問吟

味において最優秀の成績で合格した。

寛政一〇年松前蝦夷地御用取扱に任命され、最上徳内らと共に択捉島に渡り「大日本恵登呂府」の標柱を建てた。その後寛政一一年・享和元年・同二年と四回の東蝦夷地探検を行った。文化四年（一八〇七）には松前奉行出役となり、利尻島に渡り、帰途天塩川流域・石狩川流域などを踏査した。帰府後將軍家齊に謁見を許され、札幌地域の重要性を述べたという。翌年書物奉行に抜擢、在任中に「金銀図録」「宝貨通考」「外蕃通書」などの著書を献納した。

文政九年（一八二六）長男富蔵の殺傷事件に座し、近江大溝藩分部家預け、文政一二年六月九日歿五九歳。万延元年（一八六〇）改易を赦免された。



近藤重蔵の墓

(都指定旧跡)

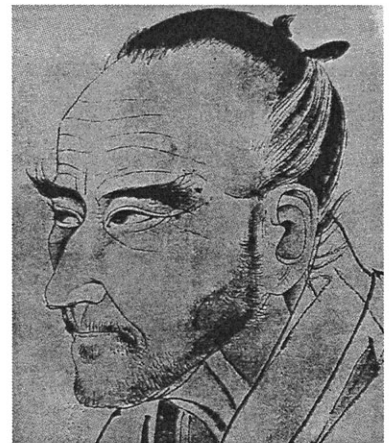
この近藤重蔵や最上徳内らと共に寛政十年（一七九八）に、択捉島に渡航したのが水戸の立原翠軒の私塾此君堂の門人木村謙次（宝暦二（二七五二）〜文化八（一八一二））である。

木村謙次は久慈郡天下野村の農家に生れ、此君堂に通って儒学を学び、京都に行つて医学を学んだ。謙次は、ロシアの北方侵入を憤り、また、ロシアによる北方問題に関心を持った師の立原翠軒の薦めなどもあり、二回蝦夷地を探検した。

そして、寛政十年には、近藤重蔵・最上徳内らを択捉島に案内し『大日本恵登呂府、寛政十年戊午七月、重蔵徳内以下十五名記名』の標柱を共に建てたのである。この時、木村謙次は下野源助という偽名を使い、近藤の従者として加わっていたため、世に広く知られることが出来なかつた。

再び横断して、大きな布袋和尚の像が立っている浄土宗・湯嶺山浄心寺の前を通り、道路の反対側に都立向丘高校を見ながら公衆便所の脇を右折する。突き当たりに曹洞宗・大智山海蔵寺（向丘二・二五・一〇）がある。此処には区指定史跡で江戸時代に流行した富士信仰の布教にとめた身禄行者の墓があり、また、三味線漫談師の都屋かつ江の供養碑があるとの案内板がある。

この寺には何回訪れただろうか。目的は、水戸藩の江戸時代後期の儒者で彰考館総裁を務めた立原翠軒とその長子で南画家として著名な立原杏所の墓参である。



立原翠軒先生像

立原翠軒（延享一（一七四四）〜文政六（一八一三））：名は万、字は伯時、別号東里。古文辞学派の余熊耳や折衷学派の細井平州に学んだため、宝暦十三年彰考館生員となったが、異学者として排斥され、不遇であった。のち治保が藩主になるに及んで天明六年（一七八六）から享和二年（一八〇二）彰考館総裁。「大日本史」の校訂にとめた。門弟藤田幽谷と意見の相違をきたし、これがのちの藩内党派対立の一因となった。編著「臣安手簡」「西山遺聞」など。

翠軒は、史館編修を経て、治保（文公）の侍講を兼ね、総裁に任命されると長年沈滞した修史事業の復興に努力し、また私塾此君堂を竹隅町に開き、多くの多彩な人材を育て、活躍の場を与えた

ので、水戸の文化は急速に活況を呈するに至った。

門人としては、小宮山楓軒・青山拙斎（延于）・

木村礼斎（謙次）・藤田幽谷・立原杏所・川口緑野

などであり、それぞれ各方面にわたって活躍し、

名を残した。

史館総裁としての翠軒は『大日本史』は紀伝の正確さにあり、全力を紀伝の校訂に注ぎ、志・表の編修を中止するとの方針を打出したのに対し、藤田幽谷らと意見の相違をきたし、史館総裁を辞職し、致仕するに至った。

当時の水戸藩の実態を考慮すれば、この方針はあながち誤りではなかったと考えられる。

この翠軒・幽谷両派に二分された水戸の学派は長く葛藤が続き、やがて政治にまで波及し、所謂「朋党の分立闘争」へと発展し水戸藩の悲劇ともなっていくのである。

立原杏所（天明五（一七八五）〜天保一一（一八四〇））：水

戸下市横竹隈で生まれた。名は任、字は子遠また

遠卿、通称甚太郎のち任太郎、別号東軒・玉瑋舎

など。享和三年（一八〇三）父翠軒が致仕、家督、

小普請組となり二〇〇石を襲祿、さらに大番となる。

文化九年（一八一二）側扨従になり、水戸より

江戸小石川藩邸に父共々一家を挙げて転居。天保

七年（一八三七）扨従頭、五〇石加祿。天保十年脚

病にかかり、一二年五月小石川藩邸にて病没、享年五十六歳。

父から学問を、谷文晁・円山忠挙に文人画を学び、中国の古画を研究して書・印刻に長じた。好んで西洋の説を聞き渡辺崋山・青地林宗らの蘭学者と交遊した。代表作に国指定の「葡萄図」「袋田瀑布図」「鴛鴦図」など。



立原翠軒（中）・杏所（右）・春沙（左）の墓

（いずれも自然石）

藤田東湖はその著書『常陸帯』の中で

この人、書画をもて其名高けれども、其心ばへいと清明にて、謂はゆる光風霽月に譬ふべく、政事にたづさはれども、御代の初めより其功いと少からず、ゆめゆめ尋常の書家画家をもて見るべき人にあらずと評している。

同所には、杏所の長女で画家として知られる立原春沙の墓もある。春沙〔文化二一（一八一四）〜安政二（一八五五）〕は、小石川藩邸内にて生れ、名は栗、春沙あるいは沙々と号し、一四、五歳の頃から渡辺崋山に画を学んだ。二五歳のとき加賀藩前田家十三代斉泰夫人溶姫に仕え、生涯独身を通し、四一歳の若さで歿くなった。

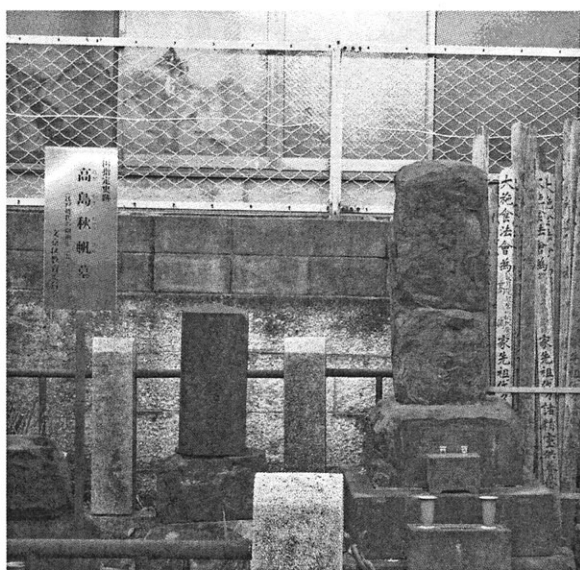
以前、この立原家の墓地は、常澄の六地藏寺に改葬し一ヶ所にまとめようとしたことがあった。寺の間で争いとなり新聞に掲載されたことがある。その時の顛末を海蔵寺で書き建てたのが先祖代々の墓の右隣にある碑である。

翠軒の父蘭溪、杏所の長子朴太郎の墓は六地藏寺にある。それにしても標柱ひとつ立っていないのは淋しい。

亦、立原家の墓地の斜向かいに、第十代横綱雲龍久吉の墓がある。横綱の土俵入りの「雲龍型」を創案した人だ。

本郷通りに出て向丘高校側に渡り、裏側に回るように行くと曹洞宗・金龍山大圓寺（向丘一・一一・三）に出る。この

寺は、頭が痛いときや願いごとのあるとき、焙烙（素焼の土鍋）を供えて祈願すると治ると云う焙烙地藏が有名だ。墓地の一番奥に国指定史跡で西洋流砲術家の高島秋帆の墓がある。



高島秋帆の墓  
（国指定史跡）

高島秋帆〔寛政一〇（一七九八）〜慶応二（一八六六）〕：幕末

の砲術家。名は茂敦、字は子厚・舜臣。通称四郎太夫、秋帆は号。長崎の人。長崎町年寄・会所調役頭取となり鉄砲方を兼任。天保一一年（一八四〇）アヘン戦争の勃発を知り、幕府に洋式砲術の採用を建議し、同一二年江戸に出て徳丸原で訓練を実施。一時投獄され蟄居を命じられたが、ペリー



### 八百屋お七の墓

(三基の墓石のうち、中央は供養のため住職が建立、右側は寛政年間岩井半四郎が、左側は270回忌に近所の有志が建立したもの)

の来航とともに許され、安政三年(一八五六)講武所砲術指南役。江川英龍はじめ幕末の砲術家のほとんどに影響を与えた。

大圓寺の正門は旧中仙道、本郷方向に戻るようにして約一五〇m、「白山一」の丁字路交差点から一方通行の「浄心坂」を「白山下」の交差点方向に下って行く。白山下の手前一〇〇m位右側の路地奥に天台宗・南縁山円乗寺(白山一・三四・六)がある。

円乗寺と聞いても分らぬ人が多いが、「八百屋お七の墓」と云えばすぐ分る。井原西鶴の『好色五人女』などで有名だ。

お七の生家は駒込片町(現本駒込一丁目)とも本郷追分と

も云われるが大きな八百屋であった。天和二年(一六八二)師走二十八日近くの大圓寺から出火(天和の大火)、お七の家は類焼、菩提寺の円乗寺に避難した。その避難中、お七は寺小姓の山田佐兵衛(吉三郎とも)と恋仲になった。やがて家は再建され戻ったが、会いたい一心で付火した。放火の大罪で捕えられたお七は天和三年三月二十九日火あぶりの刑に処せられた。数えで十六歳であったと云う。

駒込の吉祥寺に「お七吉三の比翼塚」があるが、西鶴の吉祥寺説は誤りと云われる。

白山通りに出て巢鴨方向に、二つ目の信号を横断すると、「本念寺、浄土寺入口」の看板が目につく。路地を入って行くと左側に本念寺、右側は浄土寺だ。

日蓮宗・信弘山本念寺(四・三四・七)には、区指定史跡・大田南畝の墓がある。オオタ・ナンポと云っても?、蜀山人と云われれば江戸後期の狂歌師・戯作者として知られている。

大田南畝(寛延二(一七四九)〜文政六(一八二三))：名は覃、字は子耜。通称直次郎、のち七右衛門。別号、蜀山人・四方赤良・山手馬鹿人など。十七歳から幕吏として玉川治水などに活躍。一方、狂歌の作

者としても唐衣橘洲・朱樂菅江らとともに狂歌の  
三大家と称される。主著「万載狂歌集」「徳和歌後  
万載集」、洒落本「変通軽井茶話」など。



大田南畝の墓  
(区指定史跡)

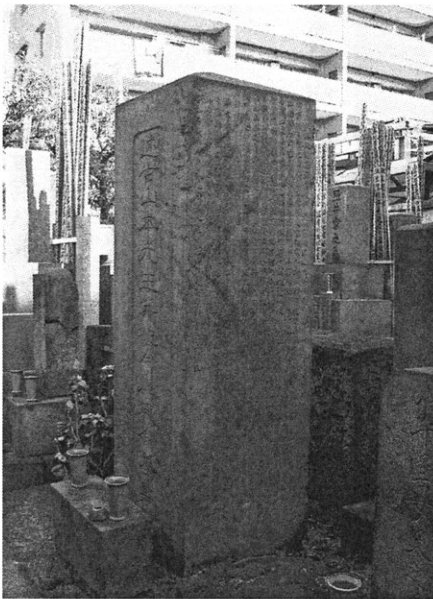
今回この寺にきたのは、以前に来たときは知らなかったが、  
昨秋、佐原の清宮秀堅旧宅で幕末に発行された著名人の墓所  
案内を見ているうち、宮本茶村などの師である山本北山のこ  
とが目に入った。白山・本念寺と記載されているだけであつ  
たが、本念寺？、以前大田蜀山人の墓で行った寺かなと思ひ  
出し、来てみることにした。

寺で案内を請うと、墓前に案内してくれた。蜀山人の墓の  
一列奥にある。無指定であり、当然標柱も何も立っていない。  
山本北山と云えば、潮来近辺ならば、宮本篁村・茶村兄弟

が学び、延方郷校の沢田平格先生や、平格先生を延方に招聘  
して塾を開いた水戸屋先生・井村松亭が学んだことなどで、  
すぐ分るくらい有名だ。

この延方郷校には、宮本茶村も講師として子弟の教育にあ  
たつたが、文化四年(一八〇七)の開校以来、平成一九年(二〇  
〇七)には創立二〇〇年の歴史を刻むことになる。

山本北山(宝暦二(一七五二)〜文化九(一八一二))：江戸  
中期の折衷学派の儒者。名は信有、通称嘉六、北  
山は号。江戸の人。はじめ古学を学び、のち井上  
金峨に学んで折衷学を提唱。経学・詩文に名を得  
た。寛政異学の禁に反対し、市川鶴鳴らとともに  
五鬼と称された。江戸詩文社団の盟主。著書「孝  
経集覽」など。



山本北山の墓

私塾奚疑塾を開き、門人に山本緑陰・山田図南・小川泰山・宮本茶村・金岳陽・朝川善庵・宮本篁村・青木金山・蒲生静修(君平)・雨森牛南・山中天水・横田宗碩・東山祖山・草加蓮溪・長川崑山・小笠原冠山・中井薫堂・梁川星巖・大窪詩仏・太田錦城・原念齋など多彩。

浄土宗・深広山浄土寺(四・三五・一八)には、無指定であるが松平忠直卿の墓がある。菊池寛が小石川に住んでいたときの代表作「忠直卿行状記」により知られている。



松平忠直の墓

松平忠直〔文禄四(一五九五)〜慶安三(一六五〇)〕：江戸

初期の福井藩主。父は徳川家康の次男結城秀康。

慶長一二年(一六〇七)越前北庄(福井)六十七万

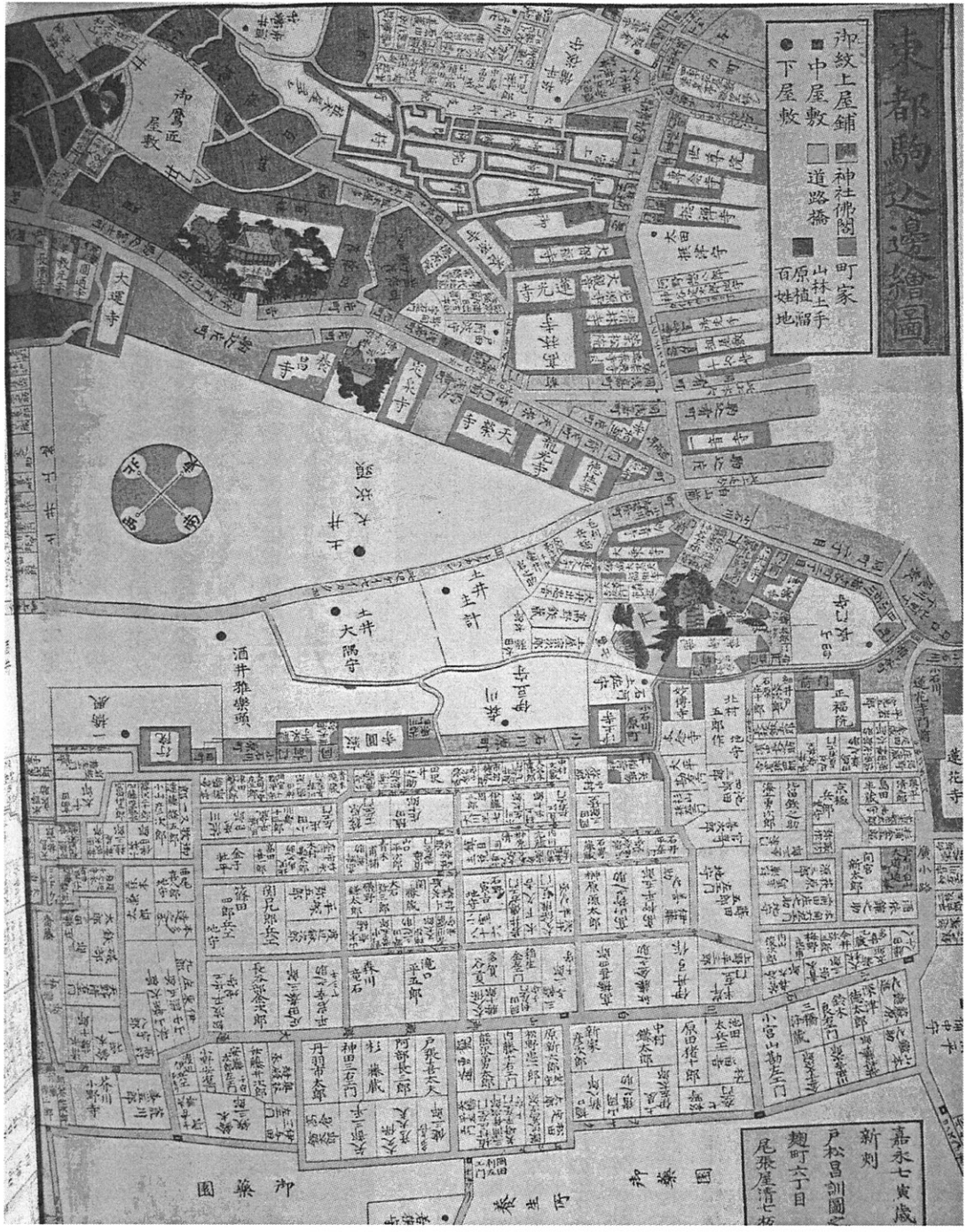
石封襲。慶長十九年(一六一四)大阪冬の陣に出陣、元和元年(一六一五)夏の陣には真田幸村を討つも戦功による加増がなく、幕府に不満を抱き、不遜な行動が多かったため元和九年改易。のち豊後萩原に配流。出家して二十七年間平穩に暮らし、慶安三年(一六五〇)五十六歳で歿。大分市の浄土寺が本墓。此処は供養墓。

白山通りを横断して戻り、裏道に入り、白山神社の境内を通り抜け、谷中方向の薬師坂を上って行く。旧中山道を横断し、本郷通りへ。左折して駒込方向へ。二〇〇m足らずで駒本小学校脇の田端に抜ける動坂方向と、白山上からの間道を結ぶ歩道橋のある「駒本小学校前」の交差点に出る。

この辻に天栄寺(本駒込一・六一六)がある。この辺りは、神田・千住とともに青物市場の江戸の三大市場と云われ、駒込のやっちゃんと呼ばれていた。天栄寺の境内に「駒込土物店縁起」の碑があり、この門前と交差点一带は区史跡に指定されていて、文京区教育委員会の案内は次のように説明している。

駒込土物店跡：神田および千住とともに、江戸三大市場の一つであり、幕府の御用市場であった。

起源は、元和年間(一六一五〜一四)といわれている。はじめは、近郊の農民が、野菜をかついで



東都駒込邊繪圖

(上左方から、吉祥寺・高林寺、上に蓮光寺・養源寺、下に天栄寺・竜光寺・白山神社から浄土寺、そして本念寺と読み取ることができる。)

江戸に出る途中、天栄寺の「さいかちの木」の下

で毎朝やすむことを例とした。すると付近の人々が新鮮な野菜を求めて集まったのが起りといわれている。土地の人々は「駒込辻のやつちや場」と呼んで親しんだ。また、近くの富士神社一帯は、駒込なすの生産地として有名であり、なす以外に、大根・人参・牛蒡など、土のついたままの野菜である「土物」が取り引きされたので土物店といわれた。正式名は「駒込青物市場」で、昭和四年からは「駒込青果市場」と改称した。

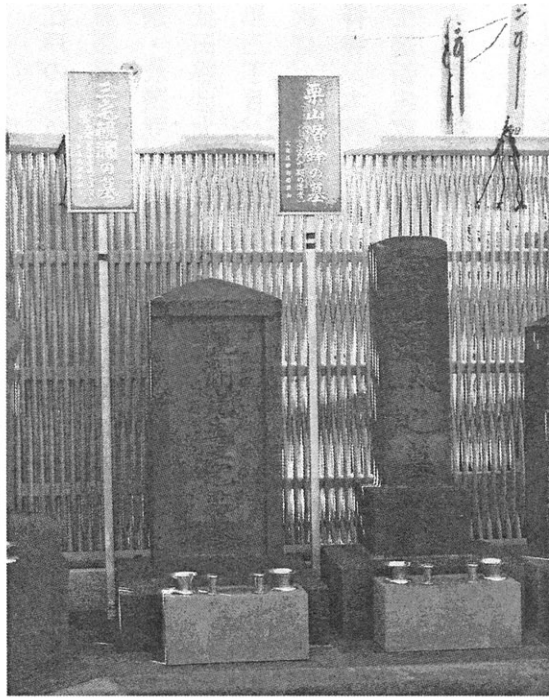
街道筋に点在していた問屋は、明治三四年に高林寺境内（現駒本小学校の敷地の一部）に集結したが、道路拡張などで、昭和一二年豊島区に移転して、巣鴨の豊島青果市場となって現在に至っている。

白山上に抜ける間道に入り、脇道に入っていくと、臨濟宗・天澤山龍光寺（本駒込一・五・二二）がある。此処には、水戸藩の二代藩主光圀に仕え、「大日本史」の編纂に従事した栗山潜鋒と三宅観瀾の墓があるが、両方とも無指定である。

山門の側には多くの学者たちの塋域とある古い石柱が建っている、一ヶ所に集められているが、どのような方々か分らなかった。大家の墓では、唐津藩小笠原家六万石のものがあ

る。

栗山潜鋒（寛文一一（一六七二）〜宝永三（一七〇六）：江戸中期の儒者。名は愿、字は伯立、潜鋒は号。山城淀の人。山崎闇斎の門に学ぶ。十八歳で「保建大記」を著わし、元禄五年（一六九二）徳川光圀にまねかれ「大日本史」の編纂に従事。著書「倭史後編」「弊帚集」「潜鋒詩稿」「神功皇后論」など。



栗山潜鋒・三宅観瀾(左)の墓

三宅観瀾（延宝二（一六七四）〜享保三（一七一八））：江戸

中期の朱子学派の儒者。三宅石庵の弟。名は緝明、通称九十郎。京都の人。はじめ浅見綱斎、のち木

下順庵に学び、木門十哲の一人といわれた。元禄一二年(一六九九)徳川光圀に仕えて史館総裁となり、正徳元年(一七二二)新井白石の推挙により幕府儒臣に登用された。著書「中興鑑言」「観瀾談餘」「論贊駁語」など。

本郷通りに出て暫らく歩くと「目赤不動尊」で知られる天台宗大聖山南谷寺(本駒込一・二〇・二〇)に着く。教育委員会会の案内板の説明。

江戸五色不動の一つ目赤不動尊：この不動尊は、もとは赤目不動尊といわれていた。元和年間(一六一五〜二四)万行和尚が、伊勢国の赤目山で、黄金造りの小さな不動明王像を授けられ、諸国をめぐり、いままの動坂の地に庵を結んだ。

寛永年間(一六二四〜四四)、鷹狩の途中、動坂の赤目不動尊に立ち寄った三代將軍家光から、現在の土地を賜り、目赤不動尊とせよとの命を受け、この地に移った。それから目赤不動尊として、いつそう庶民の信仰を集めたと伝えられている。

不動尊は、本来インドの神で、大日如来の命を受けて悪をこらしめる使者である。剣を持ち、怒りに燃えた形相ながら、お不動さんの名で庶民に親しまれてきた。江戸時代から、目赤・目白・目

黄・目青・目黒不動尊は五色不動として、その名が知られている。

目白不動尊は、戦災で豊島区に移るまで区内の関口二丁目にあった。

江戸の五色不動尊は、目赤(本寺)、目白(豊島区高田二丁目、真言宗豊山派・金乗院)、目黄(江戸川区平井一丁目、天台宗・最勝寺、台東区三ノ輪二丁目、天台宗・永久寺)、目青(世田谷区太子堂四丁目、天台宗・教学院)、目黒(目黒区下目黒三丁目、天台宗・滝泉寺)にある。

次に、旧日光御成道の本郷通りを横断して曹洞宗・諏訪山吉祥寺(本駒込三・一九・一七)の門前に着く。我々には、麻生藩新庄家の墓所のある寺として知られている。

吉祥寺は、曹洞宗で、山号を諏訪山という。

大田道灌が長禄二年(一四五八)江戸築城の際、井戸の中から「吉祥」の金印が発見されたので、城内(現在の和田倉門内)に一字を設け、「吉祥寺」としたのがはじまりという。

天正一九年(一五九二)に現在の水道橋一帯に移った。現在の水道橋あたりにあった橋は吉祥寺橋と呼ばれていた。

明暦三年(一六五七)の「明暦の大火(振袖火事)」で類焼し、現在地に移転し、七堂伽藍を建立し、

大寺院となった。

〔JR中央線の武蔵野市吉祥寺は、その移転の際、門前の住人達を移住させ武蔵野の開拓にあたらせたことから名付けられたものという。〕

僧侶の養成期間として梅檀林(駒澤大学の前身)をもち、一千余名の学僧が学び、当時の幕府の昌平坂学問所と並び称された。

古い堂塔としては、享和二年(一八〇二)に再建された「山門」があり、江戸後期の特色を示しており、両袖に潜戸をつけた四脚門である。また「経蔵」は文化元年(一八〇四)に再建された梅檀林の図書収蔵庫であり、区の有形文化財・建造物に指定されている。

また墓所には、二宮尊徳・鳥居耀蔵・榎本武揚・川上眉山、新しくは鹿島守之助・妥女夫妻、大名家としては、新発田藩溝口家一〇万石、上野七日市藩前田家一萬石など。

二宮尊徳〔天明七(一七八七)〜安政三(一八五六)〕：江戸

末期の農政家。通称金次郎。相模の人。没落した一家を再興。その手腕を認められて小田原藩大久保家分家旗本宇津木家の桜町領の荒廢の復興にあたる。以後、豊富な農業知識、独特の政治力を備えた農政家として世に認められ、近隣諸藩の村々の復興にあたり、安政三年日光神領の復旧に従事

中病死。尊徳の思想・行動は弟子たちに受け継がれ、「報徳社運動」として展開した。著書「富国方法書」「二宮翁夜話」。本墓は今市市二宮神社境内、供養塔は吉祥寺・小田原・栃木県二宮町にある。



二宮尊徳の墓

鳥居耀蔵〔文化二(一八〇四)〜明治七(一八七四)〕：江戸末

期の幕臣。林述斎の二男、のち旗本鳥居一学の養子。天保八年(一八三七)目付となり「蚕社の獄」で洋学者を弾圧。天保一二年町奉行となり、甲斐守忠耀を名乗る。天保一四年勘定奉行勝手方兼任、印旛沼干拓工事を指揮するなど、水野忠邦を助け

天保の改革を推進したが、忠邦の「上知令」に反対し、弘化元年（一八四四）失脚、丸亀藩に預けられる。



### 鳥居甲斐守忠耀の墓

（後方の大きな五輪塔や唐破風型の大きな墓石は、麻生藩新庄家のもの、右後の大きな唐破風型の墓は7代直祐侯）

弘化五年から明治元年（一八六八）、五〇歳から七四歳まで、二四年もの永き幽閉の身にありながら、明治維新になり開放されたとき、「……蘭学を禁圧しなかったから、徳川は倒れたのさ……」と云ったと伝えられる、自己を貫き通した信念、林

大学頭述斎を父に、美濃岩村藩三万石松平（大給）乗蘊を祖父に持つ、流石に血統の良さ、血脈の強さだけのことはある。



### 榎本武揚の墓

榎本武揚（天保七（一八三六）〜明治四一（一九〇八）：江

戸末期の幕臣・政治家。通称釜次郎。江戸の人。蘭学をはじめ広い学識をもち、オランダ留学後、海軍奉行。明治元年（一八六八）西軍の江戸入城にあたり海軍副総裁として軍艦引渡しを拒否し、脱走。箱館五稜郭で反抗、のち降伏し、入獄。明治五年罪を許され北海道開拓に尽力。明治七年海軍



旧麻生藩新庄家墓地

中将、特命全権公使としてロシア駐在。樺太・千島交換条約を締結。のち海軍卿、文相、枢密顧問官、外相、農商務相などを歴任、子爵となる。この他に、小説家の川上眉山、お七吉三の比翼塚がある。

吉祥寺の冒頭で述べた如く、この寺には幕藩時代、潮来市内では大生原地区を支配した旧麻生藩新庄家の墓所がある。都内に存在する大名家の墓地の殆んどが整理縮小されているうち、品川・東海寺の熊本藩細川家、麻布・賢崇寺の肥前藩鍋島家など（この七、八年行っていないので分らないが）と旧態のまま残されている数少ない墓地である。修復整理してぜひ保存したいものである。

吉祥寺を出て、駒本小学校前の交差点に戻る。駒本小学校の正門入口には高林寺との標柱が立っている。突当りが学校、左側が金峰山高林寺（向丘二・三七・五）で、明暦の振袖火事で類焼し、お茶の水（順天堂医院の西南一帯）から移転してきた寺だ。この寺には、緒方洪庵の墓があり区史跡に指定されている。

緒方洪庵（文化七（一八一〇）〜文久三（一八六三））： 江戸

後期の蘭学者・医者・教育者。名は章、字は公裁、

洪庵は号。備中の人。二十一歳のとき江戸に出て、

坪井信道・宇田川玄真に蘭学を学び、二十七歳で

長崎に行きオランダ人医師ニーマンに学ぶ。天保

九年（一八三八）大阪で蘭学の塾「適々斎塾（緒方

塾）」を開き、約25年間にわたり青年を教育。門

人には、大村益次郎・福沢諭吉・橋本左内・大島

圭介ら。文久二年（一八六二）江戸に出て、幕府奥

医師兼西洋医学所頭取。嘉永二年（一八四九）以来種痘の普及に尽力、日本における西洋医学の基礎を築いた。著書には、日本最初の病理学書「病学通論」「虎狼痢（コロリ）治準」など。大阪市北区・竜海禅寺にも供養墓。



### 緒方洪庵の墓

（区指定史跡）

近くには、織田家の墓と云うものもあるが、本多家の墓もある。本多家にも十数家と色々あるが、この本多家は、取手市青柳の本願寺が菩提寺で少し離れた市内の丘の上（台宿二

丁目）に墓（茨城県指定史跡）がある本多作左衛門重次の末裔だ。鬼作左と云われ、事の猥雑なるを嫌い、手短に埒を明けることを好み、

一筆申、火の用心、於仙瘦さすを、馬肥やせかしく

の明快な短い手紙文で知られている。

〔一般には、妻に与えた

一筆啓上、火の用心、お仙位かすを、馬肥やせ

の手紙として知られ、本願寺の境内にはこの文の顕彰碑が建てられている。〕

その於仙は子の仙千代のち飛驒守成重、越前丸岡藩四万三千石を領す。墓は越前丸岡本光寺にあり三代目から此処のことである。

高林寺を出て、田端方向に約一〇〇m弱、蓮光寺駐車場に沿って、Y字型に道が分かれ「養源寺参道」とある。入って行くと山門手前には一方通行の道路が横切り、横断する。臨濟宗妙心寺派・白華山養源寺（千駄木五・三八・三）に着く。

この寺の開基は稲葉丹後守正勝、春日局の子である。元和二年（一六一六）湯島天神下に養源寺は創建されたが、明暦の振袖火事で類焼し、此処に移転したと云う。

此処には、安井息軒、西村茂樹の墓があり、両方とも都史跡に指定されている。



稲葉丹後守正勝の墓

安井息軒〔寛政二一（一七九九）〜明治九（一八七六）〕：江

戸末期の儒者。名は衡、字は仲平。日向飫肥藩士。

大阪で篠崎小竹、江戸で昌平黌に学んだ。藩校助

教授、のち昌平黌教授。古学系に朱子学の長所を

取り入れ、考証に優れた軍備を論じるなど、現実

政治にも関心が深かった。著書「海防私議」「論語

集拙」。旧飫肥藩清武郷中野（宮崎県清武町）の生



安井息軒の墓

（都指定史跡）

家は「安井息軒旧宅」として国史跡に指定。

西村茂樹〔文政二一（一八二八）〜明治三五（一九〇二）〕：江

戸末期から明治にかけての思想家・教育家。名は

鼎、通称平太郎、号は泊翁。佐倉藩士。儒学・蘭

学を修め、藩政に参与。維新後、明治六年（一八七

三）明六社へ参加、同年文部省にはいり教科書・辞

書の編集にあたり、また侍講として洋学を進講、

明治九年修身学舎を創立。これを日本弘道会へと

発展させた。特に明治一九年の「日本道徳論」講

演で国民道徳確立を提唱、日本弘道会はその普及を目ざした。のち宮中顧問官・華族女学校校長・貴族院議員。著書「婦女鑑」「国家道徳論」など。



西村茂樹の墓  
(都指定史跡)

山門を出て左折、南下すること約二〇〇m弱、浄土宗金池山蓮光寺(向丘二・三八・三)に着く。高林寺と背中合わせの敷地の広い寺だ。此処には最上徳内、平野金華の墓があり、これらも都指定旧跡になっている。大名家としては、美濃大垣藩戸家一〇万石のものがある。

最上徳内(宝暦五(一七五五)〜天保七(一八三六))：江戸時代後期の北方探検家。出羽国楯岡村(現山形県村山市)の生まれ。天明元年(一七八一)江戸に出て官医山田宗俊の家僕となり、同三年本田利明の

音羽塾に入り、天文・測量・地理・航海を学んだ。天明五年、蝦夷地巡検使の従者になり蝦夷沿岸を巡視、さらに千島方面の調査に向かい国後島に渡航、翌六年択捉島に上陸、さらに日本人として初めて単身得撫島に上陸した。寛政三年(一七九一)、同四年にも千島・樺太の探検を重ねた。寛政十年(一七九八)には近藤重蔵らと共に択捉島に「大日本恵登呂府、寛政十年七月、重蔵徳内以下十五名記名」の標柱を建てる。文政九年(一八二六)シーボルトを訪問、「日本北方に関する稀なる蘊蓄深き学者」と評された。

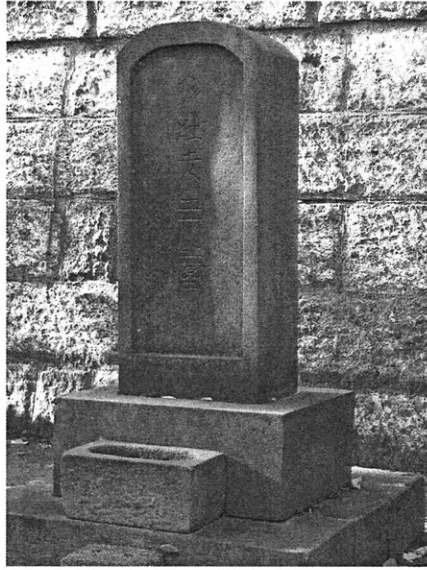


最上徳内の墓  
(都指定旧跡)

右の小さなケースに入っているものが元の墓。

平野金華（元禄元（一六八八）〜享保一七（一七三二））：

江戸時代中期の儒学者。名は玄沖、字は子和、金華は号で通称源右衛門といった。元禄元年陸奥守山で生まれた。幼いときに孤児となり、親族の計らいで江戸に上り、荻生徂徠に就いて古文辞学を学んだ。生活に追われ書籍を買うことも出来ず、書架には「左伝」「礼記」「莊子」「通鑑」の抄書など数巻あるだけであつたが、文章を縦横に駆使し、人々を驚かせた。



平野金華の墓  
（都指定旧跡）

陸奥守山藩（水戸徳川家の分家）の藩儒となつた後も、端午の節句に新服を着るよう主君の命令があり、薄給のため妻の着物を着て出仕し、即日俸米を増加されたという。享保十七年七月二十三

日歿、四五歳。著書「金華雜譚」「酈陽遺編」「古学範」などがあり、藩主松平頼寛（黄龍）は、自ら『金華稿冊』を編纂した。諡を文莊先生という。蓮光寺を出て南下すると駒込学園の所の交差点に出る。左折して谷中方向に向えば、名の知れた団子坂だ。途中に「青鞥社発祥の地」（千駄木五・三・一一）や森鷗外の観潮楼跡（千駄木一・二三・四）がある。

青鞥社：明治四四年（一九一一）平塚雷鳥をちゅうしんとし、若い婦人たちにより結成された文学集団で、わが国最初の婦人団体といえる。女性だけの文藝雑誌「青鞥」を発行、世間から新しい女の出現として注目され、種々の抵抗を受けた。旧道徳の破壊・女性の開放を主張、純文藝雑誌から次第に婦人問題の啓蒙誌へと転換。はじめ平塚、のち伊藤野枝が指導の中心。財政難のため大正五年（一九一六）二月号の52号で廃刊、解体したが、日本婦人解放史上に一つの意義を与えた。

NTTのビルの壁面に案内板が取り付けられている。道路を挟んで五〇m位で、森鷗外の観潮楼跡に着く。今は鷗外記念本郷図書館になっている。

森鷗外（文久二（一八六二）〜大正一一（一九二二））は明治二五年（一八九二）一月から大正一年七月九日に六

○歳で没するまで、この地に住み、多くの名作を残した。

鴎外は邸宅に二階建て十二畳の書斎を増築し、遙か遠くに品川沖が眺められたので観潮楼と命名した。

ここを文学活動の拠点とした鴎外は「青年」「雁」や、「阿部一族」「高瀬舟」などの歴史小説、さらに「渋江抽斎」に至る独自の考証史伝作品を発表した。また、明治四〇年（一九〇七）から催された観潮楼歌会には、与謝野鉄幹・石川啄木など多くの詩人や歌人が参会して、鴎外を中心とした文学者の集まりが形成された。

観潮楼跡、町名変更前は「駒込千駄木町」と云った。日本武尊がこの林に駒を集め、木々につながれたのを「駒こみたり」といったので駒込となり、「むかし雑木を伐り出し、一日に千駄にも及び千駄木と称した」とか、読んでいるうちに団子坂を下っている。団子坂にも種々いわれがある。

団子坂は、潮見坂・千駄木坂・七面坂の別名がある。

「団子坂」の由来は、坂近くに団子屋があったからとか、悪路のため転ぶと団子のようになるからとか、「潮見坂」は坂上から江戸湾の入江が望見できたためとか云われている。

団子坂を下ると本郷台地と谷中台地の谷間に走る不忍通りに入る。横断して真直ぐ坂を上って行くと一五〇m位で台東区に入る。谷中の二、三丁目の境の道路だ。通称谷中寺町と云われるくらい寺の多い町だ。取敢えず、潮来市役所の議場に掲げている「宮本茶村先生」の肖像を模写（原画は、鹿島神宮大宮司鹿島則孝が文久二年五月に描写）した潮来の画家藤岡紫峰の師匠松本楓湖の墓を参拝するかと臨済宗国泰寺派普門山全生庵（台東区谷中五・四・七）に行く。この寺は、明治維新のとき活躍し、のち明治天皇の側近となった山岡鉄舟が明治一六年（一八八三）に開基した寺で、近代落語の創始者と云われる三遊亭円朝の墓や、「雀の学校」「叱られて」「浜千鳥」などの小学唱歌や童謡などの作曲家で東京音楽学校の教授の弘田竜太郎などの墓がある。寺の前の三崎坂（さんさきさか）を上って行くと谷中霊園に行き、JR日暮里駅に抜けられる。不忍通りに戻ると東京メトロ千代田線の千駄木駅がある。

その前に、団子坂を再び上り駒込学園の交差点を左折し、暫らく歩くと、嘗て野口英世が学んだという日本医科大学の脇に出る。現在、日本医科大学の同窓会館が建っている一角に、夏目漱石旧居跡（向丘二・二〇・七）があり区史跡に指定されている。区教育委員会の説明板より。

夏目漱石 本名・金之助。慶応三年（一八六七）〜大正五年

(二九一六)。小説家。この地に、漱石がイギリス留学から帰国後の、明治三六年三月から三十九年十二月、現在の西片一丁目に移るまで、三年壹ヶ月住んだ家があった。

当時、東京帝大英文科、第一高等学校講師として教職にあつた漱石は、この地で初めて創作の筆をとつた。その作品『我輩は猫である』の舞台として、「猫の家」と呼び親しまれた。

この地で『倫敦塔』『坊ちゃん』『草枕』などの名作を次々と発表し、一躍文壇に名をあらわした。漱石文学発祥の地である。

漱石が住む十三年程前の明治二三年十月から一年余り森鷗外が住み、文学活動に励んだ。鷗外はここから団子坂上の観潮楼に移つていった。

二大文豪の居住の地、漱石文学発祥の地として、近代文学史上の重要な史跡である。旧居は、愛知県犬山市の「明治村」に移築保存してある。

大学の前から根津裏門坂になり、附属病院の前に根津神社(根津一・二八・九)がある。六代將軍家宣の父甲府中納言綱重(三代將軍家光の子、四代家綱の弟、五代綱吉の兄)の山手屋敷跡であり、家宣の生誕の地でもある。その山手屋敷時代、上州館林から移殖された三五〇〇本余のツツジがあり、

花の名所として有名である。

根津神社：日本武尊が千駄木の地に創祀したと伝えられている。現在地は江戸時代、甲府宰相綱重の山手屋敷跡であり、のちに六代將軍となる徳川家宣の生誕の地であつた。五大將軍綱吉は家宣の産土神として宝永三年(一七〇六)に千駄木にあつた社をこの地に移して、社領五〇〇石を附し、権現造の社殿を造営した。

世に天下普請と云われた大造営であつた。

社殿は拝殿・本殿と両者を接続する弊殿(相の間)からなり、しかも一つの屋根でまとめ、権現造の完成された姿をみせている。拝殿前に唐門を配し、その左右から透塀で社殿を囲んでいる。唐門前方の楼門を含め、権現造神社建築様式の旧規を示すものとしてすべて国指定重要文化財である。祭神は須佐之男命、大山咋命、誉田別命、大国主命、菅原道真公である。

境内には「家宣の袍衣塚」(区指定民俗文化財)「賽の大神碑」などがある。

この神社の祭礼は、六代將軍家宣が正徳四年(一七一四)江戸全町より山車を出す、俗に天下祭と呼ばれる壮大な祭礼を執行し、同じ格式による山王祭・神田祭と合せ江戸の三大祭



といわれるようになった。

根津神社を参拝し、表参道から不忍通りに出る。東京メトロ千代田線の千駄木駅、根津駅とのほぼ中間だ。

メトロに乗り新御茶ノ水駅に、下車し地上に出ると、聖橋際に日立本社ビルがある。この敷地の一角は太田南畝（蜀山人）の終焉の地だそう。聖橋を渡ると湯島聖堂、道路を挟んだ所が昌平坂学問所（昌平覺）の跡だ。

昌平坂学問所は明治新政府の所轄となり、明治元年昌平学校、二年大学校となり、同一〇年東京大学となった。また、明治四年から五年まで大学本校内に文部省を設置。同五年に師範学校が開校され、同一九年東京高等師範学校（後の東京教育大学、現筑波大学）と改称。明治七年東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）が開校した。近代教育発祥の地でもある。

湯島聖堂の大成殿には道路を横断して裏口からも入れるが、昌平坂学問所の所の階段を下り、聖橋をくぐり、聖堂の土塀に沿って相生坂を下る。国指定史跡の湯島聖堂の正面入口だ。

湯島聖堂： 始まりは寛永七年（一六三〇）幕府の儒臣林羅山（天正一一（一五八三）〜明暦三（一六五七））が上野忍岡に建てた家塾とされている。同九年、尾張徳川家の始祖義直はこれを助け、孔子の聖像と顔

子・曾子・子思・孟子の四賢像を祀る先聖殿を寄進した。

元禄三年(一六九〇)、五代將軍綱吉が、この廟殿を湯島に移し、先聖殿を大成殿と改称した。その時から、この大成殿と附属の建物を総称して、聖堂と呼ぶようになった。



### 入 徳 門

[宝永元年(1704)に建造された]

寛政九年(一七九七)、幕府直轄の学校として「昌平坂学問所」が開設され、総括的に聖堂と呼ばれ

ていたものから分離し、孔子廟(大成殿)関係のものだけを「聖堂」と称するようになった。

寛政十一年に新築された黒塗りの中国風の壮麗な大成殿は、大正十一年(一九二二)に国の史跡に指定されたが、翌十二年の関東大震災で全焼し、昭和十一年(一九三五)に鉄筋コンクリート造で再建され、現在に至っている。



### 孔 子 像

裏門から出て、公園に沿って歩く。旧中山道との交差点に出る。横断して右折し、湯島坂を下る。路の両側は文京区だが、少し入ると千代田区になる。

曲がってから約一五〇m左奥に神田神社(千代田区外神田二・一六)の大鳥居が見える。

神田神社：江戸時代までは「神田明神」と呼ばれていた神社で、もとは伊勢への御供田を意味する「神田」

の名を冠し、天平二年(七三〇)の創建といわれる。初め芝崎村(現大手町一丁目将門塚付近)にあったが、江戸幕府が開かれた慶長八年(一六〇三)駿河台に移り、さらに元和二年(一六一六)に現在地に移り、江戸城の鬼門の守護神として崇拜されている。

祭神は大己貴命(大国主命)・少彦名命・平将門。

江戸時代この神社の祭礼は、行列が江戸城内に入って將軍の上覧があったことより、天下祭・御用祭とかいわれた。庶民の氏神である神田明神の「神田祭」、將軍の氏神である山王社(日枝神社)の「山王祭」、共に現在に続く東京の大祭である。神田神社の大鳥居脇の甘酒で有名な天野屋の前を右折し、聖橋の方から来る道に出て右折、そのまま直進、蔵前通りを横断して清水坂を上る。途中、妻恋神社(湯島三・二・六)の標識があり入る。

婦恋神社：もと旧湯島天神町にあったが、明暦の振袖火事の後、現在地に移ってきた。社前の坂を妻恋坂という。その昔、日本武尊の東征のとき、三浦半島から房総へ渡るとき、走水で大暴風雨に遭遇し、海神を鎮めるため妃の弟橘姫が身を海に呈し、尊

の一行を救った。途中湯島の地に尊は滞在したが、郷民は、尊の姫を慕われる心をくんで、尊と姫を祀ったのが始まり、と伝えられている。のち稻荷明神(倉稻魂命)を祀った。

もとの道に戻り、小平記念東京日立病院を右手路地奥に見ながら次の太い道路を左折する。(真直ぐ行けば湯島天満宮に突当る)二〇〇mも歩くと五代將軍綱吉が將軍家の武運長久の祈願所として、元禄四年に創建した靈雲寺の前に出る。当時は伽藍も整い名刹であったが、現在の本堂は昭和五年の再建とか。次の太い道を右折し、春日通りに入る。左折し、後樂園方向に歩く。五〇〇mも歩くと本郷通りの交差点に入る。

横断すると

本郷も かねやすまでは 江戸の内

と古川柳に歌われたかねやす(本郷二・四〇・一一)の店の跡だ。現在は近代的な建物になってしまったが、壁面に教育委員会の説明板がはめ込まれている。

かねやす：兼康祐悦という口中医師(歯科医)が、乳香散という歯磨粉を売り出した。大変評判になり、客が多数集まり祭りのように賑わった。享保一五年(一七三〇)大火があり、防災上から町奉行大岡越前守忠相は本郷三丁目から江戸城にかけての家

は塗屋・土蔵造を奨励し、屋根は茅葺を禁じ瓦で葺くことを許した。

江戸の町並みは本郷まで瓦葺が続き、それからの中仙道は板や茅葺の家となった。その境目の大きな土蔵のある「かねやす」は目立っていた。

本郷も かねやす までは江戸のうちと古川柳にも歌われた由縁であろう。

春日通りを横断して後樂園をめざし歩く。四〇〇m位で「文京ふるさと歴史館」の入口案内の標識がある。

文京ふるさと歴史館（本郷四・九・二九）：「台地と坂と水、そして暮らしの舞台」を基本テーマに、平成三年四月に開館。弥生土器命名の地としても知られる文京区は一万八千年前から人が住みはじめ、江戸時代には、武家・町人・寺社のまちとして栄え、明治時代には、近代教育発祥の地、また、文人のまちともなった。これらの豊富な歴史・文化資料を展示し、来館者が自由に操作できるマルチメディア・コンピュータにより、歴史への時間旅行を楽しむことができる。

と特色づけられ、一階は「出会いの場」、二階は「歴史の風景」とテーマ付けられ、文京区の歴史の基礎知識を吸収しながら、暫時休憩。

出て春日通りを西へ。東富坂を下り白山通りへ。横断し白山通りを後樂園に沿って七〇〇mも行けば水道橋駅に着く。

手前一〇〇m位の道路脇に「藤田東湖護母致命の処」の石碑が建っていて都旧跡に指定されていたが、今は小石川後樂園内に移設され案内板のみが建てられている。実際の場所は白山通りの道路拡幅で、道路の中になってしまっている。



小石川後樂園内の  
藤田東湖記念碑  
(都指定旧跡)

安政二年（一八五五）一〇月二日におきた大地震の際、水戸藩邸は倒壊した。藤田東湖（文化三（一八〇六）～安政二（一八五五））は母を助けて外に出たが、母はそのとき火鉢の火を心配して再び屋内に引き返した。東湖は母を救い出そうとしたが、親子共々、落ちてきた鴨居の下敷きになり、東湖は母を下に囲い、鴨居を肩で支え、かろうじて母を庭へ出した。東湖は力尽きて下敷きとなり圧死した。

この安政の大地震では同じ水戸藩の戸田蓬軒も没した。二人は九代藩主斉昭の両腕といわれた人物だ。

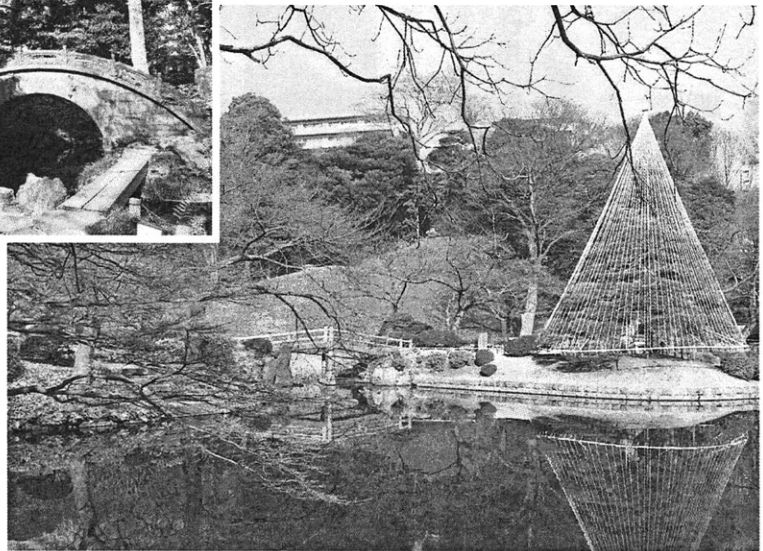
現在の白山通りから西に向かい小石川後楽園一帯、春日通りから南に外堀通までの地域約八万七千余坪(二九万<sup>2</sup>坪)が水戸藩の上屋敷があった跡だ。

江戸当初、御三家の邸宅は、江戸城内本丸から紅葉山に配置されていたが、明暦の振袖火事を契機に城外に出され、尾張・紀伊家は麴町に、水戸家は小石川へ上屋敷を定めた。

小石川後楽園： 旧水戸藩上屋敷内の庭園。寛永六年(一六二九)藩祖徳川頼房が造営にかかり、井の頭から水を引き、関口に大洗堰が造られると、その神田上水も庭園内の池に導入するなどし、二代光圀が遺業を継承した。一部に中国趣味を取り入れた回遊式築山泉水庭園。円月橋は朱舜水の設計という。

園名は、宋の范仲淹『岳陽楼記』の「先天下之憂而憂、後天下之樂而樂」(天下の憂に先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ)から、寛文八年(一六六八)頃、朱舜水に命じ園名を選ばせ、光圀が「後楽園」と命名した。

大正一二年に岡山の後楽園と区別するため小石川後楽園と定めた。



小石川後楽園と朱舜水設計になる円月橋

(国指定特別史跡・特別名勝)

東京ドームの所から千川通りにでる。東京メトロ丸の内線が地上を高架で走っている。礪川公園に沿って春日通りが出る。この辺りの地名は、春日局に因んで春日通りに沿って春

日一丁目、二丁目と続く。礪川公園の春日通り際に春日局の打掛姿の銅像が道路を見つめるように建てられている。

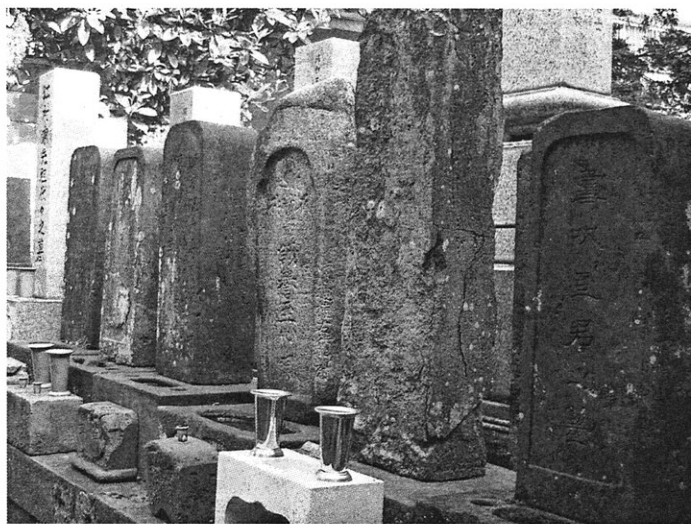
礪川の「礪（れき）」は、「小さな石」「小石」のことを意味し、「礪川」即ち「小石川」のことである。周辺には、礪川小学校とか礪川××と云う建物の名が散在する。



春日局像

寄り道になるが、春日通りを横断し、千川通り北上する。約五〇〇m程で浄土宗・善雄寺に着く。外見では寺とは分らず通り過ぎてしまう。此処は、三河国田原藩三宅家の江戸詰

藩士渡辺家の菩提寺だ。その渡辺家の七代目として渡辺華山が生れ、祖父・父・弟妹等の墓がある。華山は「蛮社の獄」に連座し、国許で母・妻子と蟄居中に自刃したので墓は国許の田原の浄土宗・城宝寺にある。



渡辺華山家の墓

渡辺華山〔寛政五（一七九三）〜天保二二（一八四一）〕：江

戸末期の洋学者、南画家。三河田原藩士。通称登、字は伯登・子安、はじめ華山と号し、のち華山に改めた。堂号は寓絵堂・寓画堂のち全楽堂とも。

天保三(一八三二)定府の年寄役末席となり、海防掛を兼任、開明的な政策を行い、高野長英・小関三英らと尚齒会を結成、洋学・内外事情の知識を求めた。天保一〇年、幕府の保守的な海防方針にあきたらず「慎機論」を著わし、蛮社の獄に連座。国許に蟄居を命じられ、二年後「不忠不孝渡辺登」と書き残し割腹自殺した。絵は、西洋画法を取り入れ、肖像画などの写生画を得意とし、常に雁皮紙を綴じた画帳を持ち歩き、道中や人の応対中에서도興味が湧くと目に付く人物花鳥風物を手早く写生した。代表作「鷹見泉石像」「一掃百態」など。著書「西洋事情御答書」など。

渡辺崋山は、文政八年(一八二五)八月に銚子に来遊し、途中、水郷に遊び、津宮に久保木清淵を訪れ、亦、潮来を題材として「四州真景 潮来花柳」などの画を残している。この時のことは『刀禰川遊記』に記録されていると云う。

清宮秀堅著『下総旧事考』の「久保木竹窓先生伝」に、渡辺崋山が、清淵を評した文があり

登亦歎曰 余好写真 多藏古賢小照 求之古人中 先生殆小藤樹歟 何其貌之相似也

と書かれている。「藤樹とは、近江聖人と云われた中江藤樹のこと」久保木清淵の墓誌は、水戸藩南郡紅葉組郡奉行だった小宮

山楓軒が撰文し、立原杏所が書き、その中で

創書院於延方邨遂屈先生為師先生比月必來講經 子弟始知嚮學：：列席受教者每數百人

とあるように、延方郷校へは月二回来て講義を行い、常に聴講者が大勢であったことで知られている。

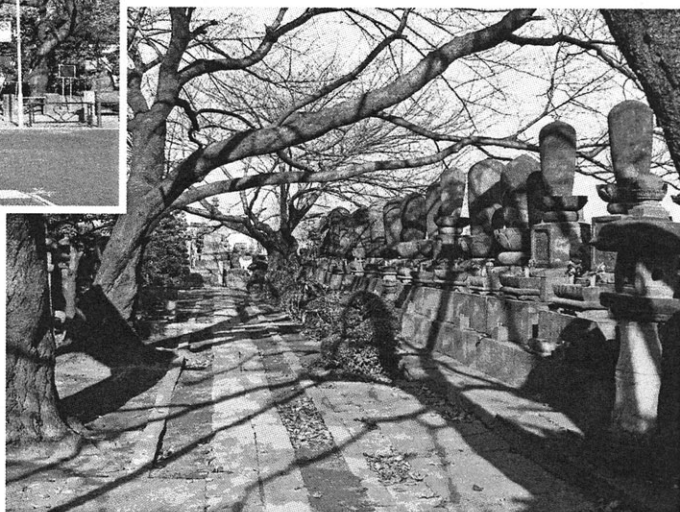
再び、春日通りに戻る。この辺は富坂といわれる坂道だ。中央大学の理工学部を左手に見て坂を上りきると右手に富坂警察署が見える。次の交差点を右折すると、突当りに大きな寺が見える。正しくは、無量山傳通院寿経寺(小石川三・一四・六)と云い浄土宗の寺だ。一般には伝通院で知られている。開山は了誉聖岡、常陸の国の生れの人だ。

了誉聖岡(りょうよ・しょうげい)(興国二・暦応四(一三四

一)〜応永二七(一四二〇)：南北時代の浄土宗の学僧。常陸の人。常陸岩瀬城主白吉義光の子。号は西蓮社、岡師・三日月上人ともいう。八歳で瓜連の常福寺の了実の弟子となり、以来諸国を遊歴し、真言・天台・禅などの各宗をはじめとして神道や和歌などの学問を身につけた。

応永二二年(一四一五)武蔵小石川に伝通院を創建、以後布教につとめた。

浄土宗の祖師として第七祖に数えられる名僧だ。著書「浄土伝戒論」「電通記糅鈔」など。



参道から見た本堂と、歴代住職の墓

伝通院は江戸時代に入り、徳川家康の御生母「於大の方」の埋葬の地となり、將軍家の菩提寺として帰依篤く、境内一〇万坪、御朱印六〇〇石、御蔵米二三〇俵の大寺院となり、慶長一八年（一六一三）には増上寺の学問僧三〇〇人を伝通院に移して、関東十八檀林の一とし学僧の修養勉学の場とした。この浄土宗・関東十八檀林の内、今の茨城県内にあるものは、瓜連常福寺（二〇〇石）・水海道飯沼弘経寺（二〇〇石）・結城弘経寺（五〇石）・江戸崎大念寺（五〇石）の四ヶ寺である。

〔潮来五丁目の大永山浄土国寺は、江戸崎大念寺の末寺である。〕

伝通院は徳川將軍家の菩提寺である。特に伝通院と云われるようになった初代將軍家康公の御生母於大の方「傳通院殿 蓉蒼光岳智香大禪定尼」をはじめ、二代將軍秀忠公の息女千姫、三代將軍家光公の御台所孝子の方など、数えられる墓石二十七基のうち、女性たちのものが多く、男性は八人を数えるのみであり、しかも、三歳以下のお子たちである。

現在、この徳川家の広大な墓地も一部整理され空地が造りだされつつある。

以前に比べ、墓石の位置も大分変わった様に思われる。

徳川家の方々の他に、清河八郎・沢宣嘉・杉浦重剛、小説家・詩人の佐藤春夫、小説家の柴田錬三郎、画家の橋本明治、そして光圀時代の水戸藩家老藤井紋太夫などの墓がある。



千 姫 の 墓

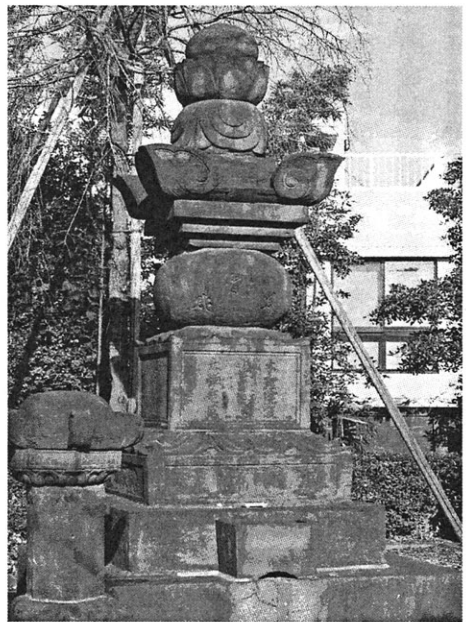
(区指定史跡)

於大の方のお墓、このお墓はいつ見ても美しく見事な、さすが天下人の御生母のお墓である。



於 大 の 方 の 墓

(区指定史跡)



三代将軍家光公御台所  
孝子の方の墓

(区指定史跡)

清河八郎（天保元（一八三〇）～文久三（一八六三））：幕末の志士。庄内藩郷士斎藤治兵衛豪寿の子。安積良斎・千葉周作らに文武を学ぶ。はじめ真木保臣・平野国臣らの尊攘運動に参画したが、寺田屋事件に失望して、文久三年（一八六三）幕府のあとで新撰組となる浪士組の結成に参加したが、近藤勇らの佐幕派隊士と対立、江戸に帰る。

文久三年四月十三日幕府見廻組佐々木只三郎らにより麻布一の橋に付近にて斬殺。享年三四歳

〔浪士組の徵募結成は、この伝通院山内処静院にて行われた。〕



清河八郎・阿蓮の墓

澤 宣嘉〔天保六（一八三五）〜明治六（一八七三）〕：幕末

から明治初頭の公卿・政治家。姉小路公遂の子。幼名隅麿、のち五郎麿、号は春川。三条実美らとともに尊攘派公卿として活躍。日米修好通商条約勅許に反対、尊攘親政を主張。文久三年八月十八日の政変による尊攘派失脚ののち、七卿落ちの一人として長州藩に逃亡。「生野の変」の首領に擁せられた。明治元年帰京し、明治政府参与・九州鎮撫総督・外国事務総督・長崎府知事、翌年外国官知事・外務卿を歴任し明治初頭の外交を担当した。

杉浦重剛〔安政二（一八五五）〜大正一三（一九二四）〕：教

育家・評論家。近江膳所藩士杉浦喜十郎斐章の次男。幼名讓次郎、号は梅窓・天台道士。

大学南校に学び、イギリスに留学、化学を専攻。明治一五年東大予備門長。明治一八年東京英語学校を設立、以後、教育家・評論家として活躍、国粹主義を唱え、同二一年政教社設立に参画。雑誌「日本人」発刊に尽力、読売新聞・東京朝日新聞などにも寄稿。のち国学院学監・皇典講究所幹事長・東亜同文書院長など教育界で活躍。

大正三年（一九一四）東宮御学問所御用掛、同年よりは久邇宮良子女王にも倫理科を進講。

主著「倫理御進講録草案」書



杉浦重剛の墓



藤井紋太夫の墓

藤井紋太夫（？～元禄七（一六九四））：水戸徳川家家老一

八〇〇石。名は徳昭。幕臣荒尾久成の四男、荒尾一家一族の水戸家に痞えていた奥女中藤井に養われ、その縁によつて藤井姓を名乗り、水戸家に仕えた。光圀に才能を見出されて小姓から次第に累進し家老にまで昇進した。

元禄七年十一月三日、四年前に既に隠居し、家督を兄高松藩祖松平頼重の子綱條に譲っていた光圀が出府し、この日、老中や諸大名を招いて能興行を催した。その幕間の楽屋で、光圀は紋太夫を自ら誅殺した。

原因は謎とされるが、紋太夫は老中柳沢吉保に好を通じ、己の野望を遂げんがため画策し、藩内を専制し、藩内対立の不穏な状態にあったので御家騒動を未然に防ぐためと云われている。

『水戸紀年』に「字文昭弁論絶倫博物強記ナリ。……外篤実謹厚、内佞奸邪曲、君徳ヲ壅塞シ政教ヲ損害ス……」とあり、文才と弁舌にすぐれ、豊富な知識をもち才覚のあふれた人物であるが、外見は実直そうに振舞うが内実はよこしまな性格で、主君の徳を塞いで政や教に損害を与え……と記している。

この事件は、連座した者はなく、『水戸紀年』に「罪ハ彼一人ニアリ、妻子以下悉ク宥赦アルヘキ」とある。

紋太夫が誅された席に居合わせた狂言作者の西村清林に光圀が「汝の菩提所へなりとも葬るべし」と仰せつけられ、西村家の菩提所伝通院塔中昌林院に葬られた。塔中昌林院が伝通院と合併した際、現在地に移転した。

伝通院を出て左折し、浄土宗が経営する淑徳学園前を通り善光寺坂を下る。途中、幸田露伴宅跡（小石川三・一七・一六）「小石川蝸牛庵」の跡があり都旧跡に指定されている。

少し下ると、沢蔵司稻荷（小石川三・一七・一二）がある。

むかし、伝通院の学寮（梅檀林といつて修行所）に沢蔵司という修行僧がいた。僅か三年で浄土宗の奥義を極めた。元和六年（一六二〇）五月七日の夜、学寮長極山和尚の夢枕に立ち「そもそも余は千代田城内の稻荷大明神である。かねて浄土宗の勉強をしたいと思っていたが、多年の希望をここに達した。今より元の神にかえるが、永久当山を守護して、恩に報いよう」と注げて暁の雲にかくれた。

そこで伝通院の住職廓山上人は沢蔵司稻荷を境内に祀り、慈眼院を別当寺とした。「廓山上人」とは、伝通院の中興第一世住職である。」

伝通院門前のそば屋に、沢蔵司はそばを食べによく行った。沢蔵司が来たときには、売上げの中に必ず木の葉が入っていた。主人は稻荷大明神であつたかと驚き、毎朝「お初」のそばを、靈窟と称する窪地の稻荷に供え、「いなりそば」と称したという。

善光寺の前を通り、千川通りを横断し柳町通り商店街を通り抜け白山通りになる。横断し巢鴨方向に北上。一〇〇m位の所の高層マンション、一階は紳士服の「コナカ」の店舗になつている、その一角に樋口一葉終焉の地（西片一・一七

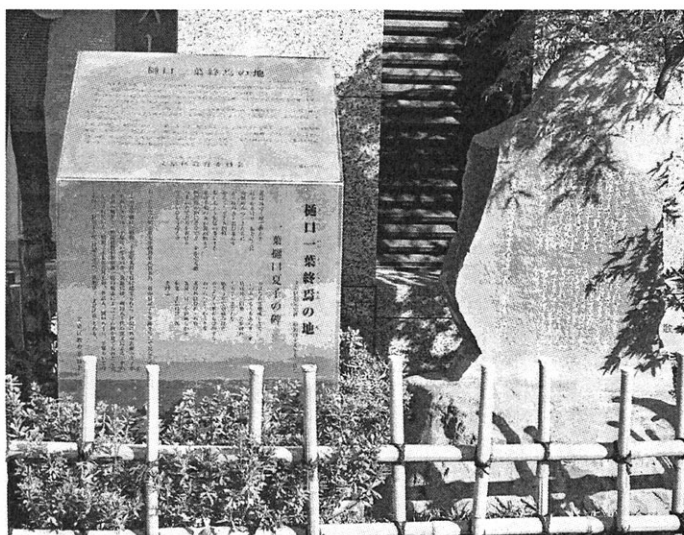
八）の記念碑が建てられてあり、区史跡に指定されている。

樋口一葉（明治五（一八七二）〜明治二九（一八九六））：小説家。名は夏子。幼少のとき旧本郷六丁目の法真寺脇の「桜木の宿」で一家は生活し、父の逝去後、次兄のもとに身を寄せたが旧菊坂町の貸し家に移った。十八歳のときである。この頃、安藤坂近くの中島歌子が主宰する歌塾「萩の舎」で歌作やそれに必要な古歌や古典の研究をした。家計を支えるためと、作家を志し、二四年一月『かれ尾花一もと』を執筆、この頃半井桃水に師事。二五年三月同人雑誌「武蔵野」に『闇桜』が掲載され初めて活字となる。続けて『うもれ木』などを書き、『うもれ木』で認められた。二六年七月下谷区竜泉寺町（現台東区竜泉）に移り、十ヶ月後の二七年五月に再び、この終焉の地、旧丸山福山町四番地に戻ってきた。

そして『にこりえ』『大つごもり』『たけくらべ』『ゆく雲』『十三夜』などを発表し、森鷗外・幸田露伴・斎藤緑雨などから絶賛された。

明治二九年一月二三日、二四歳の短い命を肺結核で終った。

墓は、杉並区永福一丁目築地本願寺和田堀廟所。



樋口一葉終焉の地

(区指定史跡)

当初、樋口一葉が歌作を学んだ安藤坂の歌塾「萩の舎」は、伝通院の参道を春日通りを横断してJR飯田橋駅の方角に下って行く安藤坂の途中にあった。そして近くの菅原道真を祀る、俗に牛天神と呼ばれる北野神社（春日一・五・二）の境内に、死後、門下生により建立された中島歌子の歌碑がある。

雪中竹

ゆきのうちに 根ざしかためて若竹の

生い出むとしの光をぞ 思ふ



中島歌子歌碑

中島歌子（天保二二（一八四一）〜明治三六（一九〇三））：明治期の歌人。幼名とせ、入間郡森戸村（一説には日本橋北鞘町）で生れ、父が水戸藩御用宿池田屋の養子となったので、池田屋が実家となった。

一八歳で水戸藩士林忠左衛門と結婚した。夫は元治甲子の乱で天狗党に加わり、入獄中に病没。歌子は、夫に連座して投獄されたが、のち釈放。

実家の池田屋に戻り、桂園派の和歌を加藤千浪に学び、実家の隣に歌塾「萩の舎」を開き、御歌所寄人伊藤祐命や小出繁の援助で、主に上・中流の婦人を教え、門弟一千余人といわれた。



中島歌子の墓

維新後の歌道の衰退の挽回に努め、歿日に従七位に叙せられた。明治三六年一月三〇日歿、六三歳。墓は、谷中霊園乙3号9側。

林忠左衛門〔天保一一(一八四〇)〜慶応元(一八六五)〕：水戸藩士。諱は以德、幼名子之助、通称忠左衛門、変名吉野三平。一〇石五人扶持。床机廻から馬廻組になり、安政五年の藩難、同六年の勅諭返納阻止に奔走した。元治甲子の乱の時、宍戸侯松平頼徳を警護して那珂湊に抛り、神勢館の戦で負傷した。宍戸侯が拘束され、榊原新左衛門等の自首に従い、久留里藩に禁錮中、元治二年正月元日に二

六歳で病死し、のち正五位を追贈された。墓は水戸市松本町常磐共有墓地。

樋口一葉終焉の地より、本郷台地を越え千代田線根津駅まで残り約二kmを歩けば、本日の史跡散歩は終り。

所要時間四時間、総歩行距離は約一二km、のんびりとした晩秋の散歩でした。

今回は、水戸藩の上・中屋敷のあった小石川・駒込を中心に歩いた。探せばまだまだ水戸藩関係のものはあると思う。

四十有余年もの昔、学校に通っていた頃、案内書もなく、ただ歩き廻ることで、何処に何があるかを探していたものでした。

今は、案内書も数多く、容易に入手でき、現場には案内標識・説明板も整備され、楽に見て歩くことが出来ます。

生涯学習時代とかで「史跡めぐり」などにも興味を持つ人も数多く、歩いているとそのような人達にも出会い、情報の交換もできることは、嬉しいものでもあり楽しいものです。

歴史上の事柄を理解し知る。それには関係した人々の著書などを読む事や、現場の探求が必要です。生誕の地、生活・活動した場所、それら遺跡の案内標示や記念碑、顕彰碑、そして墓碑。気候が良くなったら、歩ける内に、また少し歩くことに専念しよう。一步一步を楽しみながら。

## 参考資料

昭和一二年度

### 潮来町・町勢要覽

山澤 幸次

昭和一二年当時の旧潮来町（昭和三〇年二月一日の「昭和の合併」以前、明治三二年四月一日、潮来村と大洲村の二村が町村制施行により合併して潮来町になった。その潮来町その後）の『町勢要覽』を紹介する。「原文のまま、当用漢字使用」

#### ◎本町の位置・地勢

本町ハ行方郡ノ東南端ニ位シ北及東ハ津知村ニ接シ東南ノ一角ハ延方村ニ接シ西ハ八代村ニ隣リ南ハ北利根川ヲ挟ミテ千葉縣香取郡新島村ニ相對ス又南東ニ位スル外浪逆浦ヲ隔テ、鹿島郡ニ對ス東西一里廿町余南北殆ント三里ニシテ大字潮来大字大洲ノ二部落ヨリ成ル西北ハ稻荷山弁才天山天王台等ノ丘陵ヲ負イ市街ノ東南一面ニ低地ニシテ繞ラズニ水ヲ以テス大字大洲ト二重谷ノ間ニ灣入スルヲ内浪逆浦ト言イ田圃遠ク開ケ其間ニ多クノ河水溝

渠縦横シ北利根川外浪逆浦前川等ニ通ジ灌漑舟楫共ニ便ナリニ重谷ノ一部は北利根川を越エ狭長ナル土地遠ク東南ニ延ヒ外浪逆浦ノ西辺ヲ繞リテ香取町新島村ト接ス大字大洲ハ前川ノ南岸ニアリ西ハ津知村ノ飛地ヲ挟ミテ二重谷ニ連リ南ハ灣入シタル内浪逆浦ニ瀕シ北ハ前川ノ下流ヲ隔テ、延方村字曲松ノ地ト對ス東ハ延方村字徳島ニ隣リス共ニ平坦ニシテ島嶼ノ如キ地形ナリ潮来出島ノ稱ハ爰ニ出タルモノナリ

#### ◎本町の沿革

潮来ハ昔板古ト稱セシヲ天正十八年板久村ト改メ元禄十二年四月潮来トナス大洲ハ寛永正保年間ヨリ漸次開拓シ来リ板久村大須新田ト唱ヒタリシヲ天保十三年檢地ニ際シ板久村ヨリ分離一ノ独立村トナレリ往昔ハ常陸ノ大掾平氏ノ管ナリシガ其支族島崎氏ノ領スル所トナリ天正十八年二月島崎氏亡ビ佐竹義宣ノ封ニ歸シ慶長七年替リテ織田信吉水戸ニ封セラレ其領地ニ入レリ慶長十四年源頼房（威公）水戸ニ封セラレ其版圖ニ屬シ爾来二百五十有余年明治四年水戸縣地ニ入り明治五年二月新治縣ニ移リ明治八年五月茨城縣ニ隸屬ス明治二十二年四月一日町村制實施ニ當リ大字潮来ト大字大洲ノ両字ヲ合併シテ現今潮来町トナル

大字 二	小字 一一六	字・区数	広 葉		面積 二・〇〇平方里	面積広葉	最高(華氏) 九八度	温 度	東經 一四〇度二九四三	本町位置
			南北 三・〇〇里	東西 一・二〇里			最低(華氏) 一七度		北緯 三五度五九〇九	
区 一四										

九四一	總戸数	戸 口	計		其他	原 野	山 林	宅 地	畑 地	田 地	地 目	筆 数	反 別	賃 貸 価 格 (円)																
			宅地	耕地他											四七	二一〇	一九〇	一、二七九	一、二二、四六五坪	四九一・六反	八二、〇四二									
			一、二七九	七、四七一																		四・二反	六六・六反	二七・二反	九五・七反	一〇、七八九				
			一一二、四六五坪	六八五・三反																							三六、八六九	九三、九四九		
			三五六	農家数																									一、一五	其他
			四三一	商家数																										
四三	其他																													





卒業者数 創立以来	普通科 専科 計	校長	計	教室 応接室 職員室 その他	室別	室数	坪数(坪)	明治四十年七月九日 文部大臣ノ認可町立トナル	二、潮来女子技芸学校 学級数 四	校費総額	給料	雑給										
		一								商議員	五	校医	一九、八三六円	一四、〇四〇円	二、二五八円							
		九								三	一	一	四	六六・〇	四・〇	五・〇	五・〇	五・〇	五・〇	雑費	修繕費	需要費
		一								一三一・五	五六・五	四〇	六六・〇	四・〇	五・〇	五・〇	一、四〇二円	三八一円	一、七五六円			
三七三	一四七	五二〇																				

学級数	職員	生徒	三、(一) 潮来農商青年学校	雑給	給料	校費総額	就学生徒	計	教諭心得	教諭	教員							
				四	九	一〇二						二八	三〇	三〇	三	一	一	男
				四八三円	三、二四〇円	四、五〇一円						二年生	一	一	女			
				雑費	修繕費	需要費						三年生	三	二	計			
				一八八円	一九〇円	四〇〇円	計	四	一	三	計							

農家戸数		農 業	産 業	女子青年団	青年会	俸給及手当	経費総額	女	男	学級数	職員	生徒	三、(二)青年訓練所
専業	兼業			計	会員	会員	八三四円	一、三二〇円	一				
二五六	一一二			三六八	八五	一九五	其他	設備費	一八				
				会長 一	会長 一			女 二八	男 八				
				副会長 一	副会長 一	二〇五円	二七二円						

種別	筆数	反別(反)	農産物		
			計	小作田	小作畑
計			三、九一五	二、七二一	一、二〇四
水稻粳米	二、二五六	一、九九七			
水稻糯米	八一四	四二八			
陸稻糯米					
計	四、九二一	三、三三八、七七一			
種別 <td>作付反別(反)</td> <td>収穫高</td> <td>価格(円)</td> <td></td> <td></td>	作付反別(反)	収穫高	価格(円)		
水稻粳米	四、五五二	一一、一四八石三二二、一四四			
水稻糯米	三六四	九一三石 二六、四七七			
陸稻糯米	五	六石 一五〇			

種別	其他				種別	麦					
	作付反別(反)	收穫高	価格(円)	計		裸麦	小麦	大麦			
豆類	三八五	四五五石	七、一二九	六四一	八一四	四八	四二六	收穫高	一、〇六五石	価格(円)	一〇、六五〇
甘藷類	一一六	三七、七〇〇貫	三、七七〇		一、八二四石	九六石	六六三石	一、二七二	一、一五二	一二三、〇七三	
蔬菜類	一三八	四九、七三三貫	七、四六〇		二	一、二五〇貫	五〇〇	一八、八五九			
果実類	二	一、二五〇貫	五〇〇								

種別	畜産				種別	蚕繭						
	飼養戸数	頭数	牝	牡		計	黄繭	白繭				
牛	一一二	一一二	一〇五	一七	三、二〇〇	一、七二九	二、六五四	一、三七七	掃立数量(瓦)	收穫高	価格(円)	六、五一〇
馬	三	三	一	二			五四六	三五二	一、七三五	八、二四五		
豚	三六	三一〇	一二五	八五								
鷄	三三〇	一、六二六	一一五	一一								
鴛	五	二五	一一	一一								
卵	四一六	收卵(個)	一二〇、九六〇	三、〇二四								

種別	工産									
	戸数	生産数量	価格(円)							
酒類	二	一、八九三石	一〇九、七八四							
醬油	三	七〇〇石	二八、〇〇〇							
製氷	一	三六〇、〇〇〇貫	一二、二〇〇							
織物	一	二、〇七二反	二、四〇一							
染物	八	二、〇七七反	七、四四〇							
木製品	二六		一九、九〇八							
製繩	二	二〇、〇〇〇貫	三、八五〇							
竹製品	二		三二〇							
土焼	二	一、二〇〇個	四二〇							
油類	一	二、二八〇斤	八六〇							
薬製品			四六、八四五							
其他	六六		一一、六一〇							
計	一一四		二四四、六三八							

種別	町農会				水産			
	戸数	生産数量	価格(円)	水産従業者	漁船	漁船	漁船	
佃煮	一	六八四貫	二、〇五二	七一人	六〇艘			
鯉		二、五八六貫	五、一七二					
ウナギ		一、二五〇貫	三、五〇〇					
其他		六、五七〇貫	六、一八〇					
計		一一、〇九〇貫	一六、九〇四					
会費割	二二四	事務費	三二四					
地租割	七二〇	事業費	五八九					
縣郡補助	一二四	会費	一七五					
其他	二二七	其他	一八七					
計	一一、二六五	計	一一、二六五					

四箇所	コンクリート橋	二、七四六	橋梁	渡船場	計	道路延長(米)	道路数	町村道	土木
		五六							
一四箇所	木桁橋	二二二							

潮来農業倉庫取扱数販売数量 (自一一年 六月〜至一二年一二月)				
計	玄米	一四、一二七俵	小麦	一、五四五俵
	糯米	七九六俵	其他	八〇俵
		一六、五四八俵		

瓦斯倫ポンプ 四	組数	二	消防	警部補派出所	一	警備
	部数	二		警部補	一	
	人員	四三五		巡查	二	
手押ポンプ	八					

痘種	善感	隔離病舎	獣医師	齒科医師	縣医師	内科医師	衛生
		一	一	三	一	四	
不善感	検査未了	病院	ア	産	看護婦	薬剤師	
			ン	婆			
二〇四	一	二〇	マ				
計		二		七	六	一	二

預入口数 五、八四四	預入金高(円) 三九〇、六三四	金融	
		郵便局 一	無尽会社 一
潮来郵便局		銀行 二	質屋 二

水防常備材料	水防常設員 一五	水防
空俵 一、二〇〇	閘門 一九	
蛸竹 一〇〇 松丸太 五〇 縄 五〇 蕙 一〇〇	掛矢 四	
斧棒 三〇 カンテラ 三〇	鋸 二	
	鉈 四	

口数 金額(円) 一、六二五 二、三四八	貸出	質屋	加入口数 三、七八六	常磐無尽会社	年末現在高(円) 二九一、五五二	返済高(円) 一、二三五、七七七	貸出高(円) 一、〇三九、六三二	年末現在高(円) 四九二、三七六	引出高(円) 一、八八五、九七一	預金高(円) 一、九一八、〇五二	銀行
口数 金額(円) 一、三五二 一、六七一	受出										

赤十字	赤十字及愛国婦人会				
社員数	八七	佩有功	特別社員	修身社員	正社員
一七	一	一七	二〇	五〇	
会員数	一	有功会員	特別会員	通常会員	
一一七	一〇	一〇	九七		

郵便 郵便切手売下所 郵便函五	郵便電信電話局	一	汽船・モーター発着所	二
	郵便切手売下所	五	定期自動車発着所	二
貨物自動車	四	サイドカー	二二〇	
自転車	五八〇	小車	八八	
人力車	二	自動車	二五	
農漁船	三〇〇	牛車	一五	
艇客船	一九	荷馬車	三	
発動汽船	一四			

運輸

財政

町税(円)		県税(円)		国税(円)	
地租付加税	三、〇一七	地租付加税	六、二四五	地租	四、五九二
特別地租付加税	二二六	特別地租	四九九	所得税	二、三四八
営業収益付加税	一、四一二	営業収益付加税	一、六七四	資本利子税	四六
家屋税付加税	一、二〇〇	所得税付加税	八三七	計	
計	二八、一六八	計	七二、六三九	酒造税	六三、三二〇
営業税付加税	一、七四〇	家屋税	二、四四八	營業収益税	一一、三三三
雑種税付加税	四、〇九一	營業税	二、二七四		
特別税戸数割	一六、四八二	雑種税	二、九三八		
		計	一六、八八八		

衆議院議員選挙有権者数 一、〇九五 県会議員選挙有権者数 一、〇七三 町会議員選挙有権者数 一、〇七三	選挙	計		町税 二八、一六八	歳入	国庫下渡金 七、七二六	縣補助金 八二六	交付金 八二〇	使用料手数料 三、二七八	繰越金 三〇〇	其他 三、五九六	計	神社費 二〇	歳出	會議費 五二九	役場費 七、六八五	土木費 三一〇	教育費 二六、三七四	警備費 九一六	衛生費 四〇四	公債費 四、八二三	其他 三、六五三	經常部計 三七、五八九	臨時部計 七、一二五	計 四四、七一四
		四四、七一四	四四、七一四																						

東京へ 二五里〇〇丁 水戸へ 一五里二〇丁 土浦へ 一〇里三二丁 銚子へ 八里二七丁	麻生へ 二里〇六丁 鹿島へ 二里〇七丁 佐原・香取へ 三里強 高浜へ 一〇里二〇丁	主要地へ里程	町長 一	町機関	議員 一八	助役 一	収入役 一	書記 六	給仕 二	私丁 一	水防委員 一五	商議員 五	学務委員 七	区长代理 一四	区長 一四	方面委員 四	統計調査委員 七	家屋税委員 六	町医 二	学校医 三
			一		一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

官公所及会社	
町立女子技芸学校	稻荷山
潮来製氷株式会社	西一丁目
東京電燈潮来出張所	上一丁目
水戸地方専売局潮来煙草販売所	同
千葉合同銀行潮来支店	同
常陽銀行潮来支店	下一丁目
警部補派出所	二丁目
潮来町役場	同
青年会館	同
潮来郵便電信局	同
常磐無尽潮来出張所	上一丁目
潮来尋常高等小学校	四丁目
郷社素鷲熊野神社	六丁目
土浦区裁判所潮来出張所	同
農産物検査所	五丁目
潮来農業倉庫	四丁目

名所古跡
郷社素鷲熊野神社 祭神は素盞鳴命ト祭神三体ノ熊野神社ニ社合祀ニシテ 六丁目ヨリ参道約二丁大六天山ニ在リ毎年八月七・八・ 九日大祭ヲ行フ
長勝寺 禪宗ノ古刹ナリ、二丁目ニ在リ文治元年源頼朝公ノ創立 ニシテ北条高時ノ寄進ニナル古鐘ヲ在ス明治四十四年 八月九日此古鐘ヲ国宝ニ指定セラル尚歴史ヲ語ルモノ 多ク藏ス
稻荷山 西一丁目県道ヨリ約三十歩山上老杉鬱トシ四時風光ノ地 トシテ山上ヨリハ全町家ハ勿論北利根川ヲ隔テ、十六島 佐原、香取ヲ一眸ノ内ニ納ム

潮来出島ノあやめ

人工ノ花菖蒲ニアラズ野生ノ眞菰ノ中ニ野生シ季節開花スル最モ雅趣ニ富ムモノナリ現存ス

潮来八景

天皇山の秋の月	拍手のもるゝ木の岡や朝の月
長勝寺の晚鐘	鐘の音や残る雲なき秋の暮
稻荷山の晴嵐	昼日中狐の声や青嵐
浜町の暮雪	雪毎に積る思や夕からす
浅間山の落雁	雁なひく出島にあしのしらるかな
園部川の帰帆	涼しさや眞帆引かけて帰る船
潮浪里坂の夕照	松はかりまつの色なりむら紅葉
十二橋の夜の雨	さぬぎぬに十二のはしの時雨かな

本要覽ハ主トシテ昭和十一年末現在ノ事実ヲ揭示シタル  
モ之ニ抛リ難キモノハ最近ノ事実ヲ掲出シタリ

昭和十二年四月

茨城縣行方郡潮来町役場



昭和一二年一二月発行「潮来地方の地形図」

潮来市郷土史研究会會員名簿

平成十八年三月一日現在

潮来地区

一班

塚谷若須内山  
本 楨田田保  
誠玄の益節輝  
一明ぶ郎子信

吉打永鈴大伊塚塚  
川越野木塚藤本本  
栄 信大昌新  
俊子忠和也介明郎

二班

三班

四班

草飯酒長柄岩  
野田井川津本  
政精喜勝吉  
江一世彌男美

穴磯磯磯磯增加大関  
倉山山山山田藤崎戸  
正 康正き清 松正  
義綾雄男よ衛勉雄敏

五班

六班

松穴松関小山佐小草  
崎倉本戸林野藤沼野  
す園美美俊信泰文京  
急江江枝夫雄弘江子

久石村石村  
保津田津田  
芳寿 寿米  
茂雄和夫蔵

成塚植窪  
井本田谷  
弘 光悌  
志孝雄二郎

津知地区

一班

二班

三班

遠田仲吉  
山崎沢川  
智一章成  
隆郎寿作

四四植前兼兼石小土秋  
ノノ宮宮田田平平井島子永  
洋巳義当和好茅  
子典継子郎一子淳昭守

山堀大小荒  
本越川杉張  
和貫清光忠  
男一一彦男

今中堀塚藤石	四 班	富下坂渡
泉田井本井井		沢河上辺
幸孝 孝 秀		敏智文兵
雄憲守生弘雄		子夫善衛

松寺寺松山山立遠	二 班	穴那藤小多高石石窪窪高萩内	一 班	延方地区
崎沢沢田澤澤野藤		井木原沼田田田田谷谷田原田		
喜田昭康三幸誠勝		民久正正 定和昌益 泰善正		
志代鶴子夫子子次治久		子子子子司仁雄也司雄浩司男一		

浅河柏木渡大黒高篠尾	四 班	茂篠草宮志塙黒今	三 班
野井崎村辺崎須須塚崎		木塚野本村 須泉	
三計一 英 渡義康		宗節登と俊幹勘	
郎雄雄洋雅良栄雄子廣		一夫雄子男雄二敬	

中立茂額	六 班	西土折仲今高篠鹿鹿	五 班
山野木賀		山子笠沢泉田塚取取	
康米茂藤重		た幸庄絹英 依 好	
雄子穂郎		か子三一 枝一清子勝郎	

大生原地区

一班

小荒今小小小小浦小浜  
沼原泉沼沼沼沼橋沼野  
善利右み三由政信昭元  
治勇門子男男美雄郎市

二班

根根榊根新荒石小根平  
本本原本本橋原津沼本林  
昌豊照和真富ひ　　智  
弥治夫鑑澄蔵え勇通善

三班

関菱岸岸岸宮  
川木根根根内  
家正英栄秋正  
光治彦治夫紀

四班

石関篠津風平  
津　崎賀間林  
光　　元  
一一亨信市弘

五班

関藤藤箕箕  
川島島輪輪  
孝正一大  
雄孝郎巳晃

牛堀地区

一班

坂坂高相宮磯永  
井　橋田本山山  
ト春文里健  
勝吉子江雄子治

二班

坂飯坂  
本田  
照寿尚初  
子満史枝衛郁成

三班

坂山内高前  
本田野塚島  
幸健幸  
清子造一浩

四班

今大前前今明  
泉島島島泉間  
正益清信  
要満雄男衛夫

五班

前山井茂茂窪  
島本関　木次谷  
英留和フ良と  
夫男夫子之丞く

六班

森内 森内  
重兵衛 義巳

七班

山口 茂木 茂木 茂木 土子 大崎 塩入  
あや きよ子 ふみ子 武夫 寿夫 勝弘 義之 塩子

その他の地区

植田 藤岡  
敏健 雄夫



# 編集後記

# 編集委員

この冬は近年にない寒さです。雪も数日のあいだ残り、水道管は凍結し、庭には大きな霜柱が出来ました。暫らくは庭の掃除はお休みとし、「ふるさと潮来」の編集に専念することにしました。

地球が温暖化になると、寒暖の差が大きくなり、寒さ、暑さが厳しくなるのだそうです。クールビズやウォームビズ。「冷暖自知」人に教えられるものではないのです。寒さ・暑さくらい自己が防衛すればよいのです。

「ふるさと潮来」、この冊子でなく、我々を育ててくれた故郷、本当に汚い地域になってしまいました。ゴミの散乱、空缶はポイ捨て。汚れきった水。皆、我々人間のなせる業です。一人一人が自然を大切にしよう心がけたいものです。

それにしても、相変わらず冊子の「ふるさと潮来」への投稿は少ないです。次年度こそは投稿を待っています。編集者が自ら頁数の補完をせずとも良いように。宜しくお願い致します。

委員長	山澤幸次	委員	額賀藤重郎
副委員長	谷玄明	委員	荒原勇
小杉光彦	尾崎廣	委員	榊原照夫
久米衛	関川光	委員	津賀信
塚本昌明	伊藤大介	委員	箕輪晁
関戸正敏	石津寿満夫	委員	坂井勝
小沼文江	秋永守	委員	宮本文雄
下河辺智夫	寺沢昭夫	委員	坂本照子
草野登美雄	折笠庄一	委員	内野健造
事務局長	窪谷悌二郎	委員	今泉要
事務局長	窪谷悌二郎	委員	茂木次良之丞
事務局長	窪谷悌二郎	委員	森内重兵衛
事務局長	窪谷悌二郎	委員	土子寿夫

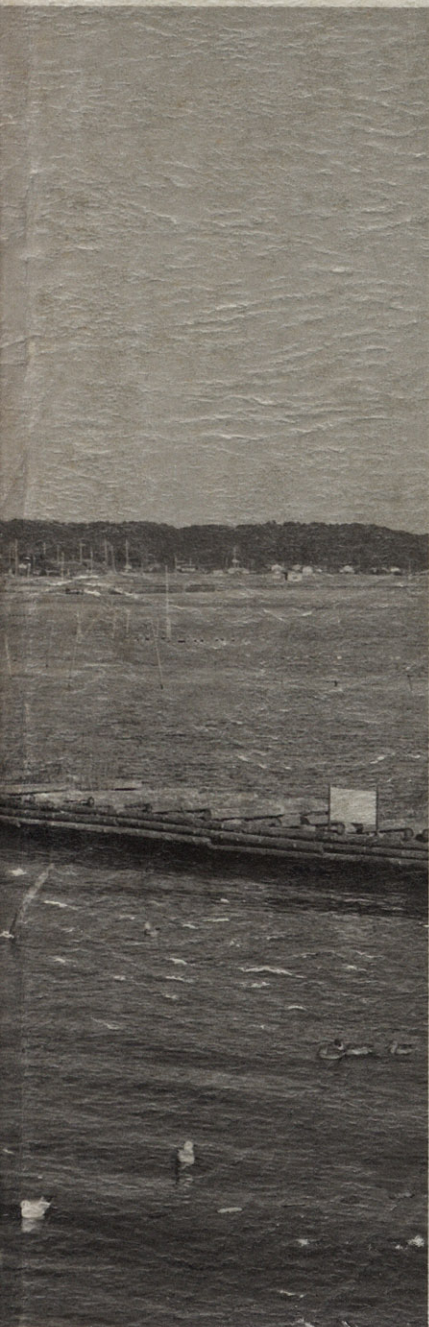
ふるさと潮来第二十二輯

平成十八年三月三十一日 発行  
茨城県潮来市潮来

編集者 潮来市郷土史研究会  
発行者

印刷所 旬かつら印刷





表紙写真…白鳥の里

潮来市立図書館



22311556231

3.14